
魔法少女リリカルナノハサン

狂乱者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルナノハサン

【Nコード】

N4846P

【作者名】

狂乱者

【あらすじ】

目覚めたら殺された。

少年の意識は闇に沈む――――

再び覚醒すると、そこには神様がいて……………

王道的な展開を完全に打ち砕く物語。

オリジナル主人公が常に最強だろうか？

そんな訳はない。

時には、違う結果だって起こりえる。

これは主人公が主人公でない物語。

（今作は「アンチオリジナル主人公」という珍しい作品です。また「リリカルなのは」以外の原作キャラクターは「原作キャラに非常に近いオリキャラ」となっております。ただ、元となったキャラ、ほぼそのままなキャラクターも存在します）

プロローグ（前書き）

この度は、今作品に目を通して頂き、誠にありがとうございます。

この作品は「オリジナル主人公最強物が好き」という方には不快に思う部分が多々あります。

その点ご注意ください。

感想、批評等ございましたら、是非、御願致します。

短いながらも、この物語で皆様の時間を潰せたら、と思っております。

では、ごゆっくり。

プロローグ

「うう………此処は………?」

そんな感じで目を覚ました男が一人。
実に愉快滑稽。
さっさと排除。

「おや。起きましたか? では、さようなら」

鮮血が舞う。
目を覚ました少年の腹部に突き刺さる凶器。
純粹なまでの刃物。
包丁。

「えっ?」

何と言うマヌケな声。表情。

「ふむ………まだ死んでいませんか」

もう一回、突き刺す。

もう一回。

何度も何度も。

繰り返し繰り返し繰り返し。

「あくっ……！」

気が付けば吐血する少年。

それでも包丁の上下運動を止めない男。

腹部からは臓器が「こんにちは」と言いたげの顔を覗かせており、血液は元気に外部に飛び出していく。

男性の顔には実に愉快的な笑みが浮かんでいる。

ニコニコと。

何時までもニコニコとした笑み。

「……やはりダメですか。まあ、仕方ありませんねえ」

男のその言葉だけが少年の耳に残り、意識は闇に沈んだ。

実にシンプルな空間で、真っ暗な空間で、少年は再び死んだ。

笑んでいる男性は顔を崩さずに舌打ちをし、死体を蹴り飛ばす。

「愚ーが」

「おい。おい、起きんかい」

「ううう………?」

目が覚めると、長く白い髭を蓄えた爺さんが目の前にいた。
当然というべきだろうかだろうか。
いきなりの出来事に驚くのは人間の性だ。

「うわお!？」

「な、何じゃあ! ビックリするじゃろうがあ!」

「な、なな何段だ! アンタ!」

「何段とか、パニクリ過ぎじゃ! 何なんだ! じゃろうが!」

少年は両手をはためかせ、驚きを露にしつつも、現状を把握しようと脳みそを働かせる。

昨日も平凡な人生を送り、家のベッドで眠ったハズ……

だが、目の前には爺さん。

周りはただただ白い空間。

此処は、何処だ?

「ふむ。状況を把握したいようじゃな」

少年の考えを見抜いたように爺さんは話しかけてきた。
とりあえずコクコクと首を縦に振ってみる。

「よかろう。此処は『天国の入り口』。それで、ワシは『神様』じや」

「……………え？」

時よ止まれ。

思考フリーズ。

何も考えられません。

「いや、それがのう……………ワシの手違いで、お主は死んだのじゃ。眠っている間に」

「……………はあ」

そんな気の抜けた返事しか出来ない。

それはそうだ。

寝ている間に手違いで殺されたとか言われれば、誰だってそうなる。

というより、この現状を理解出来ないだろう。

「それで、お詫びといっってはなんじゃが……………お主に自由な力を与え、好きな世界に転生させてやろうと思ってな！」

「……………それはまた」

元氣良く両手を高く上げる爺さん、否、神様。

よくある二次創作小説みたいだなあ、と少年はボンヤリと思って

みた。

特に意味は無いのだが。

「え……てか、本当に死んだの？ 俺」

「うむ。今頃、死体は灰になつとるな」

衝撃の一言。

だが、どうしようもない。

頬をつねってみるが、痛い。

どうやら一番確立が高かった夢の可能性は潰えたようだ。

これは痛い。

どうしようもない虚脱感とこれからの方向性に対する不安が同時に襲ってきた。

ああ、怖い怖い。

「え……じゃあ、どうすれば……」

「だから好きな世界に転生させてやると言っているじゃろうが」

不毛な会話が続く。

とりあえず、渋々、状況を把握した少年は現実を受け入れ、目の前の爺さんの言葉を信じることにした。

かなり半信半疑であったが。

「ん……それじゃあ、行き先は「リリカルなのはS t S」の世界で」

「また王道じゃのう……まあ、ええわい。それで、どんな力が欲

しいのじゃ？」

「えっと……………制限とかあんの？」

神様の言葉に、すぐさま「制限」という単語を思いつく少年は、中々、頭のキレる人物なのだろうか。

否、心配性なだけだろう。

「結構あるかの。出来るだけ頑張るが。ちなみに数は二つまでじゃ。ワシは悪魔で『この世界の神』じゃからのう。他の世界への干渉は、本来ならば禁じられているのじゃが、今回は特別じゃ」

「あ、そう……………それじゃね……………」

思案する。

どうせなら、最強の能力が良いだろう。

そうすれば、なのは世界で起きる全ての惨劇を防げるから。

少年は実に正義の味方である。

善悪でいえば、迷わず善を選ぶ少年であった。

そんな少年の選んだ能力とは……………

「……………決めた。一つは制約の無くなった空想具現化……………いや『妄想具現化』とでも称しておこう」

「妄想具現化じゃな。エッチイのは禁止じゃぞ。あと戦闘時のみしか使えんからの」

懐から取り出したメモ用紙に、これまた懐から取り出したペンを
使い、少年の望む能力を書き加えていく神様。

だが、勝手に不都合な制約を付けるとは、何気に厳しい神様である。

「マジか……まあ、仕方ないか……それで、次は……身体能力
の強化かな。超人ぐらいに」

残念がっているのは戦闘に関してのみにしか使えないからだ。

まあ、何時でも何処でも自由にそんな能力が使えたら原作ブレイ
クというレベルじゃねーぞ、って話になるので仕方ない。

「ほいほい。まあ、修行とかは面倒じゃしな。最近の若いもんはこ
れだから……」

神様はそんなご老体みたいなのを言いながら、メモ用紙に文字
を書き加えていく。

やがてペンを操っていた手が止まり、思い出したように神様は告
げる。

「そうそう。この「妄想具現化」じゃが、ちょっと面倒臭い設定に
なつとるからの」

「は？　といいますと？」

神の言葉に首を傾げ、反応する少年。

神様はメモ用紙とペンを懐に仕舞い、右手を軽く顎に当て、説明
を始める。

「例えばじゃ、『煩い蠅を捕まえよう』とお主は思った。その場合、この「妄想具現化」を使えば、蠅は空中で止まる。という訳じゃが」

「うんうん」

「実際は『空気が手の形を採り、その手が蠅を捕まえることで動きを止める』ということになるのじゃ」

「……………つまりどういことだってばよ？」

少年の反応に溜め息を吐き、両手を軽く上げ、首を左右に振る。
さしずめ「やれやれ」のポーズといったところだろうか。

「つまりじゃ、『手が生成されて、対象を捕まえるまでに僅かながら時間がある』ということ、即ち『全て、思い通りになるとは限らない』という訳じゃ」

「……………ええ。何それ。ダメじゃん」

少年の目は細め、嫌悪の眼差しで神様を見始める。

この説明だけは不足だと感じた神様は、今となってはあまり効果のないフォローを付け加えることにした。

「ま、まあ、殆どの事態には対応できるし、大丈夫じゃって」

「……………」

「な、何じゃあ！　ワシを誰だと思うとるんじゃあ！　この世界の神様じゃぞお！　この天下を納める神の一人なんじゃぞお———！

！」

「ダメなもんはダメだ」

などという会話をしながらも、一応、少年の願いは叶った。
残るは転生先で原作キャラ達を救うのみ。

少年の幼い頃からの夢である、正義の味方になる好機がやって来たのだ。

「ほいじゃ、送るぞい。達者でな」

「何か未だに信じられないけど……まあいいや。ありがとな。神様」

一応、手を振ってくれている神様に対し、少年も手を振る。

だが、別に神様が離れていく訳でも、自分が離れていく訳でもない。

では、何故、手を振るのだろうか？

「気をつけてな」

神様がそう言って、手を振ると、少年のいた床に穴が開く。

これまた思考が止まる、かと思われたが、そんな猶予も無かった。

「へ？」

そう最初に起きた様にマヌケな声を出し、少年は落ちていった。
神様が笑顔であったのは、落ちていく少年に知る由も無い。

「やれやれ。まあ、最強の能力じゃろうから、負けることはないじやろう」

床の穴が消滅していくのを見届けた神様。

後は天国に戻って、少年の様子を見るのみ。

そう思い、消えた穴のあった場所に背を向け、一步、踏み出す。

「おい。糞幻影。俺の名を言ってみろ」

「は？」

天国に戻ろうと、振り返った神様の背中からかけられた声。

その後、強烈な銃声が響き、軽く吹っ飛ぶ神様。

背中には無数の弾痕が開く。

「ぐっ……………!?!」

痛みに耐えつつも、正気を保っていられるのは神様たる由縁か。

だが、それも無駄な足掻き。

「……………」

すぐさま第二波がやって来る。

吹っ飛んだ神様の背中に張り付き、首筋に短刀を付きつける黒い影。

「なっ……………」

眼球を背中にくっ付いた存在の方へと必死で向けるが、黒い影の正体は掴めない。

驚きの言葉を最後に、神様の首は斬り落とされた。

影は黒煙となり、神だった死体から離れる。

流れ出るハズの血液は全く出ず、倒れるのは中身が空洞な死体のみ。

一方、銃声を響かせた男はつまらなそうに、死体を眺めていた。

「やれやれ。幻影のお相手も退屈で退屈で仕方ありませんよ……………」

また別方向から現れた男性。

転がってきた神の首を片手で拾い、マジマジと眺める男は微笑んでいる。

ニコニコと。

「というか、お約束過ぎる展開ですねえ……………神様とか、穴に落ちるとか……………ああ、痛い痛い。しかし、これにて最後ですがねえ」

最後に。

神の頭を蹴り飛ばし、持っていた短刀……包丁を投げつけた。

第一話「とある主人公の原作ブレイク」

「あてて…………くそう…………あの神めえ……………」

倒れている状態から上半身を起こし、右手で後頭部を摩ってみる少年。

どうやらタンコブは無いらしい。

全身打撲も無し。

流石は超人的身体になっただけのことはある。

「おっと…………此処は……………」

自分の身体に支障がないことを確認し、次に少年は自分のいる場所を把握しようと努めた。

辺りは火の海。

燃え盛る建物内に、その少年は飛ばされたのだ。

「あっつ！ てか、此処は幼少期のスバルがいた所だよ……………」

少年の記憶によると、どうやら此処はスバルが高町なのはに救出されるべき場所らしい。

よくよく耳を傾ければ、少女らしき泣き声が聞こえてくる。

「あー……………そうだな。もうキャラ達に関わっておいた方が、何かと楽かな」

そう考え、少年は行動に移る。

まずは起き上がり、とりあえず声のする方へと足を運ぶ。

事態はそう気楽なものではないのだが。

「えっと……………ここら辺かな……………」

泣き声を頼りに、少年はだだっ広い場所にやって来た。

まるで巨大なホール。

見れば、遠くの方に女性を象った銅像の背中が見える。

「アレがスバルに向かって倒れるんだよな……………それじゃあ、アレを壊すか、その前にスバルを助けないと……………っ!？」

少年がスバルを助けに行こうとした矢先、素人でも分かる程の殺気が、背中から感じられた。

「おい。貴様。俺の名を言ってみろ」

振り返った少年の前方にいる男。

顔を金属ヘルメットで隠し、やたら刺々しいデザインのジャケッ

トとズボンを履いた人物。

右手に持ったショットガンらしき銃が、少年に向けられている。

「なっ、何だお前……原作にはこんな奴いなかったぞ……てか、明らかに世界観ぶち壊しのキャラクターじゃ……ぐうっ!？」

何処かで見たことあるような恰好と似た台詞。

そんな男に出会った瞬間、少年の脳裏にノイズの掛かった映像が流れ出す。

「糞餓鬼があ!! 邪魔すんじゃねえ!!」

闘っているのはあの暴漢と蒼色の髪に長い鉢巻をした少女。

「ここから先には行かせない……! 私がないのはさん達を……皆を守るんだっ!!」

少女は叫び、男に向かって突撃を始める。

男の方も怒鳴りながら、ショットガンを少女に向け、放つ。

そこで映像は途切れた。

少年の意識が戻った時には、時は殆ど進んでいないように感じられた。

相変わらず、男は少年に向かってショットガンを向けている。

だが、次の瞬間には躊躇わず、その弾をぶちかました。

「くっ!？」

神によって与えられた身体能力により、側転で弾丸をかわす少年。先程の映像について思案したところだったが、それどころではないようだ。

一方、男の本当の狙いは少年では無かった。

「前に俺様を傷つけた罰だ。死ね。糞餓鬼」

「なっ……………!？」

男の狙いは直線状にあった女性の銅像。

ショットガンの弾によって銅像は根元が崩壊。

残った部分が幼きスバルに向かって倒れ始めた。

「ギン姉……………どこお……………?」

男に気を取られている内に銅像の目の前までやって来ていたスバルに人の手が加えられ、崩壊した銅像が倒れ掛かる。

「痛いよ……………! 熱いよお……………!」

余りの熱と擦り傷などにより、スバルは銅像から背を向ける恰好で膝を付いて倒れていた。

彼女は銅像の破損には全く気付いていない。

「くそっ！」

即座に状況を判断し、少年はスバルに向かって駆け出す。
目の前の男のことなど全く気になどせず。

自分に最初に与えられた能力のことも忘れて。

だが、それがいけなかった。

「おい。俺様を無視するんじゃない」

無慈悲な男のショットガンの一発が少年の右足を貫いた。

「がっ………！？」

始めて経験する激痛に、少年は倒れこむことしか出来なかった。
そうしている間にも銅像はスバルを押し潰すべく、重力に従う。

「あっ………あああ！！」

叫ぼうとするが、右足の痛みがそれを邪魔する。

今まで感じたことの無いハズの痛みは少年の思考を歪ませ、理性すら失わせようとする。

だが、どんな状況にも救いは訪れる。

「良かった……！ 間に合った………！ 助けに来たよ………！」

エース・オブ・エース。

高町なのはがスバルを救っていた。

科学的に発展した魔法を操り、銅像を止め、そのままスバルや自分
に害の無いように破壊。

その手際の良さは少年の比ではない。

「良く頑張ったね。偉いよ」

少女というには程遠い、頼もしい瞳でスバルの右肩に触れるのは。
は。

「安全な場所まで、一直線だから」

そんな彼女にスバルが憧れるのも無理はない。

しかし、同時に悲劇も訪れるものだ。

「ちょっと待ってて………えっ!？」

スバルを抱えようとした、正にその時。

高町なのはの周辺を、魔力とは違う物質状の珠、六つが囲んだ。
同時に、黄土色の波状が管理局のエースを縛り付ける。

「ぐっ……………これは……………!?!」

驚愕するなのはと脅えるスバル。

スバルは波状に捕らわれてこそないが、炎の海により精神が参っていた状態に追い討ちをかけるような不安要素が追加されたのだ。

既に泣きそうである。

だが、泣かないのは強い子の証拠でもある。

それでも、一旦、救われたように思った後の出来事だから、尚更性質が悪い。

「死と死の行き先は末広がりよ。メデタキな」

その声の主はなのはの上空から現れた。

浮遊する小さい神輿に胡坐をかいて座り、全身黒い包帯で覆われた人物。

そのしゃがれた声からして、男性であることは分かる。
かなりの年配らしいことも。

「貴方は……………?」

普段ならば職務質問でもするのだが、今回ばかりは違う。

この男の容姿は異常だ。

自分を捕らえている以上、敵なのは間違いないが、普通の犯罪者とは一線を成す『何か』があるのは分かる。

「強き女は好かぬ。主のこととは言うまいが」

なのはの質問を完全に無視し、男は両手を奇妙に動かす。
すると、高町なのはの身体は本人の意思とは無関係に宙に浮き始めた。

「ぐっ……………！」

「あうう……………」

これから攻撃されるであろうことが容易に想像出来たのはと、
これから何が起こるのか、それよりも目の前の男が怖くて泣きそう
なスバル。

二人共、今は何も出来なかった。

「ヒヒッ。実に下らぬ企みよ。記憶さえ消せば問題あるまいて。何。
傷が残るのみよ」

男の歪んだ笑みが包帯の上からでも分かった。

「何なんだよ……………コレは……………」

少年はうつ伏せに倒れ、右足を抱えながら、前方の光景を啞然と
見ていた。

本来ならばスバルは高町なのはに救出され、此処に広がる炎も無
事に消化されるだけのハズだったのに。

「これ自体に意味はねえんだよ。屑が」

少年の頭を踏みつけ、背中に銃口を向ける。

「お前らは……一体……!!」

少年の怒気が籠った一言さえ、目の前の男の怒りを強めるだけの油に過ぎない。

「あぁん？ 聞き飽きたんだよ！ その台詞もなぁ!! 身体能力だけ強化された奴がグタグタ抜かすんじゃないやねえ!!」

その一言で少年はあることを思い出す。

「あっ」

「あぁ？」

実に簡単な事であった。

落ちてきた場所がいきなりスバルがピンチの場面だからすっかり忘れていた。

少年には、最強の能力があったではないか。

「クッ……ククク……感謝するよ」

思わず笑いを堪えきれず、笑みを零してしまった少年。
そんな少年の態度が気に入らない男。

「んだあ？　おわっ！！」

いきなりだが、男は後方に吹き飛んだ。
何か見えない力によって、殴りつけられたように。

「今の俺にはあったじゃないか……最強の能力がな！」

ゆっくりと立ち上がり、微笑する姿は悪役にさえ見える。
よく見れば、流血していた右足は完治している。

「デメエ……何をしやがった……」

怒りのボルテージが限界に達しそうな男は銃口を少年に向け、躊躇い無く引き金を引く。

が、弾は出ない。

「んなっ！？」

驚く男に少年は微笑みながら、答えを返す。

「俺の能力は『妄想具現化』……俺の思った事は全て現実となるんだよっ！」

それだけ述べ、少年は叫んだ。

「吹っ飛べっ!!」

「げえっ!?!」

その言葉が響き渡った途端、男の足元の空気が質量を持ち、まるで巨大な人間の拳のような形を採る。

そのまま男を上空へと殴り飛ばす。

突然の出来事に、男は成す術も無い。

「グオオオオ!?!」

無残にも男は天井まで吹き飛ばされ、屋根をぶち抜いて、消えてしまった。

実に呆氣ない。

「……………っと。アイツの正体を聞くのを忘れた……………まあ良いか……………それよりも、スバル達を助けないと!」

先程の能力により、既に右足を治療した少年は、高町なのは達の元へと駆けた。

「む?。」

男は少年の存在に気が付いた。
正確には残っていた二つの珠が、その少年の存在を男に知らせたのだが。

脅えながらなのはを見詰めることしか出来ないスバルも少年の姿を見つける。

波状に捕らわれ、ギリギリと身体を締め付けられるのはも、その少年の姿に気付く。

その頃には既に目の前の不気味な男が床に叩き付けられていた後だった。

先程と同様、空気を物質化した力で空に浮く男を叩き落したのだ。

「よつと……………大丈夫か!？」

空中に浮いていたなのはを捕らえていた珠は主が傷ついたのと同じ時に効力を失い、力なく落ちていく。

高町なのはも同様に床に向かって落ちるが、その前に少年がなのはを抱きかかえる事で落下の衝撃は免れた。

「あ……………はい……………貴方は一体……………?」

理解を超えた事ばかり起きる。

魔法ではない、何か別の力を使う者たちにいきなり出遭えば、そうも思うであろう。

珍しく質問しか出来ない高町なのはが其処にいた。

「説明は後だ! とりあえず、今は脱出を!」

そう。脱出が今、一番肝要である。

炎は刻一刻と床を喰らい尽くしている。

やがて炎同士は集まり、一体化し、更なる強大な存在へと変わる。

「さあ。俺に捕まって！」

怯えるスバルの手を掴み、自らの胸に抱きかかえているなのはの優しい目を見させることで安心させる。

「行くぞっ！」

気合いを入れ、その存在を別の場所に移そうとした瞬間、少年の脳裏に再びノイズの乱れた映像が流れる。

「ぐっ……………またかつ……………！？」

「ヒヒヒッ！ 遂に来た！ 数多の不幸がやって来たぞ！ 同胞よ！ 不幸が見えるぞ！ 厄災が見えるぞ！ 飢餓が見えるぞ！ 死が見えるぞ！！」

今度は目の前で自分がなぎ倒したはずの男が笑っている姿が見えた。

辺りは炎の海になっており、焼死体がちらほら見える。

その中には茶髪ツインテールで白いバリアジャケットに身を包んでいる女性も含まれている。

その姿は紛れも無く、高町なのはのものである。

「ヒヒッ！ ヒ、ヒヒヒヒヒッ！！」

男は尚も笑い続ける。

その笑いは苦しんでいるようにも見えるが、声色自体は狂喜に満ちている。

その状況、まさに地獄と称される場所は、この男にとっての天国なのだ。

全ての人間が不幸になり、死に絶える。

これこそ最上の幸せ。

それ以外の幸せなどあるものか、と言わんばかりの表情で、男は笑い続けた。

そして、またしてもそこで映像が途切れる。

「あ、あの……大丈夫ですか……？」

手を繋いでいるスバルが不安そうに少年の顔を見上げる。

その可愛さに対し、少年は「大丈夫」と返事をし、再び気合いを入れ直す。

高町なのはも不安そうに少年を見ていたが、すぐに意識を復帰したことで、とりあえず安心したようだ。

やがて少年の身体、それに触れているのはとスバルの身体は徐々に消え始める。

「これは転移魔法！？ いや、でも、何か違う………」

少年の力はやはり魔法とは違うことを確信し、なのは達はその場から脱出した。

「……………我も未熟よな」

床に叩きつけられた男はゆっくりと起き上がる、と言っても神輿が空に浮いたただけだが。

それに連なるように、転がっていた八つの珠も、彼の周囲を浮遊し始める。

「仕方あるまい。物事は容易に進まぬ……………だが、遂に終わる。繰り返されるあの道は長き長きの坂の道、徒労も終わり、皆、死に絶える……………ヒヒッ」

意味深に見えて、実は全く意味の無い、その言葉だけを残し、男も蜃気楼のように姿を消した。

第二話「ヒヤッハー！ 物語、始動だぁー！」

「なのはちゃん……………無事やろか……………」

燃え盛る空港から少し離れた場所で、時空管理局による消化隊が集まっていた。

そこでの指揮官に選ばれた八神はやては中にいる人たちの救援に向かった友人の帰りを待っていた。

先程から念話を行っているが、一向に返事がない。

相手は管理局のエース・オブ・エース。

そう簡単にやられる人物ではないのだが……………

「はう……………大丈夫ですよ！ はやてちゃん！なのはちゃんは無事に帰ってきますよ！」

そんなはやての周りを飛ぶ小人……………否、リインフォース？は主の不安を打ち消そうと安心させるための言葉を選び、発する。

優しいリインの心遣いに微笑し、はやては希望を持ち始める。

「そうやな……………私がなのはちゃんを信用せえへんとな……………！」

「そうです！」

と、二人が頷き、前を向いた瞬間、前方の空間が歪んだ。

「なっ、なんや!？」

「転送魔法……………!？」

その言葉の後、歪んだ空間から出てきた三人の人物。
少年と友人と少女である。

「なのはちゃん!？」

「あ…………はやてちゃん」

そこで友人は再会した。

「ふう…………どうやら成功したみたいだな」

少年はなのはを立ち上がらせ、抱えていたスバルを地面に降ろす。

「貴方がなのはちゃんを助けてくれたん……………」

何故、はやてはなのはが助けられたと知っているのか？

それは高町なのはが他人の腕の中にいるというだけで理解出来た。
本来ならば、逆の立場になるはずなのだから。

「ん？ あ。はい。一応は……………」

八神はやて、高町なのは、スバル・ナカジマ、リインフォース？
とメインキャラとの邂逅に少年の心は舞い上がっていた。

今まで、画面でしか見たことの出来なかった存在と、今、こうして話しているのだから。

「いやはや、もう何度か見た光景なので、さようなら」

と、楽しい時間は簡単に終わる。

「なっ…………とお!？」

「!？」

少年の頬を何かが掠めた。

頬から流れ出る血が、傷が浅いものと教えてくれる。

少年の頬を掠った凶器は地面から生えた黒い手らしきもの。

すぐさま地面と同化してしまったために、確実な認識は不可能だった。

「もう展開踏むとか面倒なので、場所とか時間とか関係なく殺します。とりあえずね」

最後の単語を特に強調しながら、青年は少年たちの後方から歩いてきた。

ずっと後ろで燃え盛る炎が青年のニコニコとした笑みを恐怖のものへと変えていた。

「こ、こんなとこまで来るのか……がっ………!？」

「っ………!」

少年の驚きも無理はあるまい。

もはや原作と全く関係な奴らが大量に出てきているのだ。
原作知識がなまじある分、性質が悪い。

そしてまたしても少年の脳内に映像が流れる。

もう新キャラに会う度に流れるのではないかと思うくらいだ。

「頼むから死んでくれ。マジで」

あの男が膝を付いて、何かを見下ろしながら、頼んでいる。
いや、ソレは頼みというより命令に近い。

男の右手にはナイフ………いや、包丁が握られている。

それを目の前で横たわっている何かに突き刺した。

刺された何かはビクンツと跳ね、液体を流し始めた。

「なあなあ、聞いているよな? 死んでるけどよお。おい」

言葉遣いも大きく変わっているが、間違いない。

今、目の前で敬語を使いながら、襲ってきた男だ。

しかし、男は一体、何を刺しているのか?

少年の见ている映像の視点からでは、ノイズが酷くて分からない。

「……………ハア。死んでまで人様に迷惑かけんのかよ。テメェは」

虚しく独り言を呟いた後、男は立ち上がる。

その表情はニコニコとした笑顔ではなく、落胆と殺意に満ちていた。

「くっ……………！」

すぐに意識は覚醒した。

どうやら今回も極僅かな時間だけ映像を見せられていたようだ。

一応、状況を把握するために首を回す。

なのははすぐさまスバルをはやてに預け、自らのデバイスを構える。

はやてはスバルと共に後方に下がる。

少年は状況を理解し、目の前の青年に集中した。

「全く……………全て貴方のせいなんですよ？ 貴方の存在は異常。それ。分かっていますか？」

細めた眼は常に笑っている。

黒いスーツを着ているが、襟元は多少肌蹴ている。

鍔が付いた帽子を右手で抑えながら、左手のみで構える。

「チツ……………分かんねえよ……………それに、こっちだって聞きたいことだらけなんだよっ！」

原作とは全く違う展開に次ぐ展開。

そして意味も分からず命を狙われる。

もう散々だ。

流石に怒りを覚えた少年は叫ぶ。

それでも、青年の不気味な笑み、冷めた視線は消えない。

「何度も説明しました。もう飽きました。早く完全に死んでください。まあ、今は無駄ですがね」

左手を軽く上げると、青年の周りの地面から幾多の黒く鋭く伸びた腕が生えてきた。

「!？」

左右にゆつくりと不気味に揺れる姿はまるで幽霊である。

そんな黒い手に囲まれる青年は、さながら手の親玉であろうか。

「私の名前はゼロ……………仮名ですが、以後、お見知りおきを」

帽子を取り、一礼。

それは少年ではなく、高町なのはに向けてのもの。

だが、そのニコニコとした笑みは冷たく残虐性を含むものへと変わる。

「まあ……………この自己紹介も意味がなくなるわけですけど」

「前回までとは全く違う……………成る程。輪廻とループ、共に完全に同じものは存在しないということですか……………厄介ですねえ。まあ、もう関係ありませんがね」

理解不能な言葉を呟き、青年は帽子を再び被り直す。

「前言撤回。今宵はこの辺りで失礼しますね。戦闘も不利になりそうなので」

先程からニコニコと浮かべていた笑みに戻り、青年は少年に一礼。

「それに貴方の死神はまだ完成していません。今暫くは何度目かの人生を愉しんでください。ああ、あと、その厨二臭い台詞を何とかして下さい。見ているこっちが痛いです。私が言えた義理じゃありませんけどね」

最後に不可解だが何処か恐怖を孕む言葉を残し、そのまま霧の如く、存在を消してしまった。

「は……………」

呆気なく終わった戦闘に拍子抜けの少年。
そこで、ようやく周りの状況に気付いた。

辺りには魔道師と呼べる人物たちが集まり始めていた。
その中で、高町なのはが少年に声を掛ける。

「えっと……………とりあえず、色々聞きたいことがあるから……………
一緒に来て貰えないかな？」

お互いにやや戸惑い気味だが、少年は別に拒否する理由もないため、頷く。

「あ。えっと……りよ、了解しました」

波乱に次ぐ波乱がようやく収束した。
悪魔である程度ではあるが。

第三話「閑話休題——天海——」

「私は天海！ 誰よりも命の価値を知る者！」

惨劇者。

殺戮者。

異常者。

快樂殺人鬼。

公式罪状…傷害致死

犯罪行為…傷害致死

誰もが彼の者を恐怖、あるいは憎悪の対象として見る。

それ以外の感情を向けられた事はないハズだ。

「この世界は狂っています！ だからこそ素晴らしい！ 故に、私は心置きなく人を斬り殺せる！ ああ………コレに勝る快樂はそうそう無いでしょう！ こんな世界に私に生んでくれたあの人には感謝しなければ！！」

彼が引き起こした事件は数々。

逃走した犯罪者を追っていた若きエリートを躊躇い無く惨殺。

有能な狙撃手の邪魔をし、人質に誤射させる。

疲労が溜まっていた稀有な少女を異世界から帰還中に襲撃、瀕死の重傷を負わせる。

後に判明したことだが、ミッドチルダの臨海空港の火事も彼の作業だったようだ。

「しかし……こちらだけチート全開なのは、流石に飽きましたね……そろそろ終わりとしたいものです」

未だに彼は捕まっていない。

否、管理局自体が恐れているのかもしれない。
どんなに戦力をつぎ込もうが決して捕まらず、逆に返り討ちに遭ってしまふことを。

世間は管理局を批判したが、それをしない者も多い。
何故か？

知ってしまったからだ。

彼の異常さを。

それを知った者は管理局に同情する程。

憎悪を抱いた者でさえ、彼の異常を知れば、恐怖に慄く。

彼の恐怖はもはやミッドチルダのみならず、様々な異世界すら覆い尽くそうとしていた。

たった一人に。

世界は狂わされていた。

実に愉快滑稽。

少年の名前は「神崎修」（かんざき しゅう）と言った。

彼は今、海鳴市にある八神家に来ている。

彼の能力は魔法以外の別の力である。

それをそう簡単に上層部に報告するほど、八神はやては愚かではない。

先日の戦闘は、幸いにも高町なのは、八神はやて、リインフォー
ス？のみしか目撃していなかったらしい。

この後の会談……基、会話により「神崎修」をこの度の事件の
重要参考人として、八神はやてが身柄を預かることなる。

上層部も何故か、この判断に納得しており、特に問題は無いまま
修の存在は知られていった。

以後、修の命を狙う者たちも現れず、機動六課設立まで時間は進
む。

以後、十九回目接触後の会話。

ただひたすらに黒い空間。

灯りは全くない、この場所で、いくつかの声が聞こえてくる。

シルエットも確認出来ない状態では、誰がどう動いたか、という描写が出来ない。

仕方が無いため、会話のみを淡々と描く。

「つまり今回は神によって何かしらの力を得たと？」

「全く違うな。あの神はいつもの通り“幻影”だ」

「となると、あの子が自力で得たんじゃないの？ いつものとおり“無意識”で」

「ふむ……やっぱり、そうなりますよねえ」

「あの餓鬼が……もう我慢できねえ、今からぶっ殺しに行ってる！」

「まあまあ。もうすぐで完成しますから、もう少し待ちましょうよ」

「応よ。奴はアレで殺さねば意味が無い。此度も一度殺し、時間を稼ごうかと思っただが、計算が狂ったわ」

「……………」

「チツ……んじゃあよ、アレが完成したら、容赦なくぶち殺して良いんだよね？」

「彼以外はご自由に………と言いたいところですが、それはご勘弁。」

最後くらい、華々しくしてあげたいですからねえ。とはいえ、我々もようやく解放されますよ」

「彼女が完成すれば万事元通り………というわけかね？ 今回の舞台もそろそろ飽きてきたところだ。短期間に同じ公演を繰り返すのは観客に失礼だからね。丁度良いだろう」

「それでは現在のところは監視に留まりましょう。まあ、これで最後ですね。彼は彼女に殺させて下さいね」

「承知した」

「了解」

「了承致しました」

「理解した」

「仕方ねえ」

「……………」

会話が終わると同時に、多数の気配が消えていく。
残ったのは一つの気配のみ。

その存在は声一つ出さずに、暗闇の中で佇む。

第四話「ダンガンレッシュヤ」

「ファースト・アラートか……………」

移動中のヘリの中で、修は一人で考え込む。

彼の知っている原作とは全く違っている、この物語のことを。

最初の異変は自分の命を狙う者たちの存在だ。

彼らは口を揃えて言う。

「貴様（修）のせいだ」と。

ならば、彼がこの世界に來たから彼らが現れたのだろうか？

しかし、彼らは既に修と会った様な口振りが殆どだった。

だが、修は彼らと会った事など無い。

あんなに個性的な人物達に一回でも会えば、早々に忘れることはないだろう。

それに、彼らと出会う度に脳裏に流れる映像も気になる。

だが、それらについての情報は全然無い。

全くもって不明である。

とはいえ、修が八神はやて達と出遭ってから、物語は順調に進んできた。

機動六課の設立。

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの配属。

今のところは問題ない。

ただ……………

「ところでフェイト……………」

「ん？ 何かな？ 修君」

設立間近の機動六課内部で修は既に顔見知りとなった「フェイト・T・ハラオウン」に話しかけた。

修が気になっていた出来事を聞くために。
既に溜め口とは、修も偉くなったものである。

「ジェイル・スカリエッティ」って知ってるか……………」

修の能力はフェイトも知っている。

故に、この話題を出しても問題ないと思ったのだ。
修が望む反応は「知っている」とフェイトが答えることだ。

「……………」？ 聞かない名前だね。知り合い？」

だが、帰ってきた答えは違っていた。

そう。原作知識を未来予知として八神はやてに話した時、はやての反応には「J・スカリエッティ」の部分だけがすっぱりと抜け落ちていたのだ。

まるで、そんな人物は最初から存在しなかったとでもいうように。

しかし、それではこの世界は成り立たない。

フェイトやエリオが誕生したのは一重にスカリエッティが居たから、ともいえるのに。

それでも、フェイトやエリオは存在している。
何故なのか。

その答えは、一応あった。

「天海」なる人物が、J・スカリエッティの代わりをやっているらしい。

ただ、この天海という人物は非常に残虐性に富んだ人物であり、機動六課メンバーの過去の様々な事件に関わっているとか…………

一体、この世界はどうなってしまうのか…………

そんな不安が渦巻くが、修の心の中には一つの決意が存在していた。

それは、この世界がどんなに原作と変わろうとも「機動六課の面々を自分が守る」ということ。

そのために力を貰ったのだ。

今の修は、それだけのために闘う決意をしていた…………

「修さん？ そろそろ現場に着きますよ？」

「え？ おわっ！」

思案中の修がハッと気が付くと、目の前には成長したスバルの顔があった。

思わず後ずさり、後頭部を壁にぶつけてしまう。

「いっつつつ……………」

「あ、あれ……………そんなに驚かなくても良いのに……………」

「大丈夫ですか？ 修さん」

苦笑いするスバルに修を気遣うティアナ。

修は後頭部を右手で摩りながら、左手を軽く上げて、無事をアピールする。

「いや、悪い悪い……………ちょっと考え事をしてたからさ……………」

「考え事って……………未来予知の事ですか？」

対面に座っていたエリオが尋ねる。

また、キャロの膝の上にいる小さな竜、フリードリヒも主と同じように首を傾げる。

「あ……………いや、それとはまた違うことかな」

原作の地上本部襲撃時の悲惨な状況。

この事実が告げずに、誰も傷つかない内に、自分だけで皆を護る。無論、全くもって愚かかつ理解不能な考えを、修は悟られないようにするために、曖昧な返事を返す。

「皆、そろそろ着きますよ！」

そんな中、小さな空曹長、リインが新人達に目的地が近づいたことを知らせる。

「あ。はい！」

新人達はそれぞれ席に座り、リインの話に意識を集中させる。
その表情は真剣そのものであり、キャロに至っては極度の緊張に見舞われている。

「大丈夫？」

「あ、ごめんなさい……ちょっと緊張しちゃって……」

リインの話が始まる前にエリオがキャロを気遣う。

そんなやり取りを原作で見たことがあるなあ……としみじみ思う修なのであった。

実際は原作とは多少の時間のズレが生じているのだが。

「今回の任務は、レリックを安全に確保すること。ですから、四人一組となってレリックのある列車まで到達し、確保して下さい」

そう言って、リインは手元に映像を映し出し、分かりやすく解説を始める。

「レリックは此処、七両目の重要貨物室にあります。決して単独行動などせず、四人で行動して下さいね」

「はい!!」

四人の返事が重なり、リインは笑顔になる。

「で、私も現場に下りて管制を担当します！」

その場で軽くターンし、リインの身体にバリアジャケットが装着される。

さながら妖精のようだ。

「ただ、列車の襲撃犯の数が不明だから、注意してね。私とフェイトちゃん、修君が戦闘を担当するから、スターズ分隊、ライトニング分隊はレリックの確保だけに集中して。良いね？」

「はいっ!!」

原作と違う出来事。

それが今だ。

本来ならば、敵はガジェットのみで、なのはとフェイトは空にいる大量のガジェットを相手にするハズなのだが……

ガジェットは存在せず、列車を襲撃したのは謎のグループとなっている。

果たして、どうなるのか……修にはさっぱり分からない。

これでは原作知識など全く役に立たない。

非常に困惑する事態なのである。

「それじゃあ、私は一足先に行って来るね。皆も頑張って、パパッと終わらせちゃおう」

「はい！」

「は、はい！」

先陣を立つなのはのアドバイスに緊張がピークに達したキャロは、他のメンバーに比べ、反応が遅れてしまった。

そんなキャロの緊張を見抜いたなのはは、ゆっくりとキャロに近

寄る。

「キャロ。大丈夫。そんなに緊張しなくても」

なのはの両手がキャロの頬に優しく触れる。

「あっ……………」

「離れてても通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は皆を守ってあげられる。優しくて強い力なんだから」

「……………はい！ 頑張ります！」

緊張が解れたキャロの元気な返事になのはは笑みを零す。

「うん。それじゃあ、行ってくるね！」

既に開放されていたハッチから飛び降りたなのはは相棒であるレイジング・ハートによって変身し、華麗に空を舞う。

そして、暴走する列車の最後尾へと飛んでいくのであった。

「安全、無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか！」

ヘリのパイロットであるヴァイス・グランセニックは新人達に合図を送る。

それに答えた新人達はハッチへと向かう。

「スターズ3！ スバル・ナカジマ！」

「スターズ4！ ティアナ・ランスター！」

「行きますっ！」

二人同時に声を合わせ、スバルとティアナは飛び降りた。
そして各々の相棒と共に変身する。

「……………」

なのはによって緊張がある程度、解れたキャロであったが、全てが解けたわけではなかった。

スバル達が飛んでいたハッチの手前に立ったが、その顔色は多少の不安に支配されている。

不安そうな瞳に、エリオが気が付く。

「……………一緒に降りようか」

そう、優しく声をかけ、微笑んだ。
そして手を差し出す。

「……………うん！」

互いの手を握り、大声で唱える。

「ライトニング3！ エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4！ キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キューー！」

キャロの傍らでフリードも返事をする。

「行きますっ!!」

手を繋いだまま、二人も飛び、変身する。

「さて……………それじゃあ、ヴァイス。俺も行って来るよ」

「ああ。敵さんに手加減してやれよ」

「あはは……………善処するよ」

修の實力は既に機動六課の全員が知っている。

ただ、流石に魔法ではない事がバレるとマズイため、修の能力でミッド式、ベルカ式の魔法に見せてはいるが。

「ロングアーチ1! 神崎修……………出るぜっ!!」

修もまた、ハッチから空へと飛び出した。

「今回の物語は動き出した。狂った歯車はもはや戻らぬ」

「殺すのが不可能なら半殺しにしてやるよ！」

「……………」

黒い包帯で全身を巻き、浮遊する神輿に乗る男性。

黒い金属ヘルメットを被り、棘棘しいジャケットを羽織り、右手にショットガンを持つ、口調の荒い男。

そして無言のまま、帽子型兜を深々と被り、目を隠している無口な男。

三人の男性は最後尾の列車に存在していたが、全身包帯の男が手を奇妙に動かすと、ヘルメットを被った男性の姿が歪み、消える。

無口な男は音も出さずに、漆黒の鴉の翼を何枚か残しながら、一瞬で消える。

「全ての事象は一人の思惑通りにはいかぬ。悪人であれ善人であれ、それは同じよ」

包帯の下で笑みを浮かべた男は周囲を浮遊する八つの珠を使い、天井に穴を空ける。

そしてゆっくりと、その穴から屋根へと移動する。

「逃げ帰れ。我々を狂人と伝えて参れ」

「……………貴方は……………！」

屋根に降り立ったエース・オブ・エースの前には、約一年前、あの臨海空港で出会った、奇妙な男が浮いていた。
しゃがれた声で男は呟く、淡泊な言葉の中に不気味な意味を添えて。

「此処で腐らせ、亡者に肉を明け渡しあれ」

「エリオ達は無事かな……………」

同じ頃、単独飛行で現場に辿り着いたフェイトは、列車の最先端の屋根の上に来ていた。

先程、ヘリから飛び降りたスバル達が無事に屋根に着地出来るかを確認していたのだが……………

「……………ッッ!!」

気が付けば、フェイトの眼球の僅か数ミリ先には短刀の切っ先を瞳に向けた男が迫ってきていた。

間一髪、バルディッシュで短刀を男ごと弾き返すフェイト。

眼を潰すことに失敗した男は空中を蹴るように移動し、フェイトと距離を空ける。

列車は移動しているのに、空中移動に乱れが無い、もはや超人の域に到達している。

「あ、貴方は……………!？」

間違いなく敵であるため、バルディッシュを構えながら、フェイトは問う。

されど男に返事はない。

それはそうだ。

この男、生涯、声というものを発したことがない。

「……………」

無言のまま、両手に其々持った短刀を構える。

男から発せられる殺気は鋭く、そしてすぐさま消えそうなものだった。

当然だ。

殺気が強く、自制が聞かなければ暗殺者にはなれない。

「またテメエらかよ……………」

中央より一つズレた車内で、修は焦りと怒りを感じていた。

目の前の怒りに狂う男を見れば、その感情を抱くのにも納得する。

「ああああ！！ テメエは殺せねえんだよお！！ お前に用はねえんだよお！！」

黒いヘルメットを被った男は修以上の怒りを列車の壁や座椅子に向け、ショットガンを鈍器代わりにして叩き付ける。

男のストレスも相当、溜まっているようだ。

「あ……………！！ ん？ だが待てよ…………殺さなきゃ良いんだよなあ……………」

そこでふとしたことに気付き、ヘルメットの下からでも分かる下衆な笑みを作る。

「フフフツ……おい、お前。俺の名を言ってみろ」

一瞬でご機嫌になり、銃口を向ける。
そこで修も笑みを作って、返す。

「分からねえし、出来るもんなら、やってみな」

「よっと……此処にレリツクがあるハズ……」

無事に七両目の重要貨物室に辿り着いた四人。
今は最初にスバルが屋根に穴を空け、侵入したところだ。

「スバル！ 大丈夫？」

屋根の空いた穴からティアナが声をかける。
移動中の列車の轟音に負けないように大声を出しているが、その声の中には相方を心配する、彼女なりの優しさの気持ちが込められている。

スバルは部屋の安全を確認した後、ティアナ達に返事をする。

「大丈夫みたいだよ！ 早く降りてきなよ！」

そうしてスバルが油断している背後で、レリック付近に溜まっていた、大量のケースの中から何かが光った。

そして、そのケースの山の中から声が聞こえてきた。

「貴公らがルクラ君達だね？　我輩は高貴な狐………歓迎の玄米茶を用意したよ」

「えっ!？」

振り返ったスバルの背後には、大量にあったケースを一瞬で全て細切れにし、細長い指揮刀を持った、何処かエセ紳士的な服を着た男性が立っていた。

薄緑を基調にしたタキシードを想像させるような服装である。

表情に合わせて動く髭と立派に尖った顎鬚を蓄えた人物は悠々としている。

「我輩は狂人達の住まう穴倉の狐！　スゴくて！　賢い！　狐である！」

男性はそう叫び、両手を華麗に上げる。

すると、先程、細切れにしたケースの一部分が頭に当たる。

「アウッ！」

「……………」

兜を被っているにも関わらず、頭部への軽い衝撃に対し、両手で

頭を抑える男性に、何処か気が抜けたスバルであった。

第五話「4十死」末広がり」

「やれ」

包帯男が片手を交互になのはに目掛けて振るう度に、彼の周囲を浮遊していた珠が弾丸の如く、射出される。

「くっ………アクセルシューター！」

空を飛び、男と距離を取ったなのは、すぐさまピンク色の魔法球を目の前に生成し、それをレイジングハートで叩く。

すると、爆発しつつも綺麗な弧を描いた桜色の魔力が男の放った珠と相殺すべく、飛び散る。

「容易いわ」

だが、男の珠はその程度では怯まない。

高町なのはの魔力を簡単に打ち抜くと、そのまま獲物へと飛び掛る。

といっても、数個は打ち落とされたが。

「効かない………！？ でも………！」

すぐさまなのはは華麗に空を舞い、愚直に飛んできた珠をかわす。幸いにも、珠にホーミング機能は付いていないらしい。

珠は標的を通り過ぎた後、その存在を消し、すぐさま主人の背後に出現する。

「燕が……羽でも千切れれば楽しかる」

男は忌々しげに呟き、両手を奇妙に動かす。

同時に、なのはの腹部に大きめの黄土色の円陣が浮かび上がった。

「これは………?」

すぐさま自身の魔力の残量を確認するが、問題はない。

どうやら自分の魔力に大して悪影響を及ぼす類いのものではないらしい。

ならば、これは何か?

「逝ね」

今度は八つの珠全てを、自分の目の前で、まるで蛇の様にうねらせ、両手を広げると同時に解き放つ。

またも珠は愚直にも獲物を狙うのみ。

ならばと、なのはは再び空を動き回る。

しかし、今回は違う。

八つの珠は全て、高町なのはを狙って飛行しているのだ。

先程の印はこのために付けられた。

珠は、この男が付けた印に反応し、攻撃の種類を豊富にさせる。

実に厄介なものであった。

「えっ!?!」

驚きつつも、既に周囲に展開させていた「ディバインシューター」で迎撃する様は流石である。

デイベインシューターはアクセルシューターに比べ、威力や弾速は劣るが、使用者自身が動きながら使えるというのが強みだ。

その存在は簡易的な自動迎撃システム。

しかし、それでも男の珠の止めるには、少々足りない。

「なら………！」

高町なのははすぐさま次の行動を思いつき、実行に移す。

男との距離は近く中間程である。

「これなら………どう！」

飛び回りながらも、魔法を発動させる。

「ふむ………？」

気が付けば、男の身体は魔力の縄によって捕らえられていた。

主が多少でもダメージを受けたためか、追い討ちを仕掛けていた珠は一瞬にして消え、主の周囲に現れる。

同時になのはの腹部に浮き出ていた円陣も消え去った。

「攻撃は最大の防御………とはよく言ったものよ」

「油断大敵だけどね」

基本的に、男は手を動かさなければ珠を操れないらしい。なのはは警戒しつつも、男の前方の屋根の上に降り立つ。

「それじゃあ………お話、聞かせて貰えるかな？」

「ハアッ!!」

バルディッシュ・アサルト、ハーケンフォームから繰り出される魔力刃。

高速で打ち出された刃は三日月状だが、速度のため円のようにも見える。

常人が直線で出されたら、まず回避不可能な攻撃を、目の前の無口な男は、それすらも越える速度でかわす。

否、かわしたというよりは消えた、と表現するべきだろう。

黒い霧を残し、男はその場から消えたのだ。

「消えたっ………!? ツ！」

背後からの鋭い一閃。

これまた普通の者なら斬られたことすら知らずに死に絶える一撃を、フェイトは受け止めた。

鋭い火花が一旦、飛び散り、すぐ消える。

再び、男は黒煙と共にその姿を隠した。

だが、此処は高速で移動する列車の屋根の上。

隠れる場所など無いハズなのだが………

「またっ………! 一体、何処に………」

意識を集中させようにも、強烈な風で音は聞こえない。頼りになるのは己が長年、培った勘のみ。

「……………負けないよ」

正体不明の相手。

だが、攻撃を仕掛けてきた以上は敵なのは間違いない。

フェイトは改めて決意を固め、男の攻撃に備える。

強風が巻き起こる屋根。

一際、美しいツインテールの女性は魔力で生成された刃を持つデバイスを持ちながら、構えている。

その姿は凜とした画となっており、素晴らしい。

並みの男性ならば、余りの美しさに多少は攻撃に戸惑うものだが、無口な男にそんなものは無縁だ。

男はただ、依頼された任務をこなすだけ。

それ以上でもそれ以下でもない。

「……………」

男はフェイトの足元に現れた。

その両刀を首目掛けて振るうために。

「ッ……………このおっ！」

それすらも受け止めるフェイト執務官。

彼女も常人離れしている。

攻撃を受け止めた彼女は、力任せに男を押し返す。

接近戦の得意なフェイトだが、この人物との接近戦は危険過ぎると判断したためだ。

咄嗟の状況判断が身を救う、良い例である。

「……………」

ある程度、距離を置き、着地した男は無言で金髪の女性を観察する。

中々の獲物。

接近戦、状況判断、動体視力、勘、全て良好。
されど、関係ない。

自分はただ、報酬に見合った働き、依頼された仕事をするだけ。
その過程で死のうとも、興味はない。
男には感情すら無いのだから。

「テメエの面を八つ裂きにしてやる！」

そう言い放ち、放たれるショットガンの弾。

ショットガンの癖に拡散弾が放たれるからたまったものではない。
だが、そんなものは修には無力。

「そんなもんが効くかよっ！」

右腕を軽く振るだけで、弾は全て消失。
それどころか、ショットガンすら跡形も無く消え去ってしまった。

「そうか……：そんなに早く死にてえのか……：」

自分の思うままにならない戦闘。

もう何度目だ。

先程は怒りの余り、狂喜乱舞、取り乱してしまったが、本来の自分はあるなに小物ではない。

俺の名は何だ？

俺の名は何だ？

俺の名は何だ？

「おい。お前。俺の名を言ってみろ」

「知るかよ！ 先にお前が名乗れよ！」

目の前の生意気な糞餓鬼を容赦なくぶちのめす。

だが、殺しはしない。

俺が殺したら、ダメだ。

奴を殺すのは俺ではなく、アイツだ。

「もう一度だけチャンスをやろう。俺の名を言ってみろ」

「ハア！？ テメエはバカか！？ 俺の言葉がわかんねえのかよ！」

ぶちのめす。

「そうか。なら……：……」

男はゆっくりとヘルメットを取っていく。

「何を………ッッ!？」

「この俺の顔より醜く焼け爛れろ」

衝撃であった。

「男の素顔は、お世辞にも普通とは言えない程に醜かったからだ。ほぼ剥き出しな眼。

腫れ上がった上唇。

額から頭を覆う様に縫い付けられている金属片。

後頭部にしか生えていない髪。

鼻の横にある切り傷。

どうしたら、こんな顔になるというのか。

まだ若い修には考えも付かない。

「この傷が痛む度に、貴様らへの憎悪を燃やし募らせて来たのだ」

全く見に覚えのない話である。

第一、修が男と会うのは二度目だ。

確かに、一撃は喰らわせたが、顔がこんなになるほどのダメージでは無かったハズ。

なのは達がしたとも、到底、考えられない。

「訳わかんねえよっ………本当にお前らは、何を言ってるんだよっ
!!」

目の前で見た衝撃が余りに強かったのか。
修は錯乱している。

それこそが男の狙いだったのだが。

「ハッ！ 死にやがれえ！」

すぐさまヘルメットを被り直し、鋭い突きを連続で繰り出しながら突進してくる男。

錯乱状態の修に避ける術はない。

醜く焼け爛れろとか言った癖に、普通に拳で攻撃してくるとは、微妙なものである。

「うわっ！」

咄嗟に両腕で顔をガードするが、遅い。

男の突きは確実に修の身体を捉えていた。

「ぐあっ！」

数撃を貰い、軽く吹っ飛んだ修の身体は車内の先端の扉まで吹き飛ばされる。

よろけながらも膝は付かず、瞬時に態勢を立て直す。

「俺様は誰だ！ 言ってみろ！」

修に数発当てられた事に少しの喜びを感じ、調子に乗った男だったが、それが逆に修の先程まであった戸惑いを消すこととなった。

「だから……：知らねえって……：言っただろうがあ！！！」

修が叫ぶ。

列車全体に響き渡るような大声で。

その声すら武器となり、修からは強烈な衝撃波が放たれた。

「なっ……：ぶひゃ！」

その衝撃波は、まるで男の顔面に強靱な蹴りを入れたような速度で男に襲い掛かった。

男は成す術もなく吹っ飛び、隣の車両に突っ込んでしまった。

「くそっ……：まあ、すぐに回復出来るんだけど」

修の能力を持ってすれば、即死以外は問題ではない。

即座に傷を癒し、男が飛んでいった方向に顔を向ける。

「げっ！ 隣の車両って……：」

修が焦るのも無理は無い。

隣の車両は、先頭車両から数えて七つ目。

今頃はスバル達がいるであろう、重要貨物室だったからだ。

「待ちたまえ！ 集団戦法禁止！」

修が大声を発する少し前、重要貨物室内では、一人のエセ紳士が余裕めいた表情を装いながら、右手を上下に振っていた。

目の前にはスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、リインが困った風に立っている。

「えっと……貴方は一体、誰ですか……？」

とりあえず、目の前のエセ紳士の情報が欲しいため、リインが代表して尋ねてみる。

一応、相手は日本刀らしきものを持っているために、各自、構えてはいるが。

「我輩は高貴な狐であるよ？ サインが欲しいなら順番に並んでくれたまえ！」

いきなり勢いを取り戻したエセ紳士は立ち上がり、まるで演説するかの如く、両手を上げる。

自己陶醉し易い人がよくしそうなポーズである。

「我輩の目的はただ一つ！ 貴公ら！ そう！ ルクラ君達が、この「れりつく」を手に入れるのを妨害することなのだよ！」

「それじゃあ……私たちの敵ってことですか……？」

恐る恐る、小さな拳手をしながらキャロが聞いてみる。

それを待ってましたといわんばかりにエセ紳士はキャロの目の前に顔を近づける。

勿論。スバルやティアナ、エリオがデバイスをエセ紳士に突きつけているので、キャロは無事だが。

「そうなるね！ ルクラ君たち！」

完全にペースに吞まれている機動六課の面々。
この話術こそ、このエセ紳士の能力なのかもしれない。

「あのー……さっきから言ってる、「ルクラ」って誰のことですか？」

軽い疑問を、今度はスバルが尋ねる。
右手を軽く上げ、質問態勢に入りながら。

「え？ 名前が違う？ ハハハ。それはすまなかったね。『キューブ』君たち！」

「いや、それも違うんですけど……」

スバルのツツコミなど気にせず、笑うエセ紳士。
キャロと距離を置き、何処からか取り出した湯呑みを持ち、中に入っていた麦茶を飲む。

玄米茶ではないのか、とツツコミを入れないが我慢しておく。

「と、ともかく……公務執行妨害で貴方の身柄を確保します！
抵抗しなければよし！ 抵抗する場合は実力行使になるですよ！」

リインの一言で、新人たちはハッと気付き、エセ紳士のペースから脱する。

「ふむ……とはいえ、我輩自身は乗り気ではないのだよ。前日も君達には悲しい思いをさせてしまったしね……良いだろう！ キ

ユーブ君らにれりつくは渡そう！」

そう言い、自分の足元に残っていた無事なケースを拾い、スバルに突き出す。

スバルは彼が話した「前回」という単語が気になったが、とりあえず目の前に突き出されたケースをどうにかしようと思案する。

「え……………？ あ、ありがとうございます……………」

結果、戸惑いながらも、ケースを受け取ろうとするスバル。

そこで男の顔に笑みが浮かんだ一瞬を、ティアナは見逃さなかった。

「バカッ！ 簡単に受け取っちゃ……………！」

ティアナがスバルを男から引き離そうとした時であった。

『だから……………知らねえって……………言っただろうがあ！！』

すぐ隣の車両から大声が聞こえてきた。

それはこの車両内の空気すら振動させる程の大声であった。

「うわっ！」

「ひゃうっ！」

「キュクッ！？」

ライトニングの面々が驚いている最中、隣の車両から吹っ飛んできた、黒いヘルメットを被った男が目の前のエセ紳士に激突し、更に隣の車両に行ってしまった。

「アレ〜!?!」

既にケースはスバルの手に渡っていたために、レリックは無事である。

「……………あ、あれ……………」

ティアナの拍子抜けた声が車内に響いた。

第六話「俺の名を言ってみろ」

「くそっ………だが、まだまだ読みが甘いわ！」

第八車両まで吹っ飛ばされた黒ヘルメットを被った男は、そう叫びながら、修を指差し、更なる後方車両へと逃げていく。

「あっ！ 待ちやがれ！」

すぐに第七車両にいたスバル達の安否を確認した後、逃げた男を追う修。

余りの急展開に、新人十リインはボーっと見ていることしかできなかった。

「ゆ、友好の印に麦茶を渡そうとしただけ………」

黒いヘルメットを被った男に巻き込まれ、一緒に吹き飛ばされたエセ紳士の気絶直前の一言で、全員が自我を取り戻す。

ちなみに、エセ紳士の右手には液体が零れ、空っぽになった湯のみがしっかりと握られている。

「ハッ！？ と、とりあえず！ レリックを確保です！」

「あっ！ は、はい！」

スバルは手に持ったスーツを空け、中身を確認する。

そこには紅いクリスタル状のロストログアが静かに眠っていた。

「だ、大丈夫みたいです」

リインも無事なのを確認し、頷く。

「それでは、私たちはきか………!？」

そこで大きな爆発音と爆風がリイン達を襲った。

「あう!？」

それは一体、何の爆発だったのか。

よく見れば、修とヘルメットの男が向かった第九車両がまるまる吹き飛んでいるのが分かる。

「修さんっ!？」

その声は誰のものだったか。

強風に混じり、声の主は特定できない。

ただ、修を心配しているのは、その場にいた全員だったのは間違いない。

その声が発せられる前に、スバルは第八車両に駆けていた。

「あろっ!」

何気に爆風で再び第七車両に吹き飛ばされてきたエセ紳士は、スバルを避けるようにして、壁にぶつかっていた。

「貴方達は……何者？」

魔力の縄に捕らわれつつも、神輿に乗り、浮遊している男にデバイスの先端を向けながら、なのはは問う。

「……良からう。多少は謎の解明も必要であるからな」

全身を黒い包帯で覆った男は、意外にもちゃんと応答してくれるらしい。

なのはの目の緊張が少しだけ解けた。

「我々は謂わば「抗体」よ。「菌」の排除を目的とする、な」

「『抗体』……？ 『菌』っていうのは……？」

謎の単語が飛び出る。

しかも、その言い分だと、まるで目の前の男が正義の味方みたいである。

謎だ。

「『神崎修』……アレこそが毒よ。今に解る」

そこで男は歪な笑みを浮かべる。

対するなのはは、その言葉に気分を悪くする。

「修君が毒………？ そんな訳が………」

否定しようとしたのはであつたが、完全に否定出来ない部分はある。

それは修の「力」である。

彼の力は「魔法」ではない。

所謂、神の力に等しいほどの力だ。

それが気がかりとなり、なのはの否定を薄れさせる。

なのはのそんな表情と思考を読み取ったのか、男の笑みは広がる。

「否定しきれまい？ 実に滑稽よな」

男の下卑た言葉に、なのはは二、三回、首を横に振り、意識を強くする。

「ううん。修君は私たちの味方だよ。だって、あんなに優しいんだから」

純粹に人を信じる力。

これも高町なのはの力である。

その瞳に迷いはなく、澄み切っている。

「知らぬが仏………愚昧、愚昧。主らほど醜い道化はおらなんだ………まあ、良い。今回は此処までよ」

逃げられる状態ではないにも関わらず、男はさも当然の様に言うてのける。

その自信は何処から来るものなのか。
疑問である。

だが、その答えは、すぐに分かった。

「今回は此処までって……ッ!？」

なのはの耳を突き抜ける爆音。
そして身体をすり抜ける爆風。
その勢いは凄まじく、なのはの集中力を解いてしまうほどだ。

「不幸よ!　さんざめく降り注げ!」

その一瞬を狙っていたのか。
バインドが解けた男の手の動きと共に、八つの珠は巨大化し、の
た打ち回る蛇のようになのはを攻撃し始めた。

「くう………!」

すぐさまピンク色の魔力が円状となって、なのはを360度囲む。
オーバルプロテクションと呼ばれる、なのはの防御に特化したシ
ールドである。

男の珠は全方向から襲い掛かるため、この防御が一番適切なの
である。

珠は屋根に乗っていたなのはを連続攻撃で強制的に浮かび上が
らせ、連撃を飽きることなく繰り返す。

その間の男は肩を上下に揺らすほど笑い、愉快そうであった。
やがて、全ての珠がなのはの上空から襲い掛かると、集まった後
に飛び散る。

その攻撃の全てをなのはは耐え切った。
ただ、シールドにはかなりの輝が入っていたが。

「我らと主らはどうあっても対峙する宿命……なれば、アグスタ
で、我が同胞と会うが良い。女」

攻撃直後、その言葉を残し、男は蜃気楼のように消え去った。

「……消えた……修君と同じ、魔法以外の力で……」

「アグスタ……?」

シールドを解き、男が消えた後を、なのはは見つめていた。

「くっ……」

「……………」

フェイトの服は所々が破れ、露出した肌からは真っ赤な血が流れ
出ていた。

このまま戦闘を続けられれば、死に近づくのは免れない。

それは同時に、フェイトと闘っている男にもいえることだ。
フェイトに比べると傷は浅いようだが、流血していることに変わりは無い。

「……………」

それでも男は苦悶の声すらあげずに、短刀を構える。
男の本来のスタイルは、構えすら見せず、相手を背後から殺すという、所謂「暗殺」であった。

その男が相手の目の前で構えたということは……………

「……………これで、終わらせる気だね……………」

フェイトも構える。

その表情には緊張と、「自分が死んでしまったら」という不安がある。

この相手には情けがない。

そもそも感情すらないのだから、当たり前だろう。

これまでも危険な任務をこなして来たフェイト執務官であったが、これほどまでに死を覚悟した瞬間は無かった。

「……………」

男が駆け出す姿勢が見えた。

「ッ！」

フェイトも同時に駆け出す。

速度は圧倒的に男が勝っている。
だが、フェイトには信念がある。
絶対に帰るべき場所に帰るという。
守るべき人たちを守るという。
そうしなければならぬ、という。

実力か。
信念か。

今、此処でその答えを知ることとは出来なかった。

「……………」

「えっ!？」

二人の遙か後方の一車両が、まるまる爆発したのだ。
強い爆音と爆風が二人の下にやってくる。

「うっ……!」

「……………」

その爆風には、流石の男の動きも止め、戦意を喪失させる。
男は爆風の中でも、自分を見続けているフェイトの方に顔を向けると、黒煙を残しながら、その場から立ち去った。

「気配を感じない…………逃げたの…………かな…………？」

意外な終わり方に、フエイトは辺りをキョロキョロと見渡すだけだった。

「でも、凄く疾い…………それでいて純粹だけど怖い…………まるで…………」

「風の悪魔…………」

「これはっ…………！？」

「フハハ！ 何故、俺がこの車両を逃げ場所を選んだと思う！？俺には燃料ガスという切り札があったからだ！」

第九車両に黒いヘルメットを被った男を追って来た修が見た物は、これでもかと敷き詰められたガソリンと大量のドラム缶。

ドラム缶の中身もまたガソリンであろう。

そのドラム缶の側で、愉快そうに男は笑う。

「バカッ！ そんなことしたらお前まで……………！」

「俺は無駄な生き様が大嫌いなんだ！」

もはや半狂乱。

いや、狂っているのだろうか。

男は修の制止も効かず、ヘルメットを脱ぎ捨て、懷からライターを取り出す。

「おい！ 本当に止めろっ！！」

「フフ……この時を待っていたのだ」

修との会話は不可能。

まるで決められた台詞を吐くだけの役者。

誰にも男は止められない。

修は能力で大量のドラム缶や男の手にあるライターを消そうと試みるが、誤って男の醜惡な顔を直視してしまい、集中を鈍らせてしまう。

「おい！ そのお前！ 俺の名を言ってみろお！！」

最後に、そう高らかに叫び、男は火の着いたライターをガソリンの山に投げる。

もう止められない。

すぐさま修は第九車両をシールドで包み込んだ。

勿論、自分にもシールドは張ってある。

爆音と爆風のみは易々とシールドを貫通していった。

これは、修が車両の一つが爆発したことをなのはやフェイトに知らせるために意図的に行った様だ。

爆音と爆風に巻き込まれながらも、修は能力を駆使し、自分が第

八車両に飛ぶように設定する。

能力はキチンと発動し、無事に修は第八車両に辿り着いた。

「ッ……………何とか、無事……………か……………？」

身体を見てみるが傷は無い。

問題はないみたいだ。

「修さん！」

背後から修を心配するスバルの声が掛けられる。

「スバルか……………そっちは大丈夫だったか……………？」

「あ、はい。皆、無事です。修さんこそ怪我は……………」

列車に吹き飛ばされてきた修だったが、その身体には傷はない。
スバルも視認し、安堵の息を吐く。

「悪いな。心配かけて」

右手を軽く挙げながら、謝罪する。

「い、いえ！　修さんが無事なら、私はそれで……………」

などと二人がお互いの安否を確認していると、後方から気絶した
エセ紳士を引き摺ってやって来たティアナ達の姿が見えた。

「修さん！　無事でしたか！？」

先頭のラインがすぐさま修の目の前まで飛んできて、怪我がないか確かめる。

「だ、大丈夫だよ。ライン」

急激な接近に驚きつつも、答える。

ラインは二、三回ほど、修の周囲を回ると、「良かったです」と落ち着く。

「とりあえず、俺のことよりもなのはやフェイトの安否を確かめないと……！」

そう言って、今まで腰を着いていた修が立ち上がると同時に、全員に念話が入る。

『こちらライトニング1 車両のコントロールを取り戻したよ』

『こちらスターズ1 とりあえずは無事かな』

こうして、とりあえず新人たちの初任務は無事に終わった。

列車は一車両が吹き飛んだが、修の機転により、他の車両に被害なし。

レリックも無事に回収。

重要参考人として「エセ紳士」こと「ピエール・モガツミー」を

捕らえた機動六課であつた。

十九回目第二次接触後の会話。

暗闇と静寂が入り混じる空間で、二つの存在が話し合っている。
「またもシルエットすら見えない状態なので、会話を描くことしか出来ないのである。」

会話の内容も、現在では理解不可能なものだ。

「ふむ……次は「アグスタ」ですかね？」

「暇潰しにはなるかね。では、私が行こう」

「他に戦力は要らないので？」

「何。今宵が最終演目。問題ないだろう」

「まあ、これら全て『愚』への最後の手向けというか、貴方の影響というか……貴方が要らないって言うなら、別に良いですけど」

「感謝しよう。私の晩年には仲間たるものは居なかったの。」

「所詮、私も貴方も……おっと。帰ってきたみたいですね」

「では、私は準備に取り掛かるとしようか」

第七話「日常の玄米茶だ！」

「目が覚め、気が付いたら変な恰好をした男にそう頼まれ、何となく本能的に従ってしまった……というわけか？」

「そうである！ 我輩は高貴で賢いが、分からないものは分からないのである！」

機動六課の取調室にあたる部屋で、エセ紳士は重要参考人としてピンクの長髪をポニーテールにした女性から事情聴取を受けていた。その内容は「お前たちは何者で、何が目的なのか」である。

「暗示の類いの魔法を受けたか……？ いや、そんな形跡は無いと聞いているし……」

「どうでもよいが！ 此処は玄米茶の一つも出さないのかね？ 我輩はとーっても不満である！」

ドンツと冗談交じりに机を叩く男。

全くもって図々しい。

シグナムがこの男の取調べを担当する前にも数人の局員が同じことを行ったが、男の態度は一切変わらない。

一応は捕虜の立場なのに、実にたくましい男である。

愛刀らしき日本刀は既に回収し、別室に保管してある。

「ハア……」

両手を軽く上げ、お手上げのポーズを取るシグナム。

そんな状況を機動六課のモニタールームで見っていたはやは額は額に人差し指を当てる。

隣に立つ修も同様のモーションを取る。

「困ったなあ………せつかくの情報だと思ったんやけどなあ………」

「しかし、嘘を吐いているような態度でもないしなあ………」

実に役に立たない捕虜である。

かといって、本局に易々と渡すわけにもいかない。

どうしたものか………

「もうこんな狭い所は飽きたのである！ この施設を見学したい！」

「ハア!？」

突然、立ち上がり、そう言った男の言葉に、シグナム、はやて、

修の驚きが重なった。

コイツは本当に捕虜としての自覚があるのか………誰もがそう感じたという。

そりゃそうだ。

ちなみ、修がこの男と会った際も、いつもの映像が流れた。

内容はこうだ。

「何で分からないのっ!? スバルッ!! 管理局は間違っている!!」

「ティアッ! 私の話を聞いてよっ!!」

争っている。

場所は不明だが、仲間であるハズの機動六課の面々がお互いの存在を敵視し、攻撃し合っている。

その光景は、機動六課を知る者であれば、地獄と評するだろう。あまりにも醜く、愚かな光景だ。

「…………虚しい。実に虚しい。我輩はこんなモノを望んでいた訳ではないのだがね」

そんな機動六課の面々が闘い合うのを遠くから眺めているピエール。

表情には哀愁が漂っており、後悔の念も垣間見える。

ピエールに視点を合わせていたのだが、映像はまたも唐突に終わる。

勿論、これについてピエールに問いたただいたか、ピエールは「む? 分からないのだよ!」の一点張り。

頑固というより、素で知らなさそうだったために、とりあえず保留となった。

「ほほう！　これがキューブ君たちの訓練施設かね！　実に楽しそうだね！」

余りに煩く、「見れば何か思い出すかも！」という嘘臭い言葉を疑いながらも、はやては見学を許可した。

当然、見張り付き、武器は没収、怪しい挙動があった時点で終了という条件付きだが。

それでも子どもみたいにはしゃぎながら施設を見学する様に、何処か毒気を抜かれてしまうのであった。

「全く……それで、何も思い出さないのか？」

「まだまだ見足りないのである！」

監視役の修とシグナムは溜め息を吐きながら、男………ピエール・モガツミーの監視兼案内役をやっていた。

苦労人である。

「何故、私がこんなことを………」

「気を落とすな……シグナム……俺だって辛い………」

肩を落としながらも、しっかりとピエールを見ている二人。その辺は流石に抜かりない。

「ん？　あれはキューブ君たちが訓練しているところかね？」

「ん？　ああ、そうだよ」

「おお！ 是非、近くで見学したいのである！」

「……………まあ、了解……………」

というか、もう誰も「キューブ」にはツツこまないのか。
確かに、散々「スバル」だの「ティアナ」だの教えたが、未だに
直らないのならば、諦めるのが上策である。

ピエールの強い要望により、三人は訓練所へと足を運ぶ。

「まだまだ遅せーぞ！ スバル！」

「はいっ！ ヴィータ教官！」

「いくよ！ エリオ！ キャロ！」

「はいっ！ 御願います！」

「お、御願います！」

「次はこっちだよ！ ティアナ！」

「はいっ！」

新人勢と隊長たちの訓練中の声が訓練場に響き渡る。
爽やかな朝に相応しい清しい光景である。

「おゝ。頑張っているであるな。良き哉良き哉」

何が嬉しいのか満足そうにうんうんと頷くピエール。

そんなピエールを見ていると、二人は本当に、この人物は操られていただけではないのか？ と疑問に思ってしまう。

「コイツは本当に操られていただけかもな……………」

「まだ確定は出来んが……………可能性は高いだろうな……………第一、お前やテストタロツサの話からして、そんな奴らの仲間とは思えん。これが演技なら話は別だがな」

まだ油断は出来ない。

そう思っているが、何処か憎めない。

それがこのピエール・モガツミーという人間だ。

「おお！ 訓練が終わったみたいだね！ お疲れの挨拶といこうじゃないか！」

「あ！ ちょい待て！ 単独行動は禁止だぞ！」

元気そうに飛び出し、駆けていくピエールを慌てて二人は追うのであった。

「それじゃあ、今日の訓練は此処まで。各自、身体や心のケアを忘れちゃダメだからね？」

教官である高町なのはの一言で、今日の訓練が終了する。

新人たちは背筋を伸ばし、自分たちを成長させてくれる教官たちにお礼を言う。

「ありがとうございましたっ！！」

そんな新人たちに背を向け、小さい赤毛の女の子……ヴィータは歩き出す。

「まあ、まだまだってとこだな」

新人たちの成長を願っての一言を残しながら。
ヴィータなりにアレンジされているが。

「見事だったよ！ キューブ君たち！」

「ッ!？」

パチパチと拍手を送りながら、笑顔なピエールの存在に、事情を知らないのはを含める教官達は、即座にデバイスを構える。

それを見たピエールはすぐさま優雅に片手を動かす。

「おっと。待ちたまえ。勘違い禁止！」

「全く……先にいくなって言っただろうが！」

すぐに後から修とシグナムがやって来る。

デバイスを構えているなのは達に説明を終え、敵意を収めさせる。

「そういうことかよ……ビックリさせんたって」

「悪いな。ヴィータ」

ポンポンとヴィータの頭を叩く修に、キレる。

「勝手に触んなくなって言ってるだろうが！ あとは何気にガキ扱いすんじゃないー！！」

「わわっ！ 冗談だっつーの！」

相棒であるグラフアイゼンを振り回しながら、逃げる修を追うヴィータ。

いつからか、こんな光景が日常と化している機動六課の訓練場なのであった。

「くすっ。相変わらずですね。修君たちは」

そんな穏やかなに日常の中に自然に溶け込む声がその場にいた全員に響く。

微笑みを浮かべながら、藍色の長髪をした女性は呟いていた。

「あっ！ ギン姉！」

スバルが驚いたように声をあげ、シグナムのすぐ側に来ていたギンガ・ナカジマに手を振る。

「やつほー。スバル。ちゃんと頑張ってる？」

軽く手を上げ、ギンガは駆け寄ってくる妹の調子を尋ねる。

妹は元氣そうに「うん。まずまずかな？」と返事をし、姉が此処に來た経緯を、今度は自分が尋ねた。

「八神二佐からの捜査協力要請を受けてね。今日は新しいデバイスを貰えるってことで、来ちゃいました」

はにかむ姉。

そんな姉に続いてはにかむ妹。

「うむ！ 姉妹仲が良いのは実に素晴らしいのである！！」

そんな二人の間に割って入るように、ピエールが声を大きくして言う。

突然の大声で、その場にいた全員が驚いてしまった。

「かくゆう我輩にも可愛い妹が居てね！ 妹は敵国に嫁いでしまったが、それでも！ 仲の良さは健在である！ 兄にしろ姉にしろ、弟、妹を心配しない者はいないのである！」

「……………」

そんなピエールの言葉に、人知れずティアナは俯いてしまった。

「何だ、お前には妹がいたのか？」

「待ちやがれっての！」

ヴィータに追いかけられながらも、ピエールが自分自身のことを語りだしたため、もしかしたら何か思い出したのかもしれない、と修は思い、話を繋げる。

刹那、グラーフアイゼンが修の後頭部を掠める。

「うむ。だが、我輩が気絶し、目を覚ます前までの話だが。目を覚ましてからは、先程、話した通りだよ」

腕組みをし、うんうんと頷く。

そんなピエールの言葉に疑問を感じたのはが、尋ねる。

「気絶して目を覚ましたらって……もしかして、別世界から連れてこられたの………？」

「可能性は無くはないね」

なのは後ろでフェイトが右手を顎に当て、思案する。
ピエールは首を傾げるが、すぐに両手を広げる。

「まあ！ 我輩は高貴な狐だから無問題である！ さあ！ 次はあ
つちに向かうのである！」

すぐさま無駄に華麗な走りを見せ、向こうに向かうピエールにシグナムは「やれやれ」と首を横に振りながら、後を追う。

途中でヴィータに仰向けの状態で馬乗りされ、ひたすらボコボコにされている修を回収しながら。

「彼は単なる被害者なのかな………?」

「んゝ………まだ分かんないかな………」

お互いに顔を見合わせ、ピエールの経緯を考えるフェイトとなのはだったが、答えは出てこない。

仕方ないので、来客であるギンガを連れ、その場にいたメンバー全員は隊舎へと向かった。

第八話「君はアレだ、ハムか!?! 大根か!?! ソーセイジかね!?!」

「では、虚言の宴を始めよう」

静かに男は現れた。

閉じた瞳と余裕の表情。

西洋の貴族らしき服装、マントに身を包んだ姿はまるで御伽噺の吸血鬼。

「ッ！ 何だ！ お前は！」

そのあからさまに場違いな恰好に、シグナムはレヴァンティンを構える。

「君に会うのも何回目か………今回は君を殺したが、最後の一撃には多少、驚かされたよ」

「貴様………その口振りだと、先日の列車襲撃事件の仲間か………?」

理解不能な言葉を喋る男にシグナムは修の話から聞いていた人物たちを思い浮かべた。

彼らはよく「前回」だの口走ることから想像は容易に出来た。

「違う………とは言い切れないかな？ 仲間では無いと私は思っているが、向こうがどう思っているかは知らないからね」

男性は大袈裟に肩をすくめる。

その際、シグナムを鼻で笑ったが、正面に居るシグナムはすぐに男の攻撃に備えた。

「何。機動六課などすぐに消え去るだろう。君達もそうだ。私も同様。世界の全てに価値など無いんだ。この世界はだけね」

「黙れ。今すぐそのお喋りな口を閉じさせてやる」

主が必死の思いで設立し、様々な仲間が集う機動六課を馬鹿にされ、黙っているほど、シグナムは冷徹ではない。

されど、怒りに支配されるほど愚かでもない。

静かに怒りを蓄え、一刀の元、男を叩き伏せようと思案する。

「結構。では手解き（ダンス）をしてあげよう。リズムは私に合わせてくださいませ」

男の両手がマントから突き出され、戦闘態勢に入った事が一目で分かった。

微笑は崩れない。

怒気を発するシグナムさえ、その笑みに僅かな恐怖を抱いた。

何処までも余裕めいた、その笑みを見て。

機動六課に任務あり。

「ホテル・アグスタ」で行われる骨董品のオークションの警護である。

先日、捕らえたピエールの思い出した情報と列車襲撃犯の一人が「アグスタ」の名を出したのがキッカで、機動六課の主力メンバーが召集された。

八神はやての守護騎士団もまた同様の理由で集められた。

戦闘に関しては、相手の実力は未知数。

既に闘った相手であれ強力な人物が多いために、主に隊長陣が最前線に立つことに。

新人勢と修は最終防衛ラインとしてアグスタ周辺に陣を取る。

八神はやても同様に前線に立ちたかったのだが、上層部からの命令でオークション会場に客の一人として参加させられることになった。

上層部の意志が全く見えない。

そうして警護を始め、一時間経ったところで、敵は来た。

「……………？ クラールヴィントのセンサーに反応……………」

最初に異変を感じたのはアグスタで指揮をとることになったシャルである。

右手の薬指にはめた指輪が輝き、敵が来たことを知らせる。

「シャーリー！」

すぐさま機動六課でセンサーを見ていた眼鏡をかけた茶髪の女性

……シャリオ・フィニーノ、愛称「シャーリー」がセンサーを確
認する。

すると画面にはアグスタを囲むように大量の敵が映し出される。

「本当に来ましたね……これは……魔力生成による擬似生命体
……?」

画面に映るのは奇妙なフォルムの生物。

黒い甲殻に刺々しい身体。

四速歩行で顔にはオレンジ色に輝く一つ目しかない。

そんな擬似生命体は何体も群れをなし、アグスタへと進んでいた。

「詳細は不明ですが、数は53体！ 気をつけて下さい！」

シャーリーの気遣いに頷き、シャマルは念話により、全員に敵の
襲来を告げる。

右手を突き出し、いかにも副隊長らしく振舞う。

主に治療がメインの彼女は、こうして前線に立って指示するのは
稀だからだ。

ちよっただけ嬉しいのかもしれない。

『敵は魔力生成により擬似生命体の可能性あり。その数、53！
周囲を包囲しているわ！』

『どうやら雑魚みたいだな……………』

『でも油断は禁物だよ？ ヴィータちゃん』

『わーってるよ。お前も気をつけろよな』

シャマルからの念話を受け、ヴィータは正面（北側）、なのはは東側の敵に向かった。

まずは小手調べと、ヴィータは紅い魔力の弾を精製し、グラーフアイゼンで殴り飛ばす。

シュワルベ・フリーゲンである。

牽制程度の攻撃だが、意外にも、敵は一発、ダメージを受けただけで簡単に消滅してしまった。

その呆気なさにヴィータは、殲滅後になのはに念話で話しかけた。その会話が先程のものである。

「こっちは片付いたかな……………？」

軽く額に掻いた汗を左腕の袖で拭う。

アグスタの西側の敵を全滅させた後、フェイトは南側に向かったシグナムの事が気になり、念話を試みる。

『シグナム。こっちは終わりました。そっちはどうですか？』

しかし、シグナムからの返事はない。

沈黙が続くのみ。

それはそうだ。

シグナムは今、雑魚敵の親玉らしき人物と闘っているのだから。

「……………？ 返事が無い？ もしかしたら……………」

シグナムの安否を気遣い、南側へと飛ぶフェイト・T・ハラオウン。

そんなフェイトが飛んでいく姿を近辺の森から見つめる視線があったことを、彼女は知らない。

「キャスト！」

「ぐっ！」

男が右手を振るうだけで、先程の生命体が一瞬で誕生する。

ノイズが原型を留める様に。

生命体は男の意思に従い、目の前の標的目掛けて突進する。

シグナムはすぐにレヴァンティンを振るい、攻撃を防ぎ、敵を撫で斬りにしていくが、すぐに男が敵を産み出すために、終わりが見えない。

「見ている……………」

奇妙な攻撃をレヴァンティンで叩き切り、シグナムは剣を鞘に収め、まるで居合い斬りをするような姿勢をとる。

途端に、周囲の空気が静寂を取る。

それでも男性はその場の空気に支配されず、自らのペースでシグナムに話しかける。

「おや？ “紫電一閃”とかいう技かね？ 同じ芸を何度もするのはマンネリだよ」

シグナムが驚くよりも前に、男は右手を軽く上げる。
するとどうだ。

「!？」

シグナムの足元から黒い竜巻らしきものが発生し、すぐに守護騎士の一人を覆ってしまう。

竜巻内は激しい鎌居達とノイズが混ざり、彼女の身体は上空へと運ばれる。

その過程で大量の傷を負いながら。

「cut……This world is a poor work.
k.

It is the worst because of the
younger brother of Zero……making
ng……駄作!！」

途端、狂ったように高らかな声で喋りたてる男。

その激しい渦の中で、多大な攻撃を受けつつもシグナムは見た。

男の見開かれた眼を。

真っ赤。

深紅。

毒々しい紅であつた。

まるで血の涙を流しているような流血。

恐怖さえ覚えた。

そう考えている内に、シグナムは竜巻の頂から舞い上がり、地面へと落ちてくる。

そこで、二つの黒い塊が彼女を圧殺するように、食べてしまうように地面から生え、シグナムを挟み込んだ。

「ぐあっ………！！」

彼女の悲痛な声もノイズに掻き消される。

圧迫されたシグナムは地面に無様な恰好で落ち、無防備な姿を曝す。

相棒であるレヴァンティンも喋らず、正に絶体絶命というやつである。

「脆いな。私と踊ろうというのなら、まずは人となり、その人を超えることをお奨めするよ」

再び眼を閉じた男は優雅に微笑む。

肩をすくめた状態で、両手をゆっくりと上げつつ、シグナムに近づく。

そうして、伸びた爪でシグナムの首を斬ろうとした時だ。

「シグナムッ！」

上空から金髪ツインテール……フェイトの声が男性の耳に届く。男は首を一回だけ素早く傾けた後、ゆっくりと声の主へと顔を向ける。

その動きはさながら霊か恐怖の人形か。

目が開いていないのが、唯一の救いであった。

そうしてフェイトを視認した男は一言、呟く。

「君か………前は接点が殆ど無かったな」

アグスタ西側より、猛スピードで突進してきた人物を発見したシヤマルはすぐさま念話で全員に、そのことを告げる。

その際、修がいち早く行動し、西側の戦線に立つ。

新人勢もすぐに集合し、敵の襲撃を待った。

敵は即座にやってきた。

シヤマルの情報通り、凄まじいスピードで修に襲い掛かってきたのだ。

もはや恒例になりつつあり、修の脳内に流れる謎の映像。今回も例外ではない。

「貴様らに足りないモノッ！ それは優雅さ勤勉さ鮮烈さ苛烈さ温度差感度さ雄弁さ感慨さ硬度さ……そして何より速さが足りないっ！！」

男の速度は尋常ではなく、次々と機動六課の面々を切り裂いていく。

彼女ら切り裂いている物は、余りの速度に視認出来ないが、細長い何か……刀のように見える。

それを一本だけではなく十本、持っているように見えた。

鮮血が飛び散り、辺りはすぐに血の海と化していく。

惨い映像が暫く流れていたが、またも突然、映像は消える。

「キッ！ クカカカカカカカ！！」

修が気付いた時、男は奇声を上げながら、両指先に仕込んでいる日本刀の刀身を振り回しつつ、愉快そうに笑っていた。

対する修はすぐさま男を捉えようと心に思い、能力を発動させるが、全く捕らえることが出来ない。

「な、何でだ………！？」

修の能力である『妄想具現化』はいわば、神の力といっても過言ではない。

戦闘に関しては、彼が思ったことが現実となるのだから。

だが、先程から修は「敵を捕らえたい」と思っているのだが、一向に現実にならない。

いや、正確には空気が具現化した巨大な手が世話しなく出現し、男を捕らえようと頑張っているのだが、努力は実らない。

まあ、最初に神様の言ったことを完全に忘れているようなので、仕方ない。

「修さん！ 援護します！」

ティアナ、キャロが援護に回り、共に攻撃を繰り出すが、当たる気配は全く無い。

何せこの人物、移動する際、姿が見えなくなるほど速いのだ。

「キーーーーヒッヒィ！ 小生に追いつけるとでも？」

いつの間に移動したのか。

男は修の背後で呟いた。

修と新人勢がその事実に気付いた時には、修の背中には大きくクロスされた切傷跡が残された後だった。

「ぐあっ……………！！」

背中から出血し、倒れこむ修。

その際、敵の追い討ちに意識を集中させるが、それは杞憂となった。

男は既に修の前方数十メートルの所に居たのだから。

「修さん！！」

新人勢の絶叫が響くが、修の背中の傷はすぐに消えてなくなっていく。

治癒も修の能力の一部である。

「くそっ……………！」

苦悶の表情を見せる修に、男は満足した表情を見せる。

「お前さんは厨二病……………否！ 邪気眼だな！？ 実に実に実に実に実に痛々しい！！ 勉強したか！？ バイトは！？ 夏休み、冬休みだからってgdgdするなよ！？ 宿題は！？ 友達と遊んだか！？ アバババババババババ」

狂った様に意味不明な言葉をしきりに捲くし立てる敵。
やがて頭部を激しく上下に揺らしていたが、いきなり前傾姿勢になり俯く。

そして、ゆっくりと上げた顔には狂気が満ちていた。

「小生らは世界の代理人
天罰の地上代行者

小生らが使命は

小生らが世界に逆らう愚者を

その肉の一片までも絶滅すること――――

……………ダメだ。決め台詞がなーんも思いつかね

舌を出し、下卑た笑みを浮かべながら、男は狂った声を響かせた。

第九話「ダメだ、小生。当たらん」

「手段のためには目的を選ばない連中もいるのだよ。とどのつまり、小生らのような」

真っ赤な瞳の男は愉快そうに呟く。

その指先に付けられた刀身の切っ先はエリオとキャロの横顔に向けられている。

「っ……………！」

恐怖に脅える二人を一刻も早く助けるべく、修たちは思案する。されど、良策は思いつかず、時ばかり流れていく。

エリオとキャロの間に入り、肩を組みながらも、親指の刀身は二人の横顔に向けられている。

男のスピードを持ってすれば、二人の間に入り、肩を組むことなど造作もない。

狂気で歪んだ笑みが、ひたらずに幼い二人に恐怖を与え続けた。

それでも二人は泣き叫んだりはしない。

これでも機動六課の一員。

もう子どもではないのだから。

「くそっ……………！ 一瞬でも隙ができれば……………！」

修の能力で男を二人から引き離すことは可能だろう。

だがしかし、先程の修の能力を持ってしても、男を捕らえられなかった事実から、能力発動より前に、男が二人の首を切り落とす方が早い。

どうしようもないのだ。

「知ってるか！ 小生は一日に一回でも人を殺し忘れると死んでしまうんだぞ！ 殺人鬼と呼ばれた小生が言うんだから間違いない！ 嘘だけど」

ハイテンションで叫ぶ男の声は、耳元で叫ばれている二人の脳髓に響き渡る。

と、そこで一筋の光明が見える。

『修さん。スバルさん。ティアナさん。今からフリードをこの人の背後から攻撃させますから、その間に御願います』

『！？ で、でもキャロ！ その人の速度を見たでしょ！？ 下手したら………！』

弱気になるスバルであったが、それをティアナが一喝する。

『バカッ！ そんな事、考えないの！………分かったわ。任せなさい』

正直、ティアナにも自信は無かった。

先程の牽制で、男の速度は見ている。

目で追えないほどの脚を有する男より早く、行動出来るのか。確かに、スバルの言う通り、下手をすれば………

だが、やるしかないのも事実。

いつまでも男が二人を生かしておくか分からないのだから。

『……………そうだな。俺達に任せろ。エリオとキャロは、ソイツの腕から逃れたら、すぐにこっちに走れ。良いな』

『……………はい！』

エリオ、キャロ共に覚悟を決めた目をして頷く。

その様子を男は不思議そうに眺めていたが。

「泣きそうな顔から一転して決意を決めた顔に……………これは何かありたわばっ!?!」

「キュクルー!!」

フリードの発した火炎、ブラストフレアが背中に炸裂する。

直前に、キャロのブーストとバインド効果により、男へのダメージが上がる。

「走れっ!!」

修はそう叫び、男に向かって駆ける。

スバルも同時に駆け出し、ティアナはクロスミラーージュの銃口を男に向けたまま、エリオ、キャロを迎える。

エリオ、キャロは走り出し、無事にティアナの元へと辿りつく。

「友情は孤独より強し! んっん! 名言じゃないな。コイツは」

攻撃を受けたにも関わらず、超ハイテンションな男は微動だにせず、キャロとエリオが安全地帯まで移動するのを律儀にも待っていた。

その真意は測りかねるが、流石に攻撃をしてきたフリードは許せないのか、後方にいる竜に狙いを定める。

フリードも既に逃走を計っていたが、男にとっては十分に狩りの範囲内である。

まさに飛び掛ろうとした、その時、幼き声が男の耳に聞こえてきた。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

キャロの「錬鉄召喚」

魔力により鎖で対象を縛り付ける魔法だ。

「本当は余裕で避けられるのデスヨ？ 物語の展開上仕方なく捕まるのデスヨ？ 展開というか攻撃方法が酷いというか幼稚というか何と言うか。とりあえず酷い！」

コミカルな口調で、決してマイペースを崩さない男に魔法で生成された鎖が絡みつく。

それにも関わらず余裕綽々な男に構わず、修とスバルは攻撃態勢に移る。

「リボルバー……………キャノン！！」

「喰らいやがれっ！！」

スバルの腕に装着されたナックルスピナーが高速回転し、衝撃波を発生させる。

それをナックルに纏わせたまま、拳を繰り出すリボルバーキャン。

左手が緑色に輝き、見ただけで破壊力のありそうな拳を打ってきそうなのが分かる修の攻撃。

「ちょ！ 待った待って止めて止めて止めてとめったあ！！」

その二つが合わさり、男の腹部に直撃する。

あまりの衝撃に魔力鎖も解け、男は後方にあった木の幹に直撃する。

「ばたんきゅー………」

そう呟き、項垂れた。

「ハア！」

「キッ！」

バルディッシュ・ハーケンモードと男のマントがぶつかり合う。男のマントは硬化が可能なためか、魔力刃とぶつかり合ってもな

んとも無い。

それどころか、攻撃が終わった直後には元の布状に戻っているのだから驚きである。

「お見事。魔法使い（メイガス）。貴公のような淑女と闘えて、私は光栄だよ」

戦闘中にも関わらず、男は拍手を送る。

フェイトは肩で息をしているものの、まだまだ限界ではない。

「擬似とはいえ、軍集団^{レギオン}を一掃し、かつ私との連戦にも関わらず、その身のこなし……これを賞賛と言わずして何と言おうか」

男はフェイトとの戦闘開始直後、すぐさまシグナムと同じように、あの黒い擬似生命体を何体も出現させた。

それをフェイトはシグナムを庇うために、大技を繰り出さず、わざわざ接近戦で一体ずつ片付けていったのだ。

そのかいあってか、男はシグナムから距離を取り、一対一でフェイトに勝負を申し込んできた。

そうして数度、打ち合って、現在に至る。

「しかしだ。この舞台は盛り上がるに欠ける……早々にクライマックスにするのも一興と思うのだが……どうかな？ 君の意見を聞こう」

何処ぞの舞台演出家、監督を思わせる口調で、男はフェイトに尋ねる。

この意味合いはつまり、早く決着をつけようという事なのだろうか。

何で、自分の戦闘相手はすぐに私と決着をつけたがるのだろうか。

そんな疑問を抱きつつも、フェイトは静かに頷く。

早く、負傷したシグナムの手当てをしなければならぬからだ。

先程、ヴィータとなのはに念話で救援要請をしておいたが……

「宜しい！ では幕引きといこうか！」

叫んだ男の眼が開かれる。

「うっ！？」

眼を見たフェイトは、正直、引いた。

真っ赤な血が流れ出る、その眼を見たら、誰だって引くだろう。

「キキキッ！」

右手を軽く上げるだけで、フェイトの足元から黒い竜巻が湧き上がる。

フェイトは空に飛び、その攻撃をかわす。

そのまま男の懐へと飛び込み、一閃を繰り返す。

「フフッ。魔法使い（メイガス）、頭を使ってくれたまえ。幾らなんでも、そんな幼稚な攻撃は通じないよ」

「！？」

フェイトのなぎ払いの直前、男は自分自身をマントで包み込み、その場から消えてしまった。

次に男の声が聞こえたのは、背後。

振り返るより早く、奇声がフェイトの耳に響いた。

「フェイトッ！」

「ヴィータ!？」

止めの一撃を喰らう直前、ヴィータがフェイトに突っ込むように飛んできて、救出した。

「……………無粋な……………むっ？」

攻撃が不完全とはいえ、終わったためか、男の眼は閉じられ、口調も狂気を含んでいなかった。

ただ、眉をひそめた男の身体にはピンク色の魔力の縄が縛り付けられたが。

「これは……………」

ふと強大な力を感じ、上空を見上げる。

そこには、魔力を集め、今まさに放たんとする白い悪魔の姿が確認できた。

「デイベイン……………バスターー!!！」

強大な一撃だが、なのは自身のリミッターとリロード無しのためか、威力はいつもよりは劣っている。

それでも一撃貰えば、全治数ヶ月は免れない。

「何と。今回は此処で終幕か。呆気ない」

男はそんな恐怖を前にしても、淡々と自分に向けられた現実を見つめる。

そのまま、男は魔力に包まれた。

「貴方の身柄は私たちが預かります。抵抗はしないでください」

バインドで男を縛ったまま、なのはは冷淡に告げる。

男は微笑を浮かべたまま、木の根元でぐったりとしている。

服は所々が破けているが、サービスシーンというには程遠い。

むしろフェイトのバリアジャケットが破れるべきだろう。

ヴィータはシグナムを連れ、すぐにアグスタへと戻った。

フェイトも傷は多いが、致命傷は無いためか、この場に残り、なのはと行動を共にしていた。

「残念だが、それは不可能だね。全てはフィクション。私はレプリカ。彼らも同様。何もかもが無価値であり、無意味。何も知らぬ赤子はただただ繰り返すことしか出来ない。これほどの駄作は、私は見たことがない！ 実に不愉快だ。とはいえ、もうじき終わる。仮に最終公演で無かったとしても次で終わる。終幕かつ終末、終焉だよ。何と味気ないことか！ つまらない幕引きにはしたくないからね。全ては私、もしくは彼のワガママだったのかもしれない。それも結構！ 面白いじゃないか！ 下らない私や世界には下らない結末こそ相応しい！ 喜劇でも悲劇でもない！ 中途半端なのだよ！

何もかもなにもかもナにもかモナニモかモナニモカモ
！！ 魂魄ノ華、蘭ト枯レ、杯ノ蜜ハ腐乱ト成熟ヲ謳イ、例外無ク
全テニ配給！ 嗚呼、是即チ、無価値ニ候！！」

立て捲るように話し続けた男は眼を見開き、その狂気をなのはと
フェイトに見せる。

流石に、喋るのを止めさせようとしたのはだったが、その前に
男の身体は真っ赤な血液となって、溶けてしまったのだ。

「逃げられた…………わけじゃないみたいだね……………」

勘だが、男は消滅したのだと判断したなのは。
その表情は冷たい。

「……………なのは……………」

その背後でフェイトが心配そうに声をかける。

ビクツと肩を震わせ、振り向く高町なのは。

顔にはいつもの優しさが戻っており、フェイトの不安を多少、軽
減させる。

「えっと……………とりあえず、戻ろっか？」

「あ、うん……………」

既に地面に染みていた血液すら完全に消滅したため、どうしよう
もなくなった二人は、アグスタへ戻ることにした。

「良し。エリオもキャロと無事だったし、後は気絶したコイツを捕まえるだけだな」

スバルと共に男を吹き飛ばした修は、ティアナの側にいる幼い二人が無傷か確認する。

二人はお互いの身体を見てみて、本当に傷が無いか確認。揃って頷き、修とスバル、ティアナに報告する。

「いや残念。どうやら小生たちの勘違いだったみたいだ。しかしオリジナルは手際が良いね」

その声は修の目の前で発せられた。

「ッ!？」

新人たちと修は驚愕し、戦闘態勢に移ろうとするが、それより前に男は距離を空ける。

あの攻撃にも関わらず、男は無傷も同然の態度を取っていた。

腹部の傷跡も既に無く、全快の状態といっても問題ないだろう。

そんな男の近くにはあの擬似生命体に酷似した生命体が数体、集まってきた。

その内の一体が、壊れかけの木箱を頭に当たる部分に乗せている。どうやら、修たちが闘っている間にお目当ての物を探し当てたようだ。

しかし、先程の男の台詞から、それは勘違いだったらしく、生命体たちは違った物を持ってきた、ということらしい。

「しかし、此処は実に良いところだ……今度、休養に來たいねえ……もう終わるけどさ。では、諸君。サラダバー。次は皆殺しだ」

男は有無を言わずに一瞬で消え去り、擬似生命体の元となったオリジナルの生命体も蜃気楼の如く消滅する。

残ったのは幹が凹んでいる木と壊れかけの木箱だけであった。

第十話「変態? 天海!」

アグスタでの事件は被害者もおらず、ロストログアも無事であった。

襲撃犯だが、一人は消滅と思われる。

もう一人は逃走してしまったが、上層部は機動六課に対して、何の咎めもしなかった。

護衛を依頼したアグスタ側の人々も「何も問題は無かったのだから」と言ってくれたために、機動六課は処罰等を受けなかったのである。

それから暫く経ったある日、一つの事件が起きた。

「クハハハハ! これですよ! 私の目指した朱の色!」

聞こえるのは悲鳴か断末魔。

見えるのは血か死体。

在るのは死か絶望。

其処に救いは無い。

ミッドチルダ南部にある「アルトセイム地方」

ミッドチルダの中では辺境とされており、豊かな自然の残る地域である。

そこで惨劇が行われていた。

長い銀髪に特殊なマスクを装着した狂人が現れ、本能のままに人々を狩り始めたのだ。

当然、そこに住まう人々や観光に来ていた人々は命を狩られ、絶命していく。

命を刈り取る二本の鎌はまるで死神のようであった。

「ほら。どうしました？ もっと遊んでくださいよ」

もはや息の根の絶える直前の男性の頭を踏みつけ、その背中に鎌を何度も振り下ろす。

血液が飛び散り、内臓が顔を覗かせる。

内なる器官を鎌で引っ張り出した後、男性の後頭部と一緒に薙ぎ払う。

一連の行動に躊躇いは見られない。

むしろ、それを行うのが楽しくて仕方が無いようにすら見える。

「ああ……………良い……………」

恍惚した表情で身体を仰け反らせ、二、三度、全身を震わす。

絶頂に達したらしい。

こうした惨劇が行われている少し前に戻り、機動六課に視点に向けてみよう。

「我輩の良い人ぶりに勝る宝は無いね！」

機動六課の廊下にモップをかけながら、ピエールはご機嫌に言う。
その背後ではザフィーラが溜め息を吐いている。

「お前は一応、捕虜なのだから、もう少し立場を弁えてだな……………」

「それではつまらないのである！」

すぐさまザフィーラとの距離を詰め、目前にまで顔を迫らしてくるピエール。

勿論、モップがけをしながらだ。

「わ、分かったから、顔を近づけるな」

「おお！ソーリーソーリー！」

またもご機嫌でモップがけを始める。

呑気に鼻歌まで歌っているため、やはり、相当ご機嫌なようだ。

「ハア……………何故、私が監視役なのだ……………とはいえ、シグナムは
負傷中だから仕方あるまい……………」

またも溜め息を吐き、ザフィーラはピエールの後を静かに追う。
途中、ピカピカの磨かれた床に足を滑らせそうになりながら。

先日のアグスタの件で重傷を負ったシグナムは休養を余儀なくされた。

外傷こそ目立つものの、命に別状は無いとのこと。

今は機動六課内でシャルによって傷の治療に励んでいる。

シグナム曰く「この程度、傷に入りはしない……！」とのことだが、その後に気絶してしまったので、やはり重傷なのに違いない。

ザフィーラもまた仲間としてシグナムを心配しつつも、今はシグナムの役目であった。ピエールの監視役を引き受けている。

そんな時であった。

機動六課内に久々のアラームが響き渡る。

すぐさま慌しくなる六課内。

ザフィーラもすぐに動き出し、ピエールを別室へと連れて行く。一応、捕虜に情報を漏らさないための手段である。

「コイツは………!？」

陸戦用空間シミュレータで訓練をしていた新人達十高町なのは、ヴィータは映像として映し出された画面を見て、驚愕した。

主に驚いたのはヴィータであったが。

映っていたのは一人の狂人。

自然の蔓延る木々の中で愉しく殺戮を行っていた。

すぐにスバルはキャロとエリオの目を手で隠し、惨劇から子ども達を守る。

それでも音と声は聞こえてくる。

「いけませんね……余計に喉が渴いてきました」

言葉を言い終わると同時に鎌が人に突き刺さる音が聞こえ、断末魔が木霊する。

見ているだけで吐き気を催す内容であった。

「あつ、す、すみません！」

すぐにシャーリーの声が聞こえ、映像がはやての顔へと切り替わる。

「……………まずはヴィータ。怒りを堪えや」

「ッ……………」

真剣な表情のはやてに凶星を当てられたヴィータは身体をビクツと震わす。

スバルがヴィータを見ると、その表情は見たことないくらいまで恐ろしく歪んでいた。

まるですぐにでも人を殺しそうな顔に。

「場所はアルトセイム地方。そこでアイツは殺人行為を行っている……今回の相手は一人とはいえ危険過ぎる。隊長の私たちだけで出撃します。スバル達は六課で待機。ええな？」

「え？　で、でも………」

戸惑うスバルだったが、隊長陣の放つ重苦しい空気のため、反論は控えた。

「ほんなら、なのはちゃんとヴィータはすぐに集合な」

それだけ述べ、モニター画面は消える。

「……皆。というわけで今日は此处までね………」

なのはは何処か気分が悪いのか、あまり元気の無いまま、そう告げ、ヴィータと共に出撃準備に向かう。

「………何か、なのはさん体調悪いみたいだったけど、大丈夫かな………？」

「そうでしたね………」

「ヴィータ副隊長も凄く怖い表情でしたし………」

「……………」

仕方なく六課へと戻る途中の新人勢だったが、どうもティアナの様子が変だ。

なのはやヴィータのみではなく、ティアナの様子も可笑しいことに気付いたスバルは声をかける。

「ティア？ 大丈夫？」

俯いていたティアナの顔を見るために、覗き込むように顔を移動させたスバル。

そこで見たのは目を開き、歯をガチガチと鳴らし、脅えるティアナの顔であった。

「……………え？ あ、ああ。だ、大丈夫……………よ……………」

そんなスバルに気付いたのか、すぐに顔を上げ、何でもないように装うために作りかけの笑顔を浮かべるティアナ。

だが、その笑顔もすぐに消え去り、再びティアナは俯いてしまった。

「ティア。本当に大丈夫？ 調子が悪いなら医務室に……………」

スバルが心配して、医務室へ連れて行こうとした時だ。

「皆。ちょっとロビーに来て貰えるかな？ ティアナちゃんは気分が悪いなら医務室に行っても良いけど……………」

画面が現れ、シャリーが映った。

「あ、今からですか？ 僕達は構いませんけど……………」

エリオはキャロと共に心配そうにティアナを見る。

ティアナは俯いていた顔を上げ、シャーリーに問う。

「……………さっきの奴についてですか……………？」

あまりに弱弱しい声。

普段のティアナからは感じられないほど、弱っている声だった。

「……………ええ。ティアナちゃんは知っているから、聞かなくても大丈夫だけど……………」

一呼吸置いて、シャーリーは躊躇いながらも言葉を紡ぎ出す。

ティアナは弱弱しくも覚悟を決め、頷く。

「……………大丈夫です。行きます」

「ティア……………」

「分かったわ。それじゃあ、待ってるから」

そう告げ、モニターは消える。

スバルがティアナに何か言葉をかけようとするが、言う前にティアナは先に行ってしまう。

とりあえず、残された三人は急いで後を追うことにした。

「集まったわね。それじゃあ、今回の“敵”について説明するわね。後、気分が悪くなったら、すぐに言うこと。良いね？」

ロビーに着替え終わり、集合した新人勢にシャーリーがモニターを前に、まるで先生のように説明する。

エリオとキャロは頷き、ティアナも少しだけ頷く。

やはりスバルは心配そうだ。

「じゃあ、始めるね………」

シャーリーは画面に触れ、何やら打ち込んでいく。

すると何も映っていなかった画面に、突如、銀色長髪に特殊なマスクをし、薄笑いをした人物が映し出された。

「名前は————」

シャーリーが名前を口に出そうとした時である。

「『天海』。広域次元犯罪者。主に殺人・殺戮行為を行う愉快犯」

廊下から修が現れ、シャーリーの台詞を横取りしてしまう。

「修さん！ 隊長たちと出撃したハズじゃあ！？」

「私の台詞だったのに……………」

突然、現れた修にその場にいた全員（シャーリーを除く）が驚愕しざるを得なかった。

修は軽く溜め息を吐き、自分が残された理由を簡潔に述べる。

「一応、緊急出動があるかもしれないから、待機しておいてさ。はやてが」

頭を右手で軽く掻きながら、修はスバル達の側に座る。

「で、だ。コイツは非常に危険だ……………コイツだけはな……………」

いつもの修とは違う神秘的な表情に、台詞を取られて落ち込んでいたシャーリーも真面目にならざるを得なくなる。

そんな修にスバルが疑問を投げかける。

「えっと……………何かあったんですか……………？ 修さん……………」

「……………ああ。そうだな。シャーリーの説明の前に話してやるよ」

黙っているエリオもキャロも無言も保ったまま、耳を立てている。相変わらずティアナの調子は悪そうであったが、それでも話を聞く姿勢は解いていない。

スバルも真剣になる。

シャーリーも着席し、ロビーは修の独壇場となった。

「あれは……………とある世界のロストログアを確保しに行った時だっ

た……………」

「おー。これか」

修は一人で自然の生い茂る世界へとやって来ていた。

目的はあるロストログアの確保だ。

他のメンバー（隊長陣）等かというと、修の異常に強い力を認知しているために、別に危険性はないロストログアの確保ぐらい、一人で大丈夫だろう、と考えたために来ていない。

それで良いのか、機動六課。

「さて……………はやてー。確保したぞ」

修は片手に持った小さな宝石状のロストログアを通信画面の向こうにいる八神はやてに見せる。

はやては、うんうんとご機嫌に頷く。

「お疲れさん。ほんなら、帰還してや」

「了解」

通信画面を切ると、修はロストログアを専用の特種なケースに入れ、空を見上げる。

広がる大空は澄み切っており、見た者の心を綺麗にさせる。

「じゃ、帰りますかね……………」

そう言い、修が空へ飛ぼうと思った時だ。

初めて感じる何かが、修の内部を支配した。

「ッ……………!？」

あまりにも大きい何か。

修の今までの人生の中で、決して感じられることの無かった何か。

これは感情なのだろうか。

否、違う気がする。

ならば、何だ？

「おや……………これは懐かしい顔が」

その正体を掴む前に、一人の男が修の前方に現れた。

長い銀髪に口元を隠している特殊なマスク。

変わった風貌よりも目を引く、二本の大鎌。

その刃は血塗られており、腐臭が修の鼻まで届いた。

「今、此処で殺してしまっても構わないのですが……………それでは、

あの方達の今までの頑張りが水の泡になってしまいますし…………ふむ。久々の味見としましょうか」

そこで分かった。

これは恐れだ。

狂気だ。

常識を逸脱した狂気だ、と。

「お前は……………なっ!？」

修が台詞を言い終わる前に、男性は蛇のような動きで、修との間合いを詰め、無造作に大鎌の一本を振るう。

「つと!」

突然の攻撃にも動じず、修はバックステップで回避行動を取る。されど、男は一步踏み進み、振るった大鎌を持っている手首を半回転させることで、追撃に移る。

「ぐう!」

これには修も対応しきれず、右腕を少し切られてしまう。

しかし、修はすぐさま左手で拳を繰り出し、反撃に出る。

この攻撃を見事に腹部に喰らい、男は軽く仰け反り、よろめきながら後退する。

「……………」

この時、いつもの修ならば追撃に出たハズだろう。それなのに、それをしなかったのには理由がある。

己の本能が追撃の案を却下したのだ。

男から滲み出る狂気、その異常な狂気が修の本能、否、生存本能を呼び起こした。

「おっと……………いやあ、お強い。やはり何処にでもいる狂人の私では敵いませんかねえ……………んふふふふ……………」

攻撃を喰らったにも関わらず、痛がるそぶりを全く見せず、むしろ笑ったような表情を思わせる目をする男。

その声色に虚勢等は無く、むしろ純粹に闘いを好む氣質が聞き取れる。

「さて……………味見もしましたし……………今回はこの辺で。いずれ真なる宴でお会い致しましょう……………」

意外にもキチンと礼をし、男の姿は蜃気楼の如く、消え去った。

「アイツって……………天海……………だよな……………?」

そこで修はようやく気付いた。

あの男は天海だ、と。

今まで、何回も見てきた顔だから分かる。

忘れるハズがない。

ただ、奴の放つ異常な狂気のせいで、それを思い出すに至らなかつただけ……………

「ッ……………そうだ……………治療しないと……………」

天海の放っていた狂気に警戒心を抱きつつ、思考を動かし始めた

時、修の右腕に付けられた切り傷が痛み始めた。

修はいつもの如く、傷を治すイメージを頭の中に思い浮かべる。これだけで傷が治るのだから、本当に便利な能力である。

「……………あれ？」

だが、傷は治っていなかった。

再びイメージをするが、同様の結果。

「……………何でだ……………？」

今まで、こんなことは無かったのに。

不思議である。

ともかく、能力による傷の治療が不可能ならば、一刻も早く戻るだけだ。

そう思い、修は空へと舞った。

「というのが、奴と会った時の話だな」

右指の親指と人差し指の第二関節を顎に当て、目を閉じ、頷く。周囲の反応はどうやら首を傾げる、という行為に纏まったらしい。

「えっと……………それだと、天海の恐ろしさが分かんないですけど……………」

スバルの的確な一言に、エリオもキャラも苦笑いしながら、同意するしかなかった。

ティアナだけは気分悪そうにしているだけだったが。

「……………何か自分でも説明するべき場面の選択を間違えた気がする……………」

微妙に落ち込む修の肩を軽く叩きながら、シャーリーが『自分の出番が来た』と内心喜びながら立ち上がる。

「それじゃあ、それに上乘せする形で、説明を続けるね」

そこでようやくシャーリーも話を再開することにした。
ずっと映っていた映像を指差し、解説を始める。

「もう何年前から存在する犯罪者だね。時空管理局も逮捕しようと躍起になっているけど、未だ逮捕暦は無し」

「曰く「歩く狂気」「殺人行脚」「殺戮の体現者」とか大袈裟なあだ名が付いているね」

「そして……………幼少期のなのはさんに瀕死の重傷を負わせたり、ヴァイス君の任務の邪魔をしたり……………ティアナちゃんのお兄さんがお亡くなりになった直接の原因……………」

その言葉で三人は同時にティアナに振り返った。
ティアナは虚ろな瞳で画面を見続けているのみ。

「此処最近はレリックを回収しているとかいう噂もあるけど、これはまだ噂に過ぎないんだ……ともかく、こと戦闘に関しては異常。管理局も艦隊一隻を向かわせた事もあったけど、たった一人で返り討ち。彼を逮捕するには、少なくともSランク以上が最低条件……」

それで合点がいく。

何故、今回、新人勢は待機なのか。

話にならないからである。

相手が桁違いに強過ぎるのだ。

そんなところに新人勢が行っても、すぐに返り討ちにあってしまうだろう。

だからこそ、今回は隊長陣だけで向かったのだ。

「…………アイツは…………兄さんの仇…………でも、それ以上に、アイツはイカれてる…………!! 私 の 憎しみを恐怖に変えるぐらいに……!!」

「ティ、ティア！」

そこでティアナの内に溜まった感情と恐怖が表面に漏れ始めた。半ば狂乱気味のティアナをスバルが落ち着かせ、医務室へと同行する。

残されたエリオとキャロも、スバル達がいなくなったために、今日はとりあえず解散という風になった。

「…………あの子たちには、知らないままでもいいさせたかったんだけど

ね……………」

「……………ああ」

残ったシャーリーと修は画面に映った狂人を見ながら、呟いた。

「うう……………」

ベッドで横になりながらもうなされているティアナの側で、スバルは心配そうに眺めていた。

「ティア……………」

「体調自身に問題はないんだけど……………精神の問題ね。事件の時のショックが再発的に続いているみたいね……………」

近くではシャルマルがカルテを片手に、症状を軽く説明している。
と、そこへ意外は人物が医務室にやって来る。

「やあ！ お見舞いに来たよ！」

ピエールである。

捕虜であるピエールは本来、医務室などには立ち入れないハズだが、調子の悪そうなティアナを廊下で眺めてから、どうしても心配になりザフィーラ監視の下、特別に許可された。

「あ……ピエールさん」

「ティアナ君。君はもしかしてお兄さんの件で悩んでいるのかね？」

いつになく真剣な雰囲気でピエールは問う。

捕虜だが、その姿勢と心意気は素晴らしいピエールは新人勢に「さん」付けで呼ばれる程になっていた。

またピエールもようやく各自の名前を覚えた様だ。

「な、何でそのことを？」

ピエールは一応、捕虜のため、情報は公開されていないハズ。

それを不思議に思ったスバルが尋ねる。

「我輩が訓練を初めて見に行った時、スバル君の姉であるギンガ君が来たね？ その時、我輩が“姉妹”という単語を出した時、ティアナ君が一瞬、暗い顔をしたのを見たからだよ」

「！……見られていたんですか……？」

一瞬の表情を見逃さず、かつそれだけの情報でティアナの現状を言い当てたピエールの勘は鋭かった。

「うむ。我輩は高貴な狐だからね」

ニヤリと笑むピエール。

「まあ、我輩は捕虜。貴公らの情報を知る権限は無いのでね。だが、これだけは言っておくよ」

あたかも全てを知っているかのようにピエールは自らの言葉で告げる。

「ティアナ君は実に素晴らしい。復讐など愚かだ。君は正しい選択をした。それを誇りに思うべきだ。間違っただけだ。いいよ。だが、焦ってはいけない。焦りは身を滅ぼすだけだからね」

「！」

ティアナの目が見開かれ、スバルもまた驚く。
ピエールの言葉は、まさにティアナの過去そのものを言い当てていたからだ。

「では、我輩は失礼するよ。長居すると怒られてしまうのでね」

優雅に立ち上がり、いつものテンションに戻り、医務室を出ようとするピエール。

そんなピエールにティアナは背中から声を掛けた。

「貴方は一体………？」

その言葉に顔だけを振り向かせ、フツと笑う。

「我輩は高貴な狐。スゴくて、賢い、狐である」

格好よく決めた直後、何もない廊下で転んだが。

「アレー！？」

「……………」

その場にいた全員が少しだけ微笑んだ。
多少はティアナの心が救われたのだろう。

その後、機動六課隊長陣が向かった時には、既に天海は姿を消していた。

新人勢も翌日に天海について詳細を聞かされ、この件については終了とする。

機動六課の誰もが、天海には係わり合いたくないと考えていた。
正義感が強い修や隊長陣を除いて。

勿論、天海の脅威を知らない者たちも同様に。

第十一話 「僕はちがうぞ僕は違うぞ僕はちがうぞ」

「アンタは本当にアイス好きよねえ………」

「好き好き大好き♪」

手渡された五段アイスに目を輝かせながら、スバルはベンチに向かうティアナの後を追う。

今日は晴天だ。

スバルとティアナは街に出て、休日を満喫していた。

そう。今日は休日である。

朝に第二段階へのテストを何気に合格した新人勢は、街に出て、楽しんでいた。

前回からは二週間後のお話であるため、ティアナの心の傷もある程度癒え、機動六課も「天海」絡みの事件については何のお咎めも無かった。

「ねえねえ。アイス食べたらさ！　ゲーセン行こう！」

「良いわねえ。たまには」

呑気にベンチに座りながらアイスを食べ、そんな会話をしている二人は実に幸せそうだ。

今の二人には不幸は似合わないだろう。

「キャラは、六課に来る前はこういうお休みとか過ごしてた？」

「実は……あんまり……」

エリオとキャラもまた、電車を使い、街に来ていた。スバルやティアナとは同じ街だが、いる場所は違う。せつかくの休日なのだ。

一々、全員で行動する理由もない。

「でも、フェイトさんに遊園地とか水族館に連れて行って貰ったことはあるよ」

「本当？ 僕もだ」

二人は公園のベンチに座り、道行く人々を眺めながら、会話をしている。

幼い癖に意外とお堅い内容である。

「フェイトさん……今でこそ分かるけど、あんなに忙しいのに、その合間で僕たちの面倒を見てくれて……」

「うん……」

フェイトの無償の愛情に本当に感謝し、二人は会話を続けていく。と、そこでエリオのストラダ、待機フォルム（腕時計）が光り、スバル達からの連絡があることを告げる。

「あ。はい。こちらライトニング03」

「はい。こちらスターズ03。どう？　ちゃんと休日楽しんでる？」

スバルも相棒であるマツハキヤリバー、待機フォルム（ネックレス）を持ちながら、エリオに話しかける。

「はい。まだ始めたばかりですが、何とか」

「いやゝ何か、困ってることとか無いかな？　って思っただけなんだけどね……」

何かと気を使えるスバルなりの優しさである。

「ありがとうございます」

キヤロがエリオの隣で微笑みながらお礼を言う。

「お陰様ではありません」

ストラダにスバルの顔のみ表示されていたが、ティアナが発言すると同時に、ティアナの顔が画面分割され映し出される。

「そっちはどんな感じ？」

「えっと、予定通り、公園を散歩して、それからデパートを見て回って……」

「それからご飯を食べて、映画を見て、夕焼けの海岸線を眺めるってプランを作って貰ってますので……」

キャロの台詞に、スバルとティアナは同時に呆氣に取られた顔をする。

「ちゃんと順番にクリアしていきます」

エリオの発言に、何処か苦笑いをしながらも、スバルたちは「健全だね」などのフォローを入れる。

その反応に今度はエリオとキャロが首を傾げる番だった。

「いや、こっちの話。それじゃあ、何か困ったことがあったら、こっちに連絡するんだよ？」

「はい！」

「ありがとうございます！」

再びスバルとティアナの優しさにお礼を言って、連絡を絶つ。

「スバルさんとティアさんも優しいね」

「うん」

仲良き二人なのであった。

こうして二人は次の予定、デパートに向かったのであった。

平和な地上から一転して地下道路。

救急車らしき乗り物がサイレン音の無い赤いランプを照らしている。

何やら無線が飛び交い、人々は慌しく動き、現場を納めようとしていた。

「陸士108部隊。ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝いに参りました」

そこではスバルの姉であるギンガが現場検証を行っていた者たちと合流し、挨拶を済ませたところであった。

「ありがとうございます。早速ですが、現場に案内します」

ギンガに返事をした管理局員の男性は、ギンガを事後現場へと案内する。

「横転事故と聞きましたが……」

歩きながら、ギンガは自分が知っている情報を話し出す。

「ええ………ですが、事故の現場がどうも奇妙でして………」

「奇妙……………」

「はい。百聞は一見にしかず。ご覧下さい」

言葉で説明するよりも見せた方が早いと思ったのだろう。
男性は事故現場に到着し、その現状をギンガに見せた。

「これは……………」

散らばっているのは主に缶詰などの食品類。

だが、その荷物には見たことのない気味の悪い蟲達が集っていた。

「蟲……………」

本能で『蟲』と理解してしまった。

見たこと無い生命体だが、素人のギンガでも分かった。

これは紛れもなく『蟲』だ。

何故、分かったのか？

生命としての本能である。

「はい。調べてみたところ、データに無い種類でして……………運転手も行方不明……………それと、こちらも見てください」

男性は蟲たちを後にすると、ギンガを更に奥へと案内する。

「あ……………」

ギンガの目を引いた物が、そこにはあった。
四角く黄色い物体。

中央の穴からは何本かケーブルが飛び出し、引き千切られていた。

「生態ポッド………!？」

暗い何処か。

あるのは血なまぐさい死体とモニターのみ。

狂気と死を体現した部屋には長い銀髪に特殊なマスクを装着した
男性………天海がニタニタと笑いながら立っていた。

モニターには紫色の髪をし、一際、厳しさが垣間見える目付きの
女性が映っている。

「獲物が逃げ出しました。天海様。如何なさいますか？」

「ククク………ご馳走を頂く前には前菜も必要なですよ………」

それだけ述べ、フラフラと左右に揺れながら、天海はその場を後
にしようとする。

そこへ凜とした少女の声が背後からかけられる。

「天海様。それならアタシも出たいんだけど」

「おや。ノーヴェさん………貴女もお好きですねえ」

天海は別に構わないようだが、画面に映っている女性がそれを止めさせようとする。

「ダメよ。ノーヴェ。貴女の武装はまだ調整中なんだし」

そんな女性の制止を無視するようにノーヴェと呼ばれた少女は話し続ける。

「天海様のもう一つの顔…………アタシも見てみたい」

「…………アッハッハッハッハッ！ 奇特な方だ…………ですが、その様な理由ではダメですね。貴女はまだまだ幼い。もう少し殺人というものに慣れなくては…………」

「…………分かった」

天海の言葉に逆らうわけでもなく、ノーヴェは背を向けて、去る。同時にモニターの女性が今後の方針を淡々と語り始める。

「擬似レギオンの出撃は状況を見てからにしましょう。オリジナルは数体しか借りていませんので。また妹たちの中から、適任者を選んで出します」

「頼みましたよ…………ウーノさん。貴女のような素敵な女性に出会えたことを心から感謝致します」

「天海様。その様な言葉は、実際に会って、二人きりの時に御願います」

天海の言葉に表情を変えなくとも、言葉には微妙に恥ずかしさが混じっている。

「ククク………そうですね。失礼しました………では、行きましょ
うか………」

目に宿った狂気を輝かせ、天海は動き出す。

途中、死体の山の天辺に突き刺してあった二本の鎌を取ってから。

「ハア………ハア………」

地上に近い下水道。

其処では一人の金髪少女が息も絶えながら、必死で当ても無く歩き続けていた。

少女の体力を奪う原因としては左手首に巻きついた鎖。

その鎖の先には何やら重要そうな物が入ったケースが二つほどくっ付いている。

「あっ………！」

途中でケースの一つが出っ張りに引っかかり、下水に落ちてしま
う。

少女はそんなことは一切、気にせず、歩き始める。

「逃げなきゃ………」

弱弱しく、そんな言葉を呟きながら。

「……………サマ……………い……………!」

少女の遙か後方。

下水の暗闇から赤い液状の身体をうねらせ、ゆっくりと近づいてくる化け物の声が耳に届く。

「……………!」

「エリオ君?」

二人仲良くデパートへ向かう途中のエリオとキャロであったが、そこでエリオが何かに気付いたように周囲を見渡す。

「キャロ、今、何か聞こえなかった? ゴトツとかゴリツていうか……………」

「え……………?」

エリオのみに聞こえた物音。

すぐさま周囲を見渡し、少し先にある路地裏への道を見つけると、エリオは走り出す。

それに続き、キャロも走る。

路地裏の入り口に辿り着いた二人。

その直後、視線の先にあったマンホールの蓋が開き、中から少女が出てきた。

「ん？ キャロから全体通信……………」

これまたゲーセンに向かう途中だったスバルとティアナのデバイスにキャロからの通信が入る。

「何だろ……………」

「こちらライトニング04。緊急事態につき、現場状況を報告します」

少女を介抱しているエリオに代わり、キャロが報告をするようだ。

「サードアベニューF23の路地裏にて、レリックと思しきケースを発見。ケースを持っていたらしい、小さな女の子が一人。女の子は意識不明です」

その通信報告を六課内にいたなのは達もモニターを通じて見た。

「指示を御願います！」

「スバル、ティアナ。ゴメン。お休みは一旦中断、すぐにエリオ達と合流してくれる？」

「了解しました」

すぐに別モニターに移っていたスバル達に指示をするのは。流石である。

「救急の手配はこっちです。二人はそのままケースとその子を保護。応急手当をしてあげて」

「はい！」

フェイトも指示を出し、二人のするべき行動を告げる。

「全員待機態勢。席を外している子たちもすぐに配置に戻ってや」

はやても別室でモニターを見ており、すぐさま行動に出る。

「……………此処は原作通りかよ……………くそっ。これならエリオ達に付いて行くんだったぜ……………」

修は頭を抱えるが、今更遅い。

はやての部屋で談笑をしていた修も気持ちを切り替え、はやての後に続く。

「じゃあ、早く応急手当を……」

フェイトの指示通りに応急手当を施そうとする二人だったが、その背後のマンホールのすぐ下で仮面の様な顔が奇妙に揺れた後、地下へと戻っていく事には気付いていなかった。

第十二話「(∴)」

「キサマキサマキサマじゃない!!」

地下道路で繰り広げられる化け物とフォワード陣＋ギンガの闘い。赤黒い液状の身体も持った化け物は身体中から気味の悪い蟲を大量に飛ばし、襲い掛かってくる。

「な、何なのっ!？ この気持ち悪いのっ!」

スバルが飛んでくる蟲を叩き落しながらも身震いする。それもそのハズ。

飛んでくる蟲はどれも見たことがなく、異常なまでにグロテスクな容姿が多いのだから。

「と、ともかくっ! 今はレリックの確保が最優先よ!」

ティアナがようやく見つけたレリックの入ったケースを抱えながら、クロスミラージュから魔法弾を放つ。

その全てが蟲に当たり、消滅するが、蟲の数は一向に減らない。倒しても倒しても、蟲は化け物の身体から飛び出してくるのだから。

「キサマ知っているか!？ 魂は回転を好む!」

幼女に応急手当をしたエリオとキャロは、その後、スバル、ティアナと合流した。

その際に、幼女の鎖の先にもう一つケースがあったことを知り、ロングアーチにケースの捜査を依頼したのだ。

その結果、もう一つは地下道路に落ちていることが判明。

すぐにやってきた高町なのは&フェイトに幼女を託し、新人勢は地下道路へと向かった。

その間に地上でも動きは起きていた。

先日のアグスタで現れた擬似生命体「レギオン」が大量に現れたのだ。

幸いなのか、レギオンは飛行能力を有しており、群れは海の上を飛んでやって来ていた。

それらを訓練中にナカジマ三佐の許可を得て、抜け出してきたヴァイタとリインフォース？が迎撃。

ある程度は倒したものの、その圧倒的数に苦戦を強いられる。

そのため救援隊であるヴァイスとシャルルに幼女を託したなのはとフェイトが空中の相手をするようになった。

だが、レギオンの性能は前回とは全く違う。

実にチームワークの取れた動きで隊長たちを翻弄する。

故に、クロノによる「限定解除」を行われた八神はやての広域魔法で一気に殲滅に取り掛かる事に。

このため、ヴァイタは新人勢のフォローに回った。

また修は原作通りになるかもしれないと踏んで、シャルルと共にヴァイスの操縦するヘリに乗り込んでいる。

地下にやって来た新人勢がギンガと合流し、ようやくレリックの入ったケースを見つけた、その時、化け物は現れ、戦闘に…………

以上、駆け足に現状説明を終わる。

丸く白い面の目、口に当たる部分に黒い丸が書いてあるだけの簡単な顔に赤黒い液状の身体。

顔はカタカタと左右に揺れ、薄気味悪さを倍増させている。

身体から噴出する蟲と甲高い奇声が後押しをしているのも原因だ。攻撃の際には液状の身体から巨大な蟲の足らしき物体が飛び出てくるのも不気味である。

「どうせ僕もキサマも無駄だ無駄だ無駄ああはははははははは!!」

身体をバネのように縮め、天井近くまで吹っ飛んだ化け物は身体全体を巨大な爬虫類の口に変化させ、ティアナの持っているケースを狙う。

「てえやあ!!」

スバルがそうはさせまいとウィングロードを展開させ、化け物まで一直線に駆ける。

そのままりボルバーナックルによる一撃で壁まで吹き飛ばす。

「ぐばああああ!!」

実に苦しそうな声を上げ、化け物は壁にぶち当たり、ズルズルと床に着地する。

「数の子もかの世界も！ 妄執の前には取るに足らぬ骸に過ぎない！」

再び叫び、今度は地面と同化する。

といっても、その身体の特徴な色は目立つためにバレバレだが。

「はあっ！」

今度はエリオがストラーダによる攻撃を加えようとする。

だが、化け物もそこまで低脳ではなく、エリオの影を真下に捉えた瞬間、身体を地面から離し、爆発直前の蕾のように膨らむ。

「えっ!？」

「きょうかいクルツクルツ!!」

真上に向けて極太の赤いレーザー（実際は蟲）をぶっ放す。

ストラーダにより、直撃は防いだが、エリオの身体には大量の蟲がまとわり付く事となった。

「うわわわっ!？」

驚きの声を上げ、蟲を身体から追い払う様に手を動かしながら、すぐにエリオは後退する。

「フリード！」

「キュクルー！」

そこでエリオを守るためにと、キャロがフリードにブレストフレアを命ずる。

フリードは主の命令を忠実に守り、炎を己の手前に溜め、一つの火球として吐き出す。

キャロもバインドにより、化け物を捕らえ、ブラストフレアは見事、命中する。

「けひひひ狂界を超えたワレにこのような生温い臨界点ひぎい！」

強がりと言った後に、化け物は悶え苦しむが、直後、左右に身体を激しく振り、身体を燃やす炎を消していく。

その姿でさえ、不気味であった。

大きめなりアクションにより、驚いたキャロの帽子が飛ばされ、ティアナの側まで飛んできた。

「しかし、本当に何なのかしら……アレ………」

ティアナを護衛していたギンガが、化け物から視線を外さずに、この場で最も冷静な銃使いに尋ねる。

「さあ………ただ、アイツがレリックを狙っていることは確かです」

「………そうね」

ギンガとティアナもただ戦闘を見ている訳ではない。

二人の前には大量の蟲がいるのだ。

主の代わりに、レリックを奪わんとする凶暴かつ気持ち悪い蟲たちが。

「無駄の極地！ 低脳無能役立たず！！」

いつまでも拉致の明かない戦闘に飽きたのか、化け物はそう叫び、身体を一つの巨大な球体へと変貌させる。

「な、何……………！？」

突然の行動にキャロは脅えつつある。

そんなキャロを庇うようにエリオが前に立つ。

どうやらエリオの身体に纏わり付いていた蟲は全て潰れたらしい。その証拠に、エリオの服には蟲の血らしきものが付いている。

「すべてここにかえればいいのに」

薄っすらと。

眩くように。

だが、確実に。

その言葉は地下道路に響いた。

途端、丸まった身体の中央に巨大な一つ目が出現し、スバル達を睨む。

「……………！」

あまりの嫌悪に背筋に冷や汗が流れたが、それより前に丸くなつた化け物は縦横無尽に地下道路を跳ね回り始めた。

勢いは凄まじく、当たった箇所は全て蟲へと変貌していくのが厄介であつた。

「っ！ 皆！ 一旦、退くわよっ！」

狂気染みた攻撃を見たティアナは冷静に状況を判断し、一旦、退却を指示する。

本来ならば、このまま逃げ出したいところだが、この化け物は確実に自分達を追ってくるだろう。

第一、身を隠すことなら可能かもしれないが、逃走するには蟲たちが多過ぎる。

「う、うんっ！」

ティアナの指令にすぐさまスバル達は従い、化け物から距離を取り、ティアナとギンガの元に走る。

その間も化け物は目標を見失つたように跳ね回るのみ。

蟲たちは確実にスバル達を狙っていたが、それはギンガが叩き落す。

「そ、それで、これからどうしよう………?」

とりあえず少し離れた位置にあった柱の裏側に隠れたメンバーは今後の対策を考える。

ティアナは冴えた知能で自分達に与えられた指令を思い出す。

「任務は悪魔でケースの確保。だけど、この蟲の量じゃ撤退は不可。でも、ヴィータ副隊長とリイン曹長がこちらに向かっているから………」

「合流すれば、あの化け物を叩けるかもしれないってことだね」

スバルがティアナの言葉を継ぎ、続きを言う。
すると、その答えに念話で反応する人物が現れた。

『よし。中々、良いぞ。スバルにティアナ』

「ヴィータ副隊長！」

二人の声が重なり、地下道路に飛んで向かうヴィータの耳に入る。

「私も一緒です！ 二人共、状況を見事に読んだ、ナイス判断ですよ！」

リインがヴィータの側を飛びながら、二人を褒める。

「行くぞ！ リイン！ アイゼン！！」

「はいです！」

グラーフアイゼンはヴィータの掛け声と共にギガントフォルム、叩くことに特化したフォルムに変わる。

「うおりやあああああ！！」

力いっぱいアイゼンを振るい、天井をブチ破り、ヴィータとリインが地下道路に現れる。

「捕らえよ！ 凍てつく足枷！」

着地もせず、浮遊した状態でリインがすぐさま魔法フリーレンフエッセルンを発動させる。

「凝固凝固凝固アモルファス無理無理無駄無駄うひひひぎい！」

相変わらず狂ったように叫ぶ化け物の周囲に氷の魔法が展開され、存在そのものを固まらせる。

「ぶっ飛べえ！！」

ヴィータがアイゼンを構えたまま、化け物へと突っ込み、力の限り振るう。

固まった化け物は氷と共に自身の存在が壊れるぐらいの勢いで叩かれ、壁さえもぶち抜く勢いで吹っ飛ぶ。

その吹っ飛んでいく過程で、気味の悪い丸に巨大な目玉状態から、元の形状に姿を戻していく。

「なにをなにをなにをおおおお!!」

叫びながら、化け物は活動の停止直前にまで追い込まれた。

突然の攻撃に蟲たちは行動出来ず、主が窮地に追い込まれた事により、殆どが消滅していた。

「悪いーな。遅れちゃった」

「皆、無事で良かったです!」

「か、管理局員が公共施設を破壊して良いのかな……?」

苦笑いをしながらも、スバル達はヴィータとリインによって助かったのである。

ケースも無事だし、とりあえず、フォワード陣の役割は果たせたハズ。

「何故、貴様らは分かうとしない、僕らは無駄な存在なのに」

またも呟き声が聞こえた。

同時にティアナの持っていたケースが地面に同化していた蟲によって、上空に跳ね上げられ、ヴィータ達が空けた穴付近に待機して

いたレギオンによって持ち去られてしまった。
蟲はすぐさま消滅したため、フォワード陣は反応さえ出来なかった。

「んなっ!? チッ……お前ら! すぐに追え!」

「は、はいっ!」

驚愕するヴィータは、すぐにスバル達に後を追うように叫ぶ。
スバルもすぐさま返事をし、ウイングロードを発生させ、その後を追う。

一応、他のメンバーが落ちないように螺旋状に発生させてある。

スバルとギンガが先頭に立ち、その後にティアナ達が続く。
その前にティアナはキャロに、先程拾った帽子を返す。

「ねえ。レリックの封印処理。出来る?」

「あ、はい! やれます!」

キャロの元気な答えに、ティアナは思考を巡らす。

「考えがあるんだ。手伝って」

「はい!」

ティアナは考えを走りながら話すようだ。
返事をしたキャロもティアナの後に続く。

「さて、それじゃあアタシはお前を捕まえるか……………ッ!？」

ヴィータはスバル達が行ったのを確認すると、壁の奥にいるハズの化け物に視線を移す。

化け物が無意味な抵抗をしない内に捕獲するためだ。

しかし、その時には既に化け物の身体は泥のように溶け始めていた。

「……………ボクらは無意味。君らも同じ。彼が完全に死ななければ終わらない。終わらせろ。じゃないと輪廻は永遠に続く。苦痛だ。ずっと苦痛だ。だからボクは狂ってしまった。無駄なのに。無駄なのに狂ってしまった。悲しい。哀しい。でも、もう終わる。彼女は完成される。間も無く。今回は全てアイツらの劇なんだ。弟に向けての。手向けだよ。最後だから。最後だから」

「お、おい。何を言って……………」

ヴィータが既に敵意のない化け物に近づこうとするが、化け物の身体はどんどん液状となって消えていく。

リインも固唾を吞んで、見ることにしか出来ない。

「ループ……………イツヒヒヒヒ!! ループループループ!! ループをキレエエエエエエ!!」

最後に再び奇声を上げ、化け物は完全に泥と化した。

床に広がった汚らしい赤と黒の混ざった泥は、最初こそ、その存在を示していたが、時間経過と共に、消滅し始めた。

「…………チツ。考えても仕方ねえ。スバル達を追うぞ！　リイン！」

「は、はいです！」

思案しても答えが出るハズもない。

仕方ないから新人勢を追うのが、今は一番なんだ。
それ以外に答えは出ない。

今はまだ。

「ご苦労様です。もう帰っても良いですよ」

市街地の交差道路の上で、天海はレギオンが持ってきたケースを渡され、ほくそ笑んでいた。

レギオンは頷き、空へと舞う。

周りには誰もおらず、一人で悠々としている。

「さて…………挨拶をしておきたかったです…………まあ、すぐに来るでしょう」

天海は道路脇のガードレールに腰を置き、伸びをする。
そうして眺めた空は戦闘が繰り広げられている、彼にとって実に

平和な空であった。

「良い天気ですねえ……眠くなってきました……」

ふと、うとうとし始める。

未だに誰も来ない状況。

常に殺し合いの場が存在出来る場所だった天海にとって、戦場は日常そのものだ。

通信を切ってある今は、誰の邪魔も入らない。

「それでは一度……寝るとしましょうか……」

戦場の真っ只中であるにも関わらず、天海は遂に寝てしまった。

「で……えっと、この人が天海……?」

後々にやって来たスバル達。

寝ていた天海をすぐさまバインドで縛り、完全に動けない状態にしている。

途中でティアナが半狂乱になりかけ、ヴィータは問答無用でグラーファイゼンで殴りかかろうとしたが、何とか押さえ込むのに成功した。

最初は畏かと疑ったが、リインのバインドで縛っても動かないため、完全に寝ていると確信。

こうして横になって寝ている天海を囲むに至ったのだ。

「戦場で寝ていて捕まるなんて……………本当に異常ね……………」

ギンガが顎に右指を当てながら、呟く。

ティアナはスバルの背後に隠れているし、ヴィータは大人しくしているが、目が殺気立っている。

リインは視線を天海に向け、何もしない様に見張っている。

エリオはストラーダの切っ先を天海に向け、脇にケースを持つ。

その後ろにはキャロとフリードという構図だ。

「……………ともかく、捕まえんぞ。コイツは犯罪者だからな」

ぶっきら棒に呟くヴィータの言葉には、やはり怒気が含まれている。

そんなヴィータに少し、ビクビクしながらもスバル達は頷く。

同時刻

とあるビルの屋上では、細長く巨大で布に包まれた“何か”を持った女性と、その背後で呑気に空を眺めている眼鏡の女性が会話をしていた。

「ディエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

「ああ。遮蔽物も無いし、空気も澄んでる」

ディエチと呼ばれた長いポニーテールを持つ女性は視線を空いっぱい^ぽに動かす。

流れる雲が平和な時を表している。

此処は戦場だが。

「良く見える」

ディエチの瞳の中のカメラが遠くを飛行するへりを捉える。

機動六課のへりだ。

中には先程、救出した少女が乗っているハズ。

「でも良いのか？ クアットロ。撃っちゃって。ケースは残せるだろうが、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

クアットロという名の眼鏡の女性は妖艶に微笑む。

「うふふっ。天海様とウーノ姉様曰く、『あのマテリアルが当たりなら、本当に鍵となるなら、砲撃程度じゃ死んだりしないから大丈夫』だそうよ」

可愛い顔して、なんちゅう恐ろしいことを言うのだろうか。

平気でそんな恐ろしい言葉を言い放つくアットロにディエチは「ふうん」と軽い反応しか示さない。

そして出番を待っていた細長く巨大な何かに巻きついていた布を取っ払う。

待っていたのは巨大な砲身。

とても女性一人では持つことも出来ない巨大な砲身である。

ディエチが砲撃の準備をしている間に、クアットロの顔のすぐ横にモニターが出現し、ウーノの顔が映し出される。

「クアットロ。天海様が捕まったわ」

「……………はい？　今、何て？」

ズレ落ちた眼鏡を直しつつ、もう一度ウーノに尋ねる。

「天海様が捕まったわ」

「……………何故です？　天海様が捕まる訳が……………」

クアットロの言葉に、ウーノは首を下に曲げ、溜め息を吐きながら答える。

「……………レリックの入ったケース回収後に転寝をしていた所を捕らえられた様よ」

「……………ああ、天海様らしいですね」

苦笑いで返すことしか出来ないクアットロ。
ウーノはまたも深い溜め息を吐くのだった。

「今はセインが様子を覗ってるけど……………」

「フォロー……………します？」

ウーノの後の言葉を繋げたクアットロの眼鏡は輝いており、彼女

が一筋縄では行かないであろう人物を示していた。

「御願い」

そう頼み、モニターは消失する。

同時にクアットロは姉妹特有の通信回線で「セイン」という妹に連絡を取る。

『セインちゃん』

通信を受け取った人物は交差道路の下の道路、つまり天海が捕らえられている真下で、地面から腕だけを出した状態で返事をする。

『あいよー。クワ姉〜』

『こっちから指示を出すわ。お姉様の言う通りに動いてね』

『ん〜。了解〜』

ちよっと楽しそうに返事をし、セインの腕はまるで海に潜るかの様に、地面に沈んでいった。

またも視点は変わる。

「……………見えた……………！」

高町なのはとフェイト・T・ハラオウンは共に飛行しながら、ヘリを目指していた。

中には保護した少女が乗っている。

他の同乗者に修もいるとはいえ、空中戦ではなのはとフェイトの方が一日の長があるだろう。

そのためにヘリのカバーに來たのだった。

「良かった……ヘリは無事……！」

フェイトの言葉になのはも頷く。

一瞬、安堵の表情が浮かぶ二人だったが、すぐに周囲の異変に気付く。

「……………！」

「市街地にエネルギー反応……………大きい！」

機動六課のメインモニタールームでも同様に異変が察知されていた。

シャーリーの言葉に続き、通信士で髪が紫色のルキノ・リリエが驚きの声を上げる。

「そんな……………！ まさか……………！」

先程のビルの屋上では、ディエチが銃口をへりに向け、エネルギーをチャージしている所だった。

その表情には笑みが零れており、とても今から人を殺す様には見えない。

「インヒューレントスキル『ヘヴィバレル』、発動」

「む……………？ おやおや。寝てしまいましたか」

まだディエチがヘヴィバレルを発動する少し前、ようやく天海は目を覚ました。

「っー！！」

すぐに全員が戦闘態勢を取る中、ティアナだけは身体をビクッと震わせた。

天海はすぐに身体が効かない事と、現状を把握し、目の前にいるフォワード陣を眺めた。

「おおっと。寝ている間に捕まってしまいましたか。これはお恥ずかしい」

何処となく紳士的な話し方、普通に話す分には好青年にすら思える天海にヴィータは鼻先にグラーファイゼンを突きつける。

「大人しくしてろ。お前を逮捕する。抵抗したら………殺す」

ヴィータの殺気はますます膨れ上がり、今の管理局員という立場が無かったら、間違いなく殺害していたであろう気迫で言い放つ。

「怖い怖い………ですが、逮捕も良いですけど、大事なヘリは放って置いて宜しいので？」

此処に至るまで、何回も繰り返してきた道理だ。
今更、間違える台詞でもない。

「ッ！」

天海の言葉に全員が驚愕する。

「あと12秒」

ディエチの砲撃までのカウントダウンが始まった。
間も無く発射。

そうすれば、ヘリは木っ端微塵だ。

「11………10………」

「ああ、そうでした。言うのを忘れる所でした……貴方は”また守れないのですね”

薄笑いを浮かべながらの一言に、流石のヴィータもキレた。

「ッー!!」

瞳孔が開き、グラーフアイゼンを天海の頭に叩きつけようとした、その時。

巨大なエネルギーの塊が発射された。

その音は市街地に響き渡り、ヴィータの行動を遮った。

だが、それは同時にヘリの搭乗者達の死を意味していることになる。

ヘリに砲撃は容赦なく当たる。

轟音を撒き散らし、機動六課のモニターをジャミングでノイズだらけにする。

そんな中でも面々は諦めず、状況把握に努めた。

必死の声が通信となり、フォワード勢の耳にも入る。

「そんな……………」

「ヴァイス陸曹とシャル先生、修さんが……………」

認めたくない事実にはエリオとスバルは驚きで気を取られる。

「デメエ!!」

我に返ったヴィータは、今度こそグラーフアイゼンを振るう。
だが、それを上半身を仰け反る事でかわす天海。

「落ち着いてください。私は善良な一般人ですよ？」

目が笑いながら、ヴィータを見下している。

その視線にますます怒りを募らせる。

もう一度、今度はその首を叩き折ろうとするヴィータに、スバルが止めに入る。

「ふ、副隊長! 落ち着いてください!」

スバルの静止を「うるせえ!」と左手で払う動作で一喝したヴィータは激情する。

このままではヴィータは天海を殺しかねない、流星にそれはマズいので、全員で止めようと思った時であった。

ギンガはエリオの背後に近寄る腕を目撃した。

「エリオ君! 足元に何か!」

「えっ? うああ!」

ギンガの言葉に全員が振り返った瞬間、セインは地面から飛び出てきた。

そのままエリオの腕に切り傷を作り、ケースを奪う。

「頂きっ」

微笑しながら再び地面に沈む。

「くそっ！」

天海の逮捕も重要だが、レリックが盗まれたのはマズい。
ヴィータは天海への殺意を無理矢理押さえ込み、セインの後を追う。

「あれはセインさんでしたか……おっと」

天海が他人事のように事態を眺めていると、目の前に再びセインが現れた。

セインは天海を抱きかかえ、そのまま地面に沈んでいく。

「あっ！ コイツ！！」

ヴィータは咄嗟の事態にグラーフアイゼンを投げ捨て、滑り込みで捕まえようとするが、それよりもセインの方が早かった。

交差道路の下から出てきたセインはゆっくりと更に下にある道路に降りていく。

「もう。しっかりして下さいよ。天海様」

「ククッ……失礼しました。助かりましたよ。セインさん」

「っ……そ、そんな！ 当たり前じゃないですか！」

天海に耳元で呟かれ、セインは顔を真っ赤にしながら、地面に足を着ける。

「で、では、今回は退きましようか」

「御願いますね」

敵がすぐに襲ってくるかもしれないために、二人は地面に沈み、戦場から離脱した。

「うふふのふ〜♪ どう？ この完璧な計画！」

「黙って。今、命中確認中」

隣で優雅にはしゃぐクアットロを黙らせ、ディエチはカメラで煙に包まれているヘリの墜落を確認していた。予想というか、確実に落ちているハズだ。手応えはあったのだから。

「…………あれ？ まだ飛んでる」

「あら？」

クアットロも首を傾げ、目を凝らす。

が、彼女にはディエチの様なカメラ機能はない。

ディエチだけはカメラを更に起動させ、ヘリに焦点を合わせる。

ヘリには透明かつ魔法の紋章が刻まれた黒と白の混ざったシールドが張られ、守られていた。

「ケッ！ 嘗めるなよっ！」

ヘリの窓から修がそう叫んだが、流石にディエチには聞こえないだろう。

修の能力により、砲撃は完全に防がれた。

「あら〜」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ……マジで………？」

驚いてこそいるが、その表情は余裕である二人。

だが、すぐさま驚異はそこまで迫っていた。

大量の黄色い魔法弾が二人に降り注いだ。

当たる事は無く、その場から飛び退き、かわす。

ディエチはヘヴィバレルを持ったままだ。

下の方にあるビル郡の一つの屋上に着地した二人は、今まで自分

達が立っていた場所に視線をやる。

一体誰が攻撃してきたのか、それを見るためだ。

「見つけた」

だが、攻撃の主は自分達の背後に降り立っていた。

「こっちも!？」

「速い………!」

振り返る二人にフェイトは攻撃を仕掛けようとするが、それよりも前に、再び二人は跳ね飛び、逃げる。

フェイトも飛行し、後を追う。

「止まちなさい! 市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します!」

フェイトの周りに幾つもの閃光が輝きだす。

プラズマバレットである。

簡易な誘導性、着弾時に放電しながら拡散するため、効果範囲が広がる魔法だ。

先程のクアットロ達を襲ったのも、これだ。

「今日は遠慮しときます〜!」

空を飛んで逃げるクアットロとビル群の屋上を跳ねながら逃げるディエチ。

「逃がさないよ!」

その先ではなのはが待ち構えていた。

「うふふっ。 I S 発動…………『シルバーカーテン』！」

クアットロがそう呟くと、ディエチと共に、二人の姿は蜃気楼の如く消え去る。

「あっ…………はやて！」

フェイトの叫びに、はやては迅速に対応する。

「位置確認。詠唱完了。発動まで後4秒！」

市街地から遠く離れた海上で魔方陣を二つ、展開しながらはやては叫ぶ。

「了解！」

なのはとフェイトはすぐさまヘリの方へと後退を開始する。
何が始まるというのか。

「離れた…………？ 何で…………！？」

「まさか……………！」

市街地の道路上に姿を現した二人は上空を見上げる。
其処に広がっていたのは黒く雷撃を纏わり付かせる魔法状の球体。
見る者を恐怖で脅えさせるような感じだ。

「広域……空間攻撃……！」

「うっそーん！」

両手を頬に持っていく、驚くクアットロだが、やはり余裕は崩れていない。

その口調から分かる。

ディエチの方は結構、ヤバイ状態であることを理解している。

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック・エミッション……！」

詠唱完了、トリガー発動により、巨大な黒い魔法状の塊は縮小し、限界まで到達した時に膨大に膨れ上がった。

その勢いは市街地を飲み込むほどである。

「あああああああ……！」

クアットロがディエチを抱え、空へと飛び上がり、全力で逃走する。

結果が功を結んだのか、多少は負傷したものの、直撃は免れた。

『投降の意思なし………逃走の危険ありと認定』

フェイトの長年の相棒、バルディッシュは冷静に状況を見極める。

『砲撃で昏倒させて捕らえます』

今度はなのはの相棒であるレイジングハートの声だ。

二人は逃げてきたクアットロとディエチを挟み込むように待ち構えていた。

フェイトは左手を、なのははレイジングハートを構える。

「ッ！！」

逃げ場なし。

絶体絶命。

自分たちは此処までかと思われた時だった。

「ディエチ。クアットロ。ジツとしてろ」

凛々しい声が二人の救世主となる。

その声に気付いた二人は二回ほど頷く。

「IS発動…………『ライドインパルス』」

「トライデント……………」

フェイトの目の前には魔方陣。

二回程、カートリッジをリロードする。

「エクセリオン……………」

レイジングハートも同様に二回。

そして……………

「スマッシャー!!」

「バスター!!」

強大な技は互いに相殺。

中央にいたクアットロ達には、当然、直撃したはずだ。
爆風が周囲に行き渡る。

「ビンゴ!」

六課のメインモニターを見ていた茶色の髪の女性通信士……………ア
ルト・クラエッタが指を鳴らす。

シャーリーも敵に直撃したことを喜んでいる。

『じゃない! 避けられた!』

「ええ!?!」

なのはの通信に全員が驚く。

『直前で救援が入った!』

『アルト! 追って!』

「は、はい！」

なのはの突然の指令にやや慌てつつも、アルトは急いでコンソールを操作していく。

なのは達から少し離れた市街地の道路上。

そこに紫ショートカットの女性がクアットロとディエチを脇に抱え、降り立った。

「ふわぁ……トーレ姉様。助かりました」

「感謝……」

ディエチは心底、疲れ、安心したように言う。

「ブーツとするな。さっさと立て」

トーレなる女性は厳しい視線と言葉で二人に行動を促す。

腕を組みながら、説教を始める。

「馬鹿者共め。監視目的だったが、来ていて良かった。セインはもう天海様とケースの確保を完遂したそうだ。合流して戻るぞ」

トーレの一言に項垂れながらも、二人は立ち上がり、後続く。

こうして、今回は機動六課の敗北に見えた。
が、しかし、完全敗北では無かった。

レリックは無事に手に入ったのだ。

ティアナの機転により、レリックに嚴重封印をかけ、幻術でキャロの帽子の中、一厘の花として誤魔化していたらしい。

ヴィータも呆気に取られたとか。

帰還した天海達の方も大変であり、レリックを奪えなかったのは誰のせいだ、結局は何処に行ったかの、多少揉めたものの、エネルギー反応を示したモニターにより、小さい龍使いの帽子の中にあったことが判明。

更に過激に内輪もめを始めるナンバーズであったが、その場は天海の鶴の一声で納まったのだった。

また幼女は無事に保護された。

こうして休日にならなかったが、フォワード陣初めての休日は幕を閉じた。

かくして惨劇は始まろうとしている。

第十二話「(∴)」(後書き)

見れば見るほど、技術力の無さと作品への思い入れが薄い気がします……

一応は完結まで書いてあるのですが……
今後頑張りたいと思います。

第十三話「閑話休題式 ― 全ては私の仕組んだ戦よ―」

目覚めた少女の名前は「ヴィヴィオ」と言った。

ヴィヴィオはすぐに「高町なのは」「フェイト・T・ハラOWN」に懐き、彼女たち二人を其々「なのはママ」「フェイトママ」と呼ぶようになった。

行く当てのないヴィヴィオはとりあえず機動六課に保護される。

後々になのはとフェイトがヴィヴィオの保護責任者に。

聖王教会トップの「カリム・グラシア」との会見も主な出来事に含まれる。

カリムの持つ古代ベルカ式のレアスキル「預言者の著書」プロフェーティン・シュリフテンによると「地上本部の壊滅、そして狂気による世界修正」が行われるらしい。

前半はともかく、後半の内容はさっぱりである。

思案しようにも、材料が全く無いのでは手の打ち様がない。

とりあえず近日中にある「地上本部公開意見陳述会」に対して警戒しようという点に収まった。

またゲンヤ・ナカジマ、ギンガ・ナカジマ、マリエル・アテンザ（レジングハートやバルディッシュ、現在のシュベルトクロイツの製作者であるメカニック）ら三人の解釈により、先日の犯人達を「戦闘機人」だと確信した。

後にギンガとマリー（マリエルの愛称）、ラッド・カルタス（ギンガの上司）の三人は機動六課へ出向する。

尚、シグナムの傷は完全に癒えた。

準備は急ぎ足だが整った。

残るは回帰のみ。

世界を原作へ。原作へ。原作へ。

以後、六回目開始時点。

緑色の液体が彼の者を包み込んでいる。

時折、浮かぶ泡が彼の生きている証拠となる。

理解不能な真っ暗な空間に、彼は存在した。

『遂に完成しましたかね？ 死神さん』

薄いガラス越しの向こうから声が聞こえた。

飄々としているが、内には激情を秘めた声の主。

細く細く閉じられた瞼の裏、潜む瞳に宿るのは憎悪。

見るだけで、声を聞くだけで分かる。
この人物は怒り狂っていると。

『それじゃ、開放』

憎悪の主が指を鳴らす。

すると、彼の視線は途端に地に落ちる。

身体全身に衝撃と寒気が走る。

どうやら、今まで入っていた容器から出されたようだ。

無意識に手が動き、液体内の自分の呼吸を繋ぎとめていたマスクを無造作に千切り取る。

「また随分と乱暴で。まあ、別に良いですけど」

ふと、彼に何かが被さった。

温かく多少であるが、寒さを和らげてくれるものだ。

「流石に裸じゃ寒いでしょうからねえ」

正体は何てことはない。

ただのバスタオルだ。

それでも、着る物がない今の彼には丁度良いだろう。

「では………ハッピーバースデー！ 死神さん！」

まだ彼の思考回路が正常動作をする前に、彼の創造主はその言葉を投げかけた。

一般的には人の誕生、もしくは誕生日を祝う際に使われる言葉を。

「貴方は私によって作られた存在！ その目的はとある男を殺すだけ！」

途端にテンションが高くなった声が彼の耳から入り、脳内に響き渡る。

彼の心境は客観的に見る分には不明であり、俯いたままのため、表情すら確認出来ない。

「早速ですが獲物を渡ししょう！ 貴方の元となった人物が使っていた物ですよ！」

そう言い、憎悪の主は足元に置いていた二振りの大鎌を差し出す。紫色の枝に鋭い身。

一般人を恐怖で震え上がらせ、戦闘慣れした者には「使いづらい」と馬鹿にされた視線を向けられる武器。

鈍く光る、その存在は使い手を選ぶ物の証拠である。

彼は暫くの沈黙の後、その武器を両手に取る。

俯いたまま、鎌を目の前へと持ってきて、眺めている仕草を見せた。

その時だろうか。

彼の生まれて初めての声が聞こえた気がした。

「……………クツ……………クツクツクツクク……………」

「おや？ 気に入って頂けました？」

突如として笑い出した彼に、憎悪の主は表情を確かめようと近づ

いた。

腰を屈め、その顔を確かめようとした時。

「おっと……………」

何か嫌な音が聞こえた。

彼の創造主の視点は可笑しくなり、地面と平行となる。

身体に力が入らず、手足など言う事を聞かない。

というより、これは手足に脳からの命令が伝わっていない状態なのだろう。

ならばどういふことか。

答えは簡単。

「ククク……………アーツハツハツハツハツ！！」

彼の高笑いが木霊する。

首を落とされた存在は生前と変わらない表情で沈黙を続けるのみ。すぐさま残された死体を蹴り飛ばし、バスタオルが身から取れるのも気にせず、彼は鎌を引き摺るようにして、この暗夜の空間を歩き出した。

行く先のない狂気と餓えを抱え、行く当てのない道を進む。

「私は私の道を行います。貴方の設定した目標はつまらなそうですからね」

そう言い残し、彼は暗闇の彼方へと消えていった。

「確認は済んだか？」

残された死体の側に浮遊する神輿に乗って現れた全身黒包帯の男。しゃがれた声を出し、死体しかない空間に向かって話しかける。これが死体に向かって話しかけたのなら、当然だが死体は返事をしない。

死が死である世界ならば、当たり前前の概念だ。

「ええ。やはり残された“バグ”だけでの作成では、私たちの言う事なんか聞きませんね」

声は男性の背後から聞こえてきた。

あの飄々とした声が聞こえ、転がっている死体の生前の姿と何ら変わらない、青年がそこに立っていた。

「彼に殺されると、私達でも確実に死にますからね。人形を使っていて良かったですよ」

「何とも説明口調だな。まあ良い。奴は野放しでいいのか？」

男は自分の周りを浮遊していた大きな目の数珠の玉らしき物体を操作すると、死体を片付け始めた。

数珠が死体に近づき、怪しげな光を放つ。

すると、死体は数珠と共に浮遊し、暗闇の奥に消えていく、という便利な掃除方法だ。

「本当はマズいのですが……まあ良いでしょう。いずれは理性を得るでしょうし、その頃に共闘でも持ち掛けましょうか。何より、『我々の命令を聞かなかった』という結果が分かっただけでも良い勉強になりましたよ」

「然り。では、次の手筈を整えましょう」

死体を片付け終わった男と彼の創造主もまた、暗闇の奥へと消えていった。

第十四話「失墜」

「痛い……痛い………苦しい………苦しい………あぁ………数多くの
悲鳴が聞こえます………クククッ………クッ………ハッ………ハハハッ
………ハハハハハアアアア………！！」

抑えきれない笑い声を地上本部の地下、防壁を作り出す機械の側
で響かせる人物。

名は天海。

側には右目に眼帯をした銀髪の少女………チンクが立っている。

二人は機械が破損した影響で炎に包まれているが、そんなことは
全く気にしていない様だ。

「では！！ 宴を！！ 始めましょう！！」

今日は地上本部の公開意見陳述会。

その警備のために、前夜から高町なのは、リインフォース？、フ
ォワード陣が地上本部に来ていた。

そのお陰………という訳ではないが、その日は何事もなく終わっ
た。

問題は陳述会の日の夕方であった。

突如、地上本部全ての機能が落とされた。

同時に大量に出現するレギオン。

後々に分かる事だが、今回、現れたのは擬似ではなく、オリジナルのレギオンだ。

遠距離からの砲撃、次々と襲来する戦闘機人や列車襲撃犯たち。

奇襲を受けた地上本部は混乱に陥った。

神埼 修は機動六課に残っていた。

ヴィヴィオを守れば、「ゆりかご」が起動しないためだ。

あらかじめ覚えていた知識を全て、「予知能力」と偽って、機動六課の面々に説明したため、物語は更に大幅に狂う事になるだろう。

ああ、だが、そんなことは関係ない。

何故ならば。

「ガスは毒性ではなく麻痺性………今、データを送るです！」

リインは地上本部内にバラ卷かれ、数十名の人間を昏睡状態に陥らせたガスの効果をフォワード陣に話していた。

話を聞きながら、フォワード陣＋ヴィータ＆リインは地上本部の建物のすぐ側を走っていた。

事態を把握するためにヴィータがロングアーチとの通信を試みるが、モニターは現れない。

とはいえ、悪魔でモニターが現れないだけで、音声通信は可能で

ある。

「副隊長！ 私たちが中に入ります！ なのはさん達を助けに行かないと！」

既にバリアジャケットに着替えたフォワード陣の中で、スバルが声をあげる。

高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、シグナムの四人は建物内だ。

内部警備をするためにはデバイスは持ち込み不可となっており、シグナムを除く三人のデバイスは、今、スバルの手の中にある。

ヴィータが頷き、彼女らに指示を出そうとした瞬間であった。

『本部に向かって航空戦力……！？ ランク……不明！？』

機動六課メインモニタールームからシャーリーの驚きの声が全員の耳に入った。

「っ………分かった！ 上のはアタシとリインがやる！ お前らは地上、なのは達を任せたぞ！」

「はいっ！！」

ヴィータの掛け声と同時に、建物内に向かう四人。

と、その前に、スバルの背中にヴィータが声をかけた。

「スバルッ！………修が言ってたことが本当なら………迅速に行動

しろよ」

「ッ………はい！」

頷いたスバルは走り出す。
後にティアナ達も続く。

「リイン！ ユニゾン行くぞっ！」

「はいですっ！」

走りながらも叫んだ二人はそのままの勢いを維持し、空へと飛ぶ。

「ユニゾン・インッ！！」

二人の声が重なり、いつものジャケットの色が薄い白となったヴ
イータは普段より早く空を舞う。
目指すは空からやってくるアンノウン。

「目標合流地点は地下通路！ ロータリーホール！」

「うん！」

かなり上の階に居た時に襲撃を受けた高町なのはとフェイト・T・ハラオウン。

デバイスもなく、今の状態では戦力にならない二人は、あらかじめフォワード陣に指示しておいた合流地点に向かうことにした。

ちなみに、八神はやたとシグナム、そしてカリムは、会議室に居るようだ。

現状の説明をしているらしい。

しかし、どうやって地下まで向かうか？

簡単である。

降りれば良いのだ。

だが、どうやって？ エレベーターは使えない。

エレベーターシャフトを利用するのだ。

エレベーターの扉を、一緒に階にいた男性陣と共に開き、一階まで続いているワイヤーロープを使い、一気に下まで降りていく。

勿論、ワイヤーロープを掴んでいる手に小さい魔力の壁を作り、摩擦から起こる熱から手を守りながらだ。

「でも、なのは。もし、修君の言っていたことが本当なら……………」

「……………そんな事は絶対にさせない。私は六課に向かうよ」

「……………分かった。こっちは私とはやてに任せて」

「ありがとう。フェイトちゃん」

こうして、二人の強大な戦力は己の相棒を受け取るために降りていく。

『こちら管理局。貴女の飛行許可と個人識別票が確認出来ません』

雲の上の空を優雅に飛び、地上本部近くまでやって来た女性の耳に、その声は届いた。

「あら？ この件も何回か見たわねえ……ほんと、毎度毎度飽きないこと」

黒い長髪にチャイナドレスに似た恰好をした女性は警告を無視し、突き進む。

その右手には女性の身体を覆い隠せるほど、巨大な扇子が握られている。

『直ちに停止して下さい！ それ以上進めば、迎撃に入ります！』

その警告を最後に、女性の目下から数個の赤い魔力弾が襲い掛かる。

「乱暴ねえ。嫌いじゃないけど」

女性はあっさりと魔力弾を開いた扇子で防ぎ、一時停止する。その隙を待っていたのか、雲の下からヴィータがグラーファイゼ

ンを振り下ろそうと構えたまま、飛び出してきた。

「ギガントハンマアアアア！！」

「相変わらず可愛い子ねえ」

女性は空いている左手をヴィータの方に向け、その左手のみでグラフアイゼンによる強力な一撃を防いだ。

だが、鉄槌の騎士の名は伊達ではない。

片腕で防ぎきれ程、ヴィータは弱くないからである。

膨大な赤色の魔力が発生し、二人を包み込む。

「外したです！ 防御で防がれました！」

「ダメージは通した………続けてぶち抜く！！」

ヴィータは再び構える。

対象である女性は早くも動かなくなり、流血した左腕を眺めながら、呟いた。

「今回の身体は随分、貧弱貧弱ウ！ ね………別に構いませんけど。今回で終わりですし」

躊躇い無く、左腕を根元から巨大な扇子で切り捨てる。

切り捨てられた左腕は回転を繰り返しながら、遙か後方の地面へと、重力に逆らわず落下していく。

「なっ………！？」

いきなりの行動に、ヴィータとリインは絶句するしかなかった。

女性は軽く溜め息を吐く。

「ほら。早く名乗りなさいな。それが設定のハズよ」

切断された左腕からは血液が出ず、ただ人形のように黒い空洞が広がっているように見えた。

「ぐっ………管理局機動六課、スターズ分隊副隊長、ヴィータだ！」

気味の悪い相手だが、名乗らずに攻撃してはならない。

こちらは一応、管理局員なのだから。

そう思い、ヴィータは工作上、名乗る。

「ご丁寧にどうも。私は“レギオン”と申します。あの擬似生命体達のオリジナルとなった生物……レギオンの親玉ですわ。気軽に『レーちゃん』とでも呼んで下さいまし」

お辞儀をし、自らレギオンと名乗る女性。

他のレギオンとの区別がつかなくなるので、以後、レーと呼ぶ。

二人は向かい、お互いの武器を構える。

「…………っ！ マッハキャリバー！」

『プロテクション』

地下通路を先行していたスバルは、すぐさま側面にバリアを張り、唐突に襲ってきた敵の攻撃を防いだ。

その様子を見たティアナ達も、すぐさま戦闘態勢に入る。

今ので一瞬、怯んだスバルはすぐに移動を開始しようとするが、その前に一人の人物が邪魔をしてきた。

スバルを奇襲という蹴りの元、壁まで吹き飛ばす。

「スバルッ！ あっ……………！」

スバルに気をかけた瞬間、ティアナ達三人を無数のピンク色の魔力弾が囲んでいた。

「ノーヴェ。作業内容を忘れてないッスか？」

「うるせえよ。忘れてねえ」

ノリの軽そうな声と機嫌の悪そうな声が地下通路に響いた。

機嫌が悪そうなのは、先程、スバルを蹴り飛ばした「ノーヴェ」

「捕獲対象は三名……………内、一名は私たちとは関係ないッスからね」

「ふん……………旧式とはいえ、タイプゼロがこれくらいで潰れるかよ」

ノーヴェはつま先で地面を軽く叩きながら、立ち上がるスバルを見る。

「戦闘機人……………」

スバルの言葉にエリオとキャロが驚きの表情を浮かべる。

「ふふりん。残りは殺しちゃっても良いって、天海様が言ってたッスからね。人の身体がグチャグチャになる瞬間を見るのは気持ち良いッスからね！」

邪気の全く無い笑顔で微笑みながら語る、ノリの軽そうな女性……「ウエンディ」

「バカ。天海様は『痛めつけて、苦しませてからゆっくり殺せ』って言ってただろ。ちゃんと聞いとけよ。だからこそ、最初のガスは麻痺性だったんだろ。毒じゃあ、殺した気分にならない。というか、相変わらず悪趣味だな」

ノーヴェは視線だけをウエンディに向け、呆れたように溜め息を吐く。

対するウエンディはまだ笑っている。

「ノーヴェだって、殴り殺すの好きッスよね？」

「…………アレは快感だな」

「やっぱりい」

何と物騒な会話か。

それを美少女が行ってるんだから、尚更だ。

動けないティアナ達。

果たして、打つ手はあるのか。

『バックヤードスタッフ！ 避難、急いでください！』

同時刻。

機動六課にも危機が訪れていた。

地上本部に向かっているのとは、また別の二つの航空戦力が機動六課に向かっているのが、六課のモニターに映し出されたのだ。

すぐさまヴィヴィオや寮母の「アイナ・トライトン」と共に、避難を開始していた。

側にはザフィーラと修が付いている。

「絶対に守ってやるからな……ヴィヴィオ……！」

修は誓いを胸に、廊下を走った。

「遂に来たのかね……我輩も最後かな」

密かに修たちの後を追うピエールは誰にも聞こえない声で呟いた。

「実に容易い」

「諸君！ 私は戦争が好きだ！」

時空管理局、本局。

とある一室にはほぼ全ての上層部の人間が集められていた。彼らは中央にある机と取り囲む椅子に各自、座っている。

その目には光沢が見られない。

また、中には腹部を切り裂かれ、既に死体となっている者もいる。そんな異常な部屋の中央にある机上。

そこでは、全身黒包帯で小さな神輿で浮遊する男と全ての指先に刀身を仕込んだハイテンションな男が会話をしていた。

「再調整、再確認、共に完了……やはり、実に腐食しているな。上の者どもは」

「あゝ、神崎修が見たら「腐ってる！」とか「純粋な機動六課の面々が毒されてしまう！」とか「アンチ管理局賛成！」とか言いそうだよねぇ」

「実に愉快滑稽。金や地位に溺れ、他者を利用する。穢れ無き者など、世界には在らず。それを認めぬ者は餓鬼よ」

「クケケッ！ それは間違いでは！？ 神崎修には神崎修なりの理論がある！ それを小生らのような他者が一方的に否定する権利は無いさ！」

「……………確かに。一理あるな。汝にしては珍しい」

「まあ、別にどこでも良いけどねえ。どうせ終わる世界なんだし。コイツら死のうが生きようが。ゼロが「最後にパーツとやりましよう」って言うから付き合ってるだけだし。あ。最後は皆、死ぬか」

「メデタキな。さて、これで管理局の方は整った………とはいえ、最終局面までは元通りにしておくか」

「殺した奴はどーすんの？ 小生がノリで殺しちゃった奴ら！」

「記憶から消しておく。問題あるまい」

「さっすが！ では、小生らは帰りますか！」

長い長い会話の後、黒い包帯男は何やら奇妙に手を動かす。

誰も気付かないような弱い波長が本局を包み込む。

その後、彼ら二人は蜃気楼のように消えた。

第十五話 「郷には絶望を送ろう。きっと良く似合うハズだ」 (前書き)

今回は長いので、ご注意を。

分割すれば良かったんですが、何処で区切って良いのか分からず、とりあえずこのまま掲載。

もしアドバイス等ありましたら、感想まで、宜しく御願ひ致します。

第十五話 「郷には絶望を送ろう。きっと良く似合うハズだ」

「命、夢、希望。何処から来て、何処へ行く？ そんなものはこの俺様が破壊してやんよお！！」

半壊した機動六課隊舎。

此処では鍔付き帽子を右手に持ち、黒いスーツを身に纏う男性と白い長髪に大きな赤いリボンをした少女が立っていた。
燃え盛る炎の中で。

近くには気を失って倒れているザフィーラとシャマル。

前方には肩膝を付き、額から流血している修が居る。

「くそっ……………！ 何で……………！？ 何で発動出来ないんだよっ…

……………！！」

時間は数刻前に遡る。

機動六課を襲撃して来たのは、ゼロと見知らぬ少女であった。

二人は大量のレギオンを引き連れ、隊舎を攻撃。

防衛に出た隊員たちを次々と戦闘不能に陥れ、遂にはザフィーラとシャマルさえもその毒牙にかかったのだ。

残っているのは修一人。

しかし、修には神から授かった力がある。

そう思いながらも、油断などせず、二人に挑んだのだが……

「妄想具現化」は発動しなかった。

幾ら、修が強く思おうが、何も発動しない。

幸い、身体能力はそのままだったが、これだけでは足りない。

焦燥が身体を駆け巡る中、普段とは豹変し、凶暴になったゼロの能力、黒い手による一撃が修を襲い、壁まで吹っ飛ばす。

立ち上がろうとする修だが、少女に見つめられただけで力が抜けていく。

何故か？

そうして先程の場面に戻る。

「何で？ わかんねーのかよ！ やつべ。超ウケる！ 良いかあ！
？ コイツはなあ、前に言っていたお前専用の死神なんだよ！ この世界の死神でもあるがな！ 勝てねえのは当たり前だろおが！」

普段とは違う、荒い口調でゼロは修を見下す。

左手はポンポンと少女の頭を優しく叩いている。

「……………ゼロ。コイツ、今、殺しテも良いノ？」

まだ生まれたばかりのせいか、片言の言葉で少女は修を指差す。
それだけの行為で、修の全身の血の気が引いた。

「いや。まだだ。この次の最後で殺す。だからまだだ。まだ殺すな。

今はじっくり痛めつけるんだよお！」

ゼロは帽子を少女に預け、修に歩み寄り、右手で頭を掴み、地面に叩きつける。

狂気に満ちた表情だが、何処か嬉々とした笑みが含まれている顔で、だ。

燃える炎がゼロの顔に影を付け、視覚的に狂気を倍増させているのも、彼の狂っている様を増幅させる要因の一つだろう。

「ガッ………！」

「アーツハツハハアアハハハハアア！！　ザマアねえな！　所詮、虐められッ子なんてのはこんなもんだよ！」

謎の言葉、虐められッ子。

それは修に向けられた言葉なのか。
だが、その意味合いは何なのか。

「な、何を言って………ガア！」

疑問について尋ねただけの修の頭を何度も何度も叩きつける。

それから足で後頭部を踏み付ける。

背中を蹴る。

腹部も蹴る。

顔面も蹴る。

それを何度も何度も繰り返す。

修が全く反撃出来ないにも関わらず、ゼロの追撃という名の暴力は振るわれていく。

すぐ背後に立っている少女の視線は修に向けられているが、ジト目から放たれる視線は三流の演技を見て、呆れるソレと似ていた。

「役立たず以下だな！ 失敗作の失敗作だなあ！ おい！」

ようやく足が止まる。

ゼロはしゃがみ、修の髪を掴んで、顔を持ち上げる。

もう意識が切れ掛かりそうな修にニコニコとは違う狂った笑みを浮かべ、話し始める。

「ああ、そうそう。何で力が出ないか、だよなあ？ それも死神のせいなんだよ」

「くっ……………」

やはりそうか。

力が出ないのはあの少女のせいなのか。

苦汁を飲まされる思いを受けざるを得ない修である。

修の反応が予想通りで面白かったのか。

ゼロの感情は高まり、修の顔を何度も地面に叩きつけながら話すようになる。

「アイツの睨みはテメエの「力の源」を徐々に減らしていく。呪いの類いだあな。もうアイツが睨まなくても、テメエの力はどんどん消えていく！ ゆっくりゆっくり！ 時間をかけてなあ！ だが……その身体能力は前々から受け継がれているから関係ねえみたいだな」

何と言う攻撃。

睨まれただけで、こちらの力は消えていってしまうのか。そんな反則技、ありだろうか。

そんな馬鹿な。
そんな馬鹿な。

顔面に走る激痛さえ、今の修の脳内には響かない。
それほどまでに神経が麻痺しているのであるが、それ以上に、
ゼロの言葉の真意を理解しようとしていたからだ。

「惨めだな、おい！……んじゃ……軽く気絶でもしてなあ！」

そう言い、ゼロは修の頭を高く持ち上げる。

修の身体は自然に浮き、反撃のチャンスが出来るが、今の修には
不可能だ。

またも狂った笑いをしながら、ゼロは渾身の力で修の頭を地面に
叩き付ける。

軽くクレーターが出来たが、神の力を授かった影響か、修は死体
になることは無かった。

「ぐあ………つつ！？」

同時に、修の脳裏に様々な映像が入り乱れる。

味わったことのある感覚が脳内に入り浸り、鮮明な映像が瞼の裏
に浮かび始める。

もう嫌だ。

遂に「リリカルなのは」好きがクラスの奴ら（虐めっ子たち）にバレてしまった。

もう学校に行きたくない。

ちよつとだけ好きだったあの子にも嫌われてしまうに違いない。

もう嫌だ。

死にたい。

少し長髪の少年は自宅にある二階の自室から出て、ゆっくりと階段を降りていく。

目的地は台所。

目的は自殺。

包丁で頭を一突きだ。

彼の名前は「神崎修」

根暗で自分の意思を表に出せない子だ。

そのためか、クラスの数人から精神的、肉体的虐めを受けていた。また彼は無類の「リリカルなのは」好きであった。

親から金を出して貰い、大量のグッズ等を購入していた。

そんなある日。

遂に、彼の異常なまでのリリカルなのは好きが虐めっ子たちにバレてしまった。

これにより、只でさえ、低かった彼の評判はガタ落ち。

少しだけいた共通の趣味を持つ友人たちは「虐めに巻き込まれたくない」という理由で、自分から距離を置いてしまっている。

勝手なレッテルを貼られ、少しだけ好意を寄せていた子にも完全に嫌われてしまった

彼は絶望した。

もうこんな毎日は嫌だ、と。

故に彼は自殺を決意した。

そのために、彼は行動しようとしているのだ。

台所に到着し、包丁を探し出し、手に取る。

切っ先を額に向ける。

緊張で汗が噴出し、全身が震え始めた。

本当に死んでも良いのだろうか。

親にも先生にも勿論、相談した。

だが、結果は無駄だった。

皆は自分が生きようが死のうが知ったこっちゃないのだ。

途方もない絶望が、彼の日常を包んだ。

彼の未来を包んだ。

彼の全てを包んだ。

死に対しての戸惑いさえも、打ち消すように。

目を閉じ、覚悟を決める。

このクソみたいな日常にお別れを――――

「バカッ!! 何してんだよっ!!」

「ッ!？」

声と同時に、彼の両手首に圧力がかかる。

瞼を開けると、そこには見慣れた兄の顔があった。

怖い表情をして、自分を怒鳴りつけてきた。

そのせいか、少年は力を抜き、包丁を持ったまま、手をだらんとぶら下げる。

兄はその間に自分の両肩に手を置き、またも怒鳴りつける。

「何やってんだよっ！！ 死んだって意味ねえだろうが！」

思えば、その一言が余計だったのかもしれない。

この兄は自分と違い、成績も優秀であり、スポーツも出来る。

友達付き合いも多いし、彼女も居る。

まさに人生の勝ち組。

そんな人間が、自分に対して「死んだって意味がない」と言うのか。

そんな訳ないだろう。

死ねば、この苦しみから解放されるんだぞ？

お前が味わったことのない苦しみから。

そう思っただけで殺意が沸いてきた。

既に精神が絶望と怒りに支配された少年に常識は通用しない。

「そうかよ……じゃあ、お前が死ねよ」

「えっ………ッ！」

少年は包丁の先端を兄の顔に向けた。
躊躇いなく、顔に包丁を突き刺すまで、僅か2秒。
交わす暇もなく、兄の顔に吸いこまれるように包丁が突き刺さる。
無残にも兄は瀕死の状態で倒れこむ。

「どうだよっ！ テメエにはわかんねえんだよっ！！ 俺の苦しみが！」

己の溜まった感情を吐露する少年。
だが、少年の支配された感情は、次の兄の言葉で正常に引き戻される。

「あっ……………ああ……………あああああああああ！！！」

「ッ！！！」

それは兄の断末魔か。
力を振り絞った上での叫び。
突き立てられた包丁を抜こうと、力なき手を動かそうとするが、
無駄な足掻きに終わる。
そんな兄の行動と叫び、そして表情を見た少年の心は瞬く間に正常を取り戻す。

「あ……………え……………お、俺……………！！！」

今度はパニックと恐怖が彼を支配した。
忙しい感情である。

その場から彼は逃げ出した。

兄から逃げるために。

恐怖から逃げるために。

ともかく走り、安全区域では無くなった自室ではなく、自由と恐怖の入り混じる外へ逃げるため、裸足のまま玄関の扉を開けた。

家を飛び出し、彼は真正面の道路を走行中だったトラック撥ねられ、即死した。

「っ……………今……………のは……………？」

朦朧とする意識の中、その映像だけは、しっかりと視認出来た。何の映像なのだろうか。

その答えは、目の前にいる敵によって明かされる。

「あ？　もしかして、今の衝撃で思い出しやがったか？　あちゃあ……………ちと計画が……………が、まあ良い。なら教えてやんよ！　メモの素性をなあ！！！」

そう叫び、ゼロは再び、その右手を修の頭へと伸ばす。

平均的な身体つきのわりには、軽々と修を片手一本で持ち上げ、頭を鷲掴んでいる右手に力を込める。

「ぐ……………ああああああつあああ！！」

激痛が頭蓋骨に響き、乱れた映像が何度も脳の中を駆け巡る。

内部と外部からの痛みに耐える修の表情は、それは酷いものだった。

絶望と苦痛、狂気が入り混じる中、綺麗なビジョンは再び、脳を支配する。

「これで……………終わりだああああ！！」

光り輝く修の右手が、ゼロの心臓を打ち抜く。

なのはとヴィヴィオの魔力を受け、強化された修はまさに無敵。愛すべき、護るべき人たちの思いを託された修はまさに最強。

どんな絶望でも希望に変えてみせる。

そんな信念に突き動かされて、此処までやって来た。

もう引き返せない。

いや、引き返さない。

彼は進んでいくのだ。
仲間たちと共に、未来に向かって。

巨大な閃光が荒れ果てた大地を包み込む。

やがて、その光が晴れた後、辺り一面を静寂が支配した。

ゼロは修の攻撃により、確実に絶命している。

その証拠に、その存在は完全に消え去り、修の視覚には映っていないからだ。

「終わった……………」

安堵の息を吐く修の背後からスバルが駆け寄ってきて、抱きつく。

「やったね！ 修！」

「わわっ！ ス、スバル！ ビックリしたじゃないか！」

既にジェイル・スカリエッティやナンバーズも逮捕してある状態で、残されていた敵は「ゼロ」のみ。

そのゼロにたった今、勝利したのだ。

これで、完璧に全て終わった。

そう、終わったのだ。

「さて、これで原作編は一応、終わりかな……………ゼロが出てきたせいで、可笑しくなっちゃったけど……………これから先は俺も知らない物語が始まるわけだ」

後ろでいつまでも抱きついてるスバルを何とか引き剥がそうとしながら、空を見上げる。

さっきまで曇っていた空は、修の最後の一撃で、見事に晴れ渡り、晴天となっていた。

美しい青空が修とスバルの前に広がる。

しかし、その空の一部が崩れ始めた。

「え……………」

修は己の目を疑ってみるが、間違いない。

空という空間が崩れ始めている。

青空は落ち、真っ黒な死の世界が、その存在を露にし始めた。

「な、何だこれは……………！　ス、スバル……………っっ！」

空間が崩れ始めたことに驚愕した修は、すぐさま背後にいるスバルに向かって、首を回す。

だが、そこには誰もいなかった。

「そんな……………スバル！？　おい！　スバル！」

何度も叫ぶが返事はない。

これは可笑しいことだ。

辺りは先程の戦闘で、岩一つすら残っていない。身を隠す場所などないのだ。

にも関わらず、スバル・ナカジマは消えた。

そうしてスバルを探している間にも、どんどん世界は崩壊していく。

空は完全に崩れ、次は地面が消え始める。

「な、何なんだよ……ゼロは倒したはずだろ！？　どうなったんだよお！！」

叫ぶが効果などない。

そうして狼狽している内に、世界は完全に姿を変えた。

否、消えたというべきだろう。

勿論、世界が消えたのだから、神崎修だって死ぬ。

これは当たり前だ。

残されたのは真っ黒な空間。

そこに一つの存在があった。

ゼロと呼ばれた青年である。

先程、修に滅された彼だが、今は全くの無傷である。

「全く……貴方が生きたまま『リリカルなのはStrikers』の原作編が終わったら、世界は崩壊しちゃうでしょうが……イレギュラーな貴方の介入によって、原作から逸れた世界は無価値となるために、崩壊。そして再び原作編の『ゼロ』から生まれる……既に転生を始めた貴方には言っても意味がない台詞ですけどね」

ゼロの目の前に浮かぶ、神崎修。

いや、既に魂の抜けた抜け殻……死体であろう。

「やれやれ……『世界の抑止力』である、我々を除いて、唯一、死後の世界にも存在する死体。通称『バグ』……これを集めて、人格やら魂やら与えてみましょうかね……私の趣味全開で。コレなら、神崎修を完全に殺せるかもしれませんねえ……」

そう呟き、死体に右手をかざす。

すると、死体は光り輝き、二つの小さなクリスタルへと姿を変える。

一つは死体が変化した赤い物。

もう一つは死体に残っていた力が変化した青い物。

浮遊するクリスタルを掴み、懐に入れると、ゼロは何処かへ向かって歩き出す。

「次はどうしますか……仲間でも増やしましょうかね？ 私の好きな「戦国BASARA」シリーズから、キャラでも作って出しましょうかね？ 誰にしようかな……大谷吉継とかどうですかね！？ ああ、でもちゃんと設定とか考えないと……異世界から連れて来られた！ とかいう設定はどうでしょうかね！？」

一人でハイテンションになりながら、暗闇の奥へと足を運ぶ。
やがて、その姿は完全に消えた。

「おい。おい、起きんかい」

「ううう……………」

目が覚めると、長く白い髭を蓄えた爺さんが目の前にいた。
当然、いきなりの出来事に驚くのは人間の性だ。

「うわお!？」

「な、何じゃあ! ビックリするじゃろうがあ!」

以後、プロローグの冒頭の繰り返し。

「今のは……………」

相変わらず、ゼロに頭を掴まれたまま、修の意識は覚醒する。
今は痛みよりも、先程、浮かんだ映像についての質問が先と頭は
判断したためか、痛みはそんなに感じない。

「3回目のテメエの記憶とその後の俺の記憶だ。思い出したか?
『無意識転生無限者』よお」

「『無意識転生無限者』……………」

聞いたことのない単語を聞かされ、修の頭は混乱する。
しかし、何となく意味は分かる。
さっきの映像と組み合わせると、つまり――――

「テメエは生前、別世界の住人で、虐めに耐え切れず、自殺。その後、生前のリリカルなのは好きが影響したのか、テメエの魂は黄泉に向かわず、この世界へとやって来た」

ゼロの言葉にはあからさまな殺意と憎悪が込められていた。
頭を掴む手にも、ますます力が加わる。

それでも、修の脳は痛みを無視し、真実を知ることを優先する。

「世界の抑止力である、俺が世界に代わり、テメエを殺害。既に原作を滅茶苦茶にされた世界は一旦、崩壊し、再び構築され、再び原作編は始まった……だが」

「テメエは転生してきやがった。しかも……転生前の記憶を一切失ってなあ！！ ご都合主義とかそういうもんじゃねえ！！ テメエの記憶には『神様の手違いで殺され、この世界に転生された』とか使い古されたテンプレが刻み込まれてな！！ それから何回も何回もテメエを殺した！！ 仲間も作った！！ テメエの心も何度も殺した！！ テメエの死体、バグを集めて、『天海』も造った！！だが全て無駄だった！！ やってられるかよお！！」

「だが、だが遂に！ 俺は完成させたっ……！！ テメエを完全に殺せる存在を！！ この死神少女をなあ！！」

怒りに支配され、右手の欠陥が切れるほど、力を入れ、目が血走り、破裂するんじゃないかと思う程のゼロの憎悪。

この世全ての悪でさえ、彼の惨い所業を見れば、同情するであろう。

そんな考えさえ浮かんでくる。

「あっ……………そ、そんな……………」

己の存在の真実を知り、絶望する修。

今の彼には、頭に来る痛みよりも、告げられた真実の方が精神と心に大きなダメージを与えていた。

「……………しかし、今はまだ殺さない。もう計画もパアだが仕方ねえ。此処まで来たら引き返せねえ。最後までやってやろうじゃねえか」

そう言い、修を頭から地面に投げ捨て、機動六課の宿舎へと足を向ける。

「お、俺は……………俺は……………！」

無様に地面を這い蹲る。

絶望が心を覆い、修の精神は崩壊寸前だ。

それに加え、頭への痛みをようやく脳が確認したので、激痛が走り始めた。

惨めな修を見つめ、ゼロは一つだけ、言葉を零す。

「ただ、今回ならば一つだけ先に進む方法がある」

「あ……………ああ……………」

うめき声を上げながらも、その希望の言葉だけはしっかりと聞き取れた修。

消え入りそうになる意識をフル活動しながら、耳を傾ける。

「原作を見たテメエなら、今後の展開が分かるだろう？ 空飛ぶ船のエネルギーを糧に、テメエの妄想具現化を発動させて、世界そのものを変えろ」

「んなっ……………!？」

そんな事が可能なのだろうか？

そもそも、妄想具現化は先ほど、その死神少女によって、能力そのものを減らされている最中なのに。

「テメエの力は、この世界とは無縁の力。テメエ自身の力だ。故に、この世界に制御されることもない。それに船のエネルギーは、テメエの死後、死体に残っていた力を合わせて作ったものだ。元々はテメエの力だから使用は可能……………後はテメエ次第だ。俺らは全力で邪魔させて貰うがな」

フンツと鼻を鳴らすと、ゼロは右手を軽く前に振る。

後方では少女がコクツと頷き、トテトテとゼロの後に続く。

「ま、待て……………何で、それを……………教えた……………!？」

激痛に耐えているが、既に限界な修の言葉。

だが、ゼロは振り返ることもなく、先に行ってしまった。

「ぐうつ……………！」

そこで、ようやく修の意識は途切れた。

「幻術……………！？ 私らでも見抜けない……………！？」

地下通路で戦闘機人、二人の内、ウエンデイが驚きの声をあげる。
その理由は大量のフォワード陣が唐突に現れたからだ。

並みの幻術使いの幻術など、戦闘機人をもってすれば見破るのは
容易い。

だが、ティアナの作り上げた幻術は、戦闘機人である彼女らを持
つてしても、見破ることが出来なかったのだ。

「ちっ……………！ 幻術だろうが何だろうが！ 全員、殴り殺せば良
いんだろ！」

小細工を使う相手を腹立たしく思い、ノーヴェは四方から来るフ
ォワード陣の内、一方に狙いを絞る。

その時である。

「うおおおおお！！ でやあ！！」

背後から迫ったスバルの一撃。

流石に攻撃態勢に入っていたノーヴェにかわす余裕はなく、ガー

ドが手一杯だった。
床をバウンドし、壁に叩きつけられる。

「ノーヴェ！」

攻撃された姉に気を取られているウエンディの背後にもエリオが迫っている。

注意を逸らした際の奇襲。

まだこの攻撃を経験したことのないウエンディには十分、通用する策だ。

「サンダア…………レイジッ！！」

ストラダーの先端部分に電撃を発生させ、叩き付けるようにウエンディに攻撃する。

ノーヴェに気を取られていたウエンディも、また回避する手段を持ち合わせず、攻撃を喰らうはめとなった。

「よしっ、確保っ！」

「はい！」

二人の戦闘機人が気絶している間にキャロのバインドで捕らえる。この行動は修に教えてもらったために行ったものだ。

この二人の戦闘機人を放っておけば、ギンガが危ない。と、修に教わった。

そのため、こうして捕獲しておけば、ギンガが危機に陥る心配もないからだ。

四人は通信妨害が激しい中、何とかなのはとフェイトに連絡を取

り、此処まで来て貰うようにした。

ああ。展開が狂っていく。

物語を進めよう。

時を進めよう。

時間の長針と短針を廻せ廻せ廻せ。

「やはりやりますわね。お姉さん、ゾクゾクしちゃう」

「くそっ……………!!」

片腕だけとなりながらも、巨大な扇子を振り回すレー。

それを必死に受け止めながらも、攻撃を繰り返すヴィータ。

一進一退の攻防が繰り返られていた。

「とはいえ……………流石に傷を長時間放置するのはマズイのでえ……………
…決めますわね」

力任せに扇子を振るい、ヴィータから距離を取る。

力任せに振るった反動でクルクルと回り続けるレーにヴィータは
攻撃のチャンスだと思ったのだが、その速度は尋常ではなく、下手
に近づけば、あの巨大な扇に叩かれるために、その案を破棄する。

ようやく自分が思う距離を取った彼女は、扇子を上空へと放り投
げる。

「武器を捨てた……………」

「気をつけて下さい。何かの罠かもしれません！」

リインの警告を聞き、ヴィータは頷く。

そしてレーの周囲を確認、飛んでいった扇子にも警戒するが、今のところは特に何もして来ないようだ。

ならばと、攻撃の態勢に入るが、それよりも前にレーの言葉が飛ぶ。

「一旦、さようなら。それが今の貴方の運命だからね」

レーの黄色い瞳が青色に変わり、切り取られた左腕の傷口から青色の触手が数本、飛び出してくる。

ヴィータが驚く間も無く、触手はグラーフアイゼンへと絡み付く。

「うわっ!？」

そのまま触手はグラーフアイゼンを半壊させ、ヴィータに少なからず精神的ダメージをも負わす。

その後、標的を失った触手は次にヴィータ本体に飛び掛る。

「アイゼンッ!？」

避ける間も無く、触手はヴィータを地面目掛けて投げ付ける。

その間、時間にして3秒ほど。

回避する暇もなし。

「ぐあっ……………くそっ……………このやろ……………!」

近辺にあったビルの屋上に叩き付けられたヴィータ。

守護騎士の名は伊達ではなく、目立った外傷こそ無い。

しかし、同時にユニゾンが解かれ、リインフォース？が負傷したことを知らせる。

「リイン！？　おい！　リイン！」

ヴィータの叫び声も虚しく、リインは気を失ったままだ。

そんな遙か後方の二人を眺めながら、レーは微笑する。

落ちてきた扇子を右手で受け取りながら。

「やっぱり可愛い子は虐めがいがあるわねえ……さて、レギオンちゃん達。こちらに集合。一旦、退いて、傷の手当てが済み次第、地上本部を襲撃するわよ」

彼らの女王の号令にレギオンは一斉に頷き、行動を開始する。

高町なのはとフェイト・T・ハラOWNがデバイスを受け取った。二人を追ってきた聖堂教会の「シャツハ・ヌエラ」により、八神はやてのデバイスがはやてに渡る。

高町なのはが機動六課へと戻る。

スバル+ティアナはまだ連絡が取れているギンガの元へと急ぐ。ライトニング分隊は捕獲した戦闘機人を取りあえず外に連れて行くことに。

「また貴方……………!!」

地上本部近く。

ライトニング分隊は地下から地上へと出ていた。

確保した戦闘機人を逃げられないようにするためなのだが、今の地上本部に安全地帯は無い。

故に、とりあえず外に連れ出すしかなかったのだ。

何故、外なのかは分からない。

外に出て、六課と連絡を取ろうと思った時であった。

フェイトは鋭い殺気を感じ、背後からの一撃をバルディッシュで受け止めた。

奇襲して来たのは、あの無言の男だ。

力押しで男と距離を取り、エリオとキャロ、確保した戦闘機人から距離を取る。

エリオとキャロは、余りに速い闘いのため、見守ることしか出来なかった。

「……………」

二刀を器用にクルクルと回し、構える。

その殺気は相変わらず鋭く、一瞬の油断が死を招く。

「……………バルディッシュ。サードフォーム!」

『サー』

バルディッシュは姿を変え、巨大な大剣となる。
刀身は黄色い魔力で生成されている。

「……………」

向かい合う二人。

次の瞬間には、打ち合っていた。

凄まじい速度での打ち合いは、火花しか見えないほど。

純粋な思いと単純な実力。

再びぶつかり合い、遂に決着をつける時が来た。

「……………ノーヴェとウェンディが捕らえられていますが……………」

「あの馬鹿共めが……………！ 仕方ない。天海様のご命令だ。身内の救助を最優先にしろ、とな」

フェイトと無言の男の戦闘が繰り広げられる場所の上空。

二人の女性がエリオとキャロを眺めていた。

一人は先日、クアットロとディエチを助けたトーレ。

もう一人は二本の特殊なブレードを持った女性、セツテである。

二人は先程まで、地上本部の救援に駆けつけた管理局地上本局航空魔導師隊を殲滅したばかりであった。

殲滅模様は壮絶であり、生存者は一人たりとも居ない。

皆、死んだ。

「お嬢が風魔と闘っている間に、ノーヴェとウェンディを救出。あの二人は翳って殺す……………」と言いたいが、時間が無いだろう。救出

だけとする」

「了解」

淡々と会話をし、二人はフェイトがもっと二人から距離を取るまで待つ。

エリオとキャロは闘いに集中しており、トーレ達には全く気付いていなかった。

「スバル！ 先行し過ぎ！」

「ゴメン！ でも、大丈夫だから！」

スバルとティアナの二人は、ギンガの下へと走っていた。
スバルが急いでいる理由は何か？

ギンガからの連絡が唐突に途切れたからだ。

なのは達と合流した時までは連絡が取れており、戦闘機人の一人と戦闘中だったらしい。

それがいきなり途絶えたのだ。

スバルは不安に支配され、その足を急ぐことになる。

（ギン姉……ギン姉……ギン姉……！！！）

急ぐスバルはようやくギンガが戦闘していたであろう広い場所に

出た。

周りにはあちこち壊れており、戦闘の壮絶さを語っている。

「あっ……………！」

だが、それよりもスバルの注目を引くものがあつた。
前方、スバルの前方だ。

「……………おやおや？　　ようやく来ましたか。待ちくたびれましたよ」

ザシュ。

スバルが来た事を嬉しそうに喜びながら、天海は、流血しながら
気絶しているギンガの右足を斬り飛ばした。

「……………え？」

スバルの目の前に落ちてくるギンガの右足。
剥き出しとなった機械の部分が微弱な電撃を放つ。

「さて、チンクさん。ギンガさんを丁重にお運びして下さい。とはいえ、邪魔なら両手左足、切断しても構いませんがねえ」

話を振られたチンクは頷く。

その身体には多少の傷が付いている。

どうやらギンガにやられたものらしい。

チンクは己の両手にIS「ランブルデトネイター」を使い、ギンガの両手左足部分の付け根を小規模爆発で吹き飛ばす。

「うっ……うあああああああ……！！！！」

凄まじい光景を目の当たりに、スバルは怒った。
予定通り。

スバルは暴走した。
瞳の色を金色にし、青いオーラを暴発させる。
その姿は神か悪魔か。
消滅するのは天海かスバルか。
そんな言葉が浮かぶ。

「返せ……ギン姉を……返せえええええ！！！！」

無鉄砲に突っ込むだけのスバル。
だが、怒りに支配された一撃は絶大な破壊力を生む。

「クッ……アハハハハハッ！ 良いですねえ！ その顔です！
その顔ですよ！ 私が見たかったのは！！」

壁さえも軽く破壊するスバルの拳を、天海は一本の鎌で受け止める。

凄まじい火花が飛び散るが、両者は一步も退かない。
その間にもチンクは持ってきたケースに達磨になったギンガを押し込む。

「どけえええええええ！」

「嫌です！ もっともっと愉しみましょう！ この殺し合いを！！」

拳の連打と鎌の乱舞が何度も何度も衝突する。

ぶつかる度に、両者の距離は少し離れるが、すぐにまたお互いに距離を詰める。

そして一撃を繰り出す。

お互いに当たれば即死の一撃を。

「邪魔……すんなあああああ！！！」

此処で予定が狂った。

ループを繰り返した結果か。

ズレや誤差は起こり得る。

思っていたよりも素早いスバルは、愉悦に浸っていた天海の懷に入り込み、その腹部に容赦なく拳を打ち出す。

「ゴフツ……！」

特殊なマスクの隙間から吐血が流れ、天海は後方の壁まで吹き飛ばされる。

同時に中規模のクレーターが天海を中心に作られる。

「て、天海様っ！？」

そこで初めてチンクが言葉を出した。

ギンガを詰め込んだケースを投げ出し、天海の元まで走り寄ろうとしたが、それを止めさせたのは天海本人である。

「大丈夫ですよ……クククッ……内臓の殆どをやられましたねえ……こうでなくては……」

気味の悪い生物のようにユラユラと立ち上がる天海だが、先程の一撃で外傷も多い。

既に瀕死状態なのが一目で分かる。
それほどまでに、今のスバルは強いのだ。

「貴様……!!」

チンクが怒りの表情を露にし、スバルに投擲用ナイフ「ステインガー」を投げ付けようと構える。

が、その行動も天海によって遮られる。

「止めなさい、チンクさん。貴方はギンガさんを運ぶのが目的のハズです。私の命令に背くのですか？」

その一言は敬語ではあったが、その場にいた全員の背筋を凍らせる威力を持っていた。

暴走状態のスバルでさえ、一瞬、正気を取り戻しそうになる程。

「くっ……分かりました。すぐに応援を向かわせますので、それまで耐えてください」

チンクは一礼し、ケースを持って、逃走を始める。

天海の言葉に気を取られていたスバルだったが、すぐにギンガを取り戻すために動き出す。

だが、その前に怪我人とは思えない速度で天海がスバルの邪魔をする。

「ツ！」

「さあ………愉快的殺し合いの続きですよ！」

此処で初めて、スバルは天海という人間に恐怖を覚えた。

この怒りが収まりそうなほどの恐怖を。

純粹だったスバルにこれ以上ないくらいの狂気で恐怖を覚えこませた天海。

彼こそ生粋の狂人だろう。

しかし、スバルとて退く訳にはいかない。

急がないと姉が攫われてしまう。

それだけはダメだ。

それだけはさせてはならない。

スバルに立ち止まることは許されない。

「どっ……けえええええ！！」

「憎しみもまた格別……！　もつともつと！　私を憎んでください！！　そしてこの身体を殴り殺して下さいよ！！」

拳と鎌が再びぶつかり合う。

その度に天海は吐血、スバルは限界を超えているせいか、皮膚が焼け落ち、内部の機械が剥き出しになっていく。

それでも二人は止めようとしない。

天海にとっては永遠に繰り返したい楽しい時間。

スバルにとっては焦燥と恐怖が入り混じる混乱の時間が数刻、繰り返された。

そんな打ち合いを何度もやっている内に、二人の距離がようやく離れた。

天海は動かなくなった両手をぶら下げながら、高笑う。
スバルは肩で息をしながら、天海を睨む。
この状況では、スバルが有利である。

天海の両手はもう動かない。

一撃与えれば、勝利だ。

そう確信し、スバルが動き出そうとした瞬間である。

「セインさん、到着！」

天海の後方の床からセインが飛び出てきた。

セインはそのまま抱き込むように天海に覆い被さる。

「おや……もう終わりですか。ああ………つまらない………」

「そんな身体で何、言ってるんですか！ 天海様！」

残念そうに呟く天海と共に床に潜っていくセイン。

残されたのはスバルのみ。

既にチンクは居ない。

あの後、セインに連絡を取り、天海の救援を頼んだらしい。

「あ……ああ………うあああああ！！！」

一人になったスバルの絶叫が木霊した。

近くにあるのはギンガの四肢のみ。

第十六話「墮刻」

「悪いね。これが我輩の選んだ道でね」

燃え盛る機動六課の廊下。

エセ紳士、機動六課の捕虜ことピエール・モガツミーは六課に取られていた愛刀を混乱に乗じて勝手に持ち出し、敵に切っ先を向けていた。

その敵とは……………

「あ？ バカか？ テメエ」

態度が豹変しているゼロである。

側には無表情の少女が付いて来ている。

「我輩は高貴な狐……………何。この機動六課を守りたくなってね」

悪魔で戦闘態勢を崩さないまま、余裕めいた微笑をするピエール。しかし、額には汗を掻いている。

周りで燃え盛る炎のせいではない。

冷や汗の類いのものだ。

「ケッ。テメエの目的はクソ六課の内部崩壊の誘発だろーが。何、情に溺れてんだ？ アア？」

ゼロの完全に見下した目がピエールを見ている。

言葉には怒気が籠り、右足は小刻みに揺れている。

「今回で終焉なのは知っているよ」

「分かってんのかよ。そう。コイツが神崎修を殺して全て仕舞いよ」

怒気を収めつつ、ポンポンと少女の頭を優しく叩く。

その時、初めて少女は戸惑うような表情を浮かべた。

少女に生まれた「嬉しいがどうしたら良いか分からない」といった感情だ。

「我輩の行動が無意味なものも承知の上。一種の自己満足だからね」

「なら逆らうなや。と言いたいが……最初からテメエの役割、今回は無かったんだわ。丁度良い」

下卑た笑い声を響かせ、右手を軽く振るう。

すると、ピエールの足元から黒い手が出現し、襲い掛かる。

「甘いね！」

ピエールはそれを予見していたように、刀を振り上げ、黒い手を両断する。

まるで悲鳴のような音を上げ、黒い手は消滅していく。

「やはりね。こう見えても我輩は洞察力に優れていてね。君が今回の我輩に何も期待してなかったのは知っていたよ」

華麗にステップを踏みながら、ピエールはゼロに斬りかかる。対するゼロは黒い手を数本、出し、防御に入る。

「知って従っていたのかよ。マジ怖いな。お前」

襲い来る黒い手を次々と一刀両断していくピエール。

その度に、ゼロは黒い手を出していく。

まるでイタチゴッコ。

「流石、4回前に機動六課を内部崩壊させたことだけはあるわ」

「今となっては忌まわしい記憶だがね」

消えていく黒い手。

出現する黒い手。

襲う黒い手。

殺されていく黒い手。

「…………ふん。テメエの記憶なんざ殆どは改竄して出来たもんだがな…………まあ良い。それじゃ、そろそろ終わりにしようじゃねえか」

一瞬の隙を付き、数本の黒い手がピエールを掴み、天井近くまで持っていく。

「ぐむっ……………！」

身体中に黒い手の爪に当たる部分が食い込み、神経から痛みを奪っていく。

このままでは確実に死んでしまう。

それでも、ピエールの目に宿った決意は消えることはない。

居心地の良い、この場所と人たちを、せめて守りたいと思う気持ち、消えない。

「では……最後に一花、咲かせようじゃないか！」

ピエールの目がキラリと輝き、右手に持っていた愛刀を掲げる。ゼロの側に立っている少女はその様子は実につまらなそうに見ていた。

「我輩の生き様に……酔いしれたまえ!!」

次の瞬間には、ピエールは高速回転を始め、自分を掴んでいた全ての黒い手を消滅させていた。

それどころか、回転の勢いが衰えないまま、ゼロと少女に向かって突っ込んでいく。

愛刀を持ちながらの回転により、殺傷能力は非常に高い。

「ウゼエな。殺れ」

ゼロの命令に、少女はコクンと頷き、右手の平を突き出す。

たったそれだけの動作にも関わらず、ピエールの右上半身が吹き飛んだ。

まるで抉り取られたように。

「なあ………!?!」

驚愕した影響で、まるで時の流れがスローになったように感じているピエールは、ゼロの狂気に満ちた目よりも、少女の何も見出せない表情に恐怖を抱いた。

休ませる暇もないまま、次々と身体を吹き飛ばされるピエール。最後には頭だけが残り、二人の足元に転がった。

「きたねえ花火だ。汚物は消毒ってな」

既に絶命したピエールの頭を拾い上げ、壁に投げ付ける。

壁にぶつかった瞬間に、少女が頭を壁ごと吹き飛ばし、消滅させる。

「ご苦労。これで完全に障害は消えた訳だ。鍵を手に入れて帰るかね」

「……………分かった」

少女はゼロに手を差し伸べる。

その手を嫌がる素振りもなく、自然に握り、二人は廊下を進んでいく。

目標のヴィヴィオまで、あと少し。

「ッ！」

目の前で無口な男は姿を消した。

次の瞬間には、無数の手裏剣が弧を描いて旋回していた。

その渦の中心にいたフェイトの身体には幾多の切り傷が刻まれていく。

「…………ハアッ!!」

その風による攻撃を、フェイトはバルディッシュを大きく横に振るうことで、吹き飛ばす。

厄介なそよ風を強風によって吹き飛ばしたのだ。

「……………」

手裏剣の渦が消えると同時に、男はフェイトの上空に姿を現す。

男は既に次の手を考えていたようであり、今度は巨大な手裏剣を回転を加えながら繰り出す。

目的は勿論、フェイト・T・ハラOWNである。

「ぐう…………っ!」

回避行動が間に合わず、巨大手裏剣をバルディッシュで受け止める。

強烈な火花が飛び散り、暗闇に包まれつつあった周囲を明るく照らす。

やがて巨大手裏剣は回転する力を失い、地面に落ちる。

魔法によって生成された刃に物理的手裏剣が勝てる道理は無い。

手裏剣はそのまま闇に溶けるように消失。

フェイトの視線が消え行く手裏剣に向けられている間、既に無口な男はフェイトの背後に回っていた。

「フェイトさんっ!」

「ッ!?!」

後方から聞こえてきたキャロの叫び声に、フェイトが気づき、振り返った時には、男は何やら手で結んでいた印を終えていた後であった。

男の手の前に『風』という文字が浮かび上がった後、二本の短刀と体術を器用に使った連続攻撃を繰り返してくる。

またもフェイトはバルディッシュを使っての防御に徹するのであった。

「……………」

バルディッシュの側面に強力な連続攻撃を与える男。

やがて攻撃は、先程の無数の手裏剣の渦の攻撃に移る。

その攻撃に入る一瞬の隙を突いて、フェイトは後方へと距離を取る。

だが、その動きさえも読んでいたように、男は姿を現す。

その手には先程の巨大手裏剣が握られている。

ただ、今回は二つであったが。

「二つ……………！」

フェイトの目がカッと開かれ、回避に全力を注ぐために行動を開始する。

男はフェイトを仕留めるために、すぐさま手裏剣を投げ付ける。

綺麗な回転を生みながら、二つの巨大手裏剣はフェイトを追う。

回避のために空に逃げたフェイトであったが、手裏剣はまるで生き物のように彼女を追跡する。

「ッ…………ハアアアア！」

電光石火の如き高速移動。
華麗に空を飛ぶフェイトには、流石の手裏剣も追跡を諦めた。
やがて空を飛び続けていた手裏剣は、その姿を黒煙に変える。

「……………」

それを腕組をしながら眺めていた男は腕組を解き、フェイトに向かって右手を突き出す。

そのまま人差し指と中指を2、3回折り曲げ、「こちらに降りて来い」という意思を見せた。

「……………遂に決着を……………付けるんだね」

その意思は伝わったようである。

集中した目付きのまま、フェイトは男の前方に降り立ち、バルデイッシュを「ハーケン・フォーム」に変化させる。

対する男は背中の特殊な鞘に仕舞いこんでいた二つの短刀を両手に其々持つ。

そして、フェイトと同じく構える。

「……………」

「……………」

二人の間に風が流れる。

静寂が支配する空間で、向かい合う二人。
あるのは殺気と純粹な思い。

皆を守るという信念。
完璧なる殺しの技術。

最初に出遭った列車の上からお預けになっていた勝負。
それが、今、終わる。

「…………ハアッ!!」

「……………」

フェイトの掛け声の後、二人の姿が一瞬だけ交わる。

次の瞬間には、二人の場所は入れ替わっていた。

フェイトは相棒を、男は短剣を振るい終わった態勢で、動かない。
またも風が二人の間を通り抜ける。

「……………」

そうして、男の身体は前のめりに倒れこむ。
地面に倒れこんだ瞬間、男の身体は黒煙となって完全に消えた。

「…………あっ…………かはっ……………！」

直後、フェイトの左肩が切り裂かれ、大量の血が吹き出る。
バルディッシュを落とし、空いた右手で傷跡を抑えながら、片膝を付くフェイト。

「最後まで…………喋らなかった……………」

痛む傷を抑えつつも振り返り、男が存在していた場所を眺める。
そこには小さな竜巻が渦巻いていたが、すぐに消滅する。

「風……………」

あの男もまた、敗北した故に消滅したのだろうか。
そう思ったフェイトであったが、すぐに事態は動き出す。

「があっ！！！」

「きゃあっ！！！」

聞こえてきたのは自分が保護した小さいが勇敢な二人の子どもの声。

「エリオツ！？ キャロツ！？」

ああ。物語は進んでいく。
もっともっと針を廻せ廻せ廻せ。
間も無く終幕になるぞ。
間も無く終焉だ。
ああ。実に待ち遠しい。

「風魔も存外、役に立たなかったな。こんなに早く死ぬとは」

「所詮は人。我々に劣ります」

二人の戦闘機人は、共にエリオ、キャロを吹き飛ばし、脇にノーヴェとウエンディを抱えながら、そう呟いた。

その内、トーレは自分が抱えていたノーヴェをセツテに投げて渡し、すぐに動き出しそうなフェイトを前方にあった木々の方角に殴り飛ばす。

「かはっ……………!!」

いきなりの奇襲。

風魔によって負傷していたフェイトに、トーレのIS「ライドインパルス」を回避する体力は残されていなかった。

「すみません。お嬢。今は眠っていて貰います」

強烈なトーレの拳は、フェイトの意識を一瞬で奪っていた。

「フェ、フェイトさん……………!!」

先程の一撃で、既に意識を失っているエリオと違い、キャロは苦痛に顔を歪ませながらも、意識を保っていた。

その小さく哀れな声は戦闘機人たちの耳にも入ったが、それより重要な情報が彼女らの脳内に響き渡った。

『こちらチンクだ。天海様が負傷した。重傷につき、すぐさま撤退する』

「!？」

その通信による驚きは、ナンバーズ全員のものではあった。

中には怒りを露にする者、天海の安否を心配する者、目を覚ます者などが居た。

「くそっ………!　すぐに天海様の元に向かう!」

「はい!」

機械に非常に近い感情を持っていたセツテでさえ、焦燥を露にし、トーレと共に天海の元に飛ぶ。

「フェイトさん………エリオ………くん………!」

まだ攻撃の余韻が残っているため、意識が朦朧としているキャロ

であったが、そんな状態の彼女でもハッキリと分かった事があった。

「あれ……は………！」

空を黒く覆いつくす程のレギオンの群れ。

見る者、全てを絶望に叩き落す軍勢。

狂気を優雅に纏い、その先陣に立つのはレィ。

左腕は既に再生を果たしており、彼女にすっかり馴染んでいた。

そんな光景がキャロに絶望を与えた。

「やだ………！」

目の前に倒れている愛しき家族。

「そんなの………！」

このままレギオンが襲来すれば、彼女らも、キャロも、仲間も全て、死に絶える。

直感がそう告げていた。

「だめ………これ以上………壊さないで………！」

キャロの正面に巨大な魔方陣が浮かび上がる。

放出されていく膨大な魔力と殺気。

「……………ヴォルテールッ………！」

召喚者は叫んだ。
己が使役する最強の竜の名を。

「さて、このまま全軍突撃してっ……あら？」

大量の我が子^{レギオン}を指揮していたレーは、下方から感じる強大な魔力を感じ取っていた。

「あらあら？ 竜使いは機動六課に向かったはずでは……？
さか、今までのパターンと違う……？」

過去に行われた戦闘と全く違う今回。
故に、彼女もまた違う行動を取った。
それが裏目に出たと、この時、彼女は悟った。

「やばっ………！ 全員！ すぐさま退避しっ………！！」

既に遅い。

姿を現した巨大な竜、ヴォルテールは咆哮と同時に翼を広げ、「
大地の咆哮^{ギョ・エルガ}」を放つ。

周囲の魔力を集め、放った一撃はオリジナルであるレギオンの軍勢を軽く消滅させていく。

「ちょ………！ まっ………！！」

すぐに巨大な扇子を広げて、防御に移ったレーであるが、そんなもので大地の咆哮を完全に防げる訳はない。

彼女もまた、大量のレギオンと共に炎の渦に飲まれた。

「ピーピー泣くなや。ぶっ殺すぞ」

泣き喚くヴィヴィオの襟を片手で掴み、上下に揺らすゼロ。

場所は機動六課付近。

夜空が美しく見えている。

後方の機動六課隊舎は炎に包まれ、時間の経過と共に崩落していく。

ヴィヴィオを死守しようとしていたヴァイスやら他の局員を殴る、蹴るの暴行で黙らせた後、ゼロはヴィヴィオを回収。

早々に六課を後にしようと外に出ていた。

隣では少女が眠そうに目を擦っている。

「あー………ったく。これだからガキの面倒は嫌いなんだよ………ぶっちゃけ、殺しても良いけどよ。それじゃあつまんねえしなあ………ギョーブ。早く戻って来いよ」

初めて聞く名前を口にしながら、ゼロはウザったそうにヴィヴィオを空いている左手で殴る。

更に泣き出すヴィヴィオ。

それでも眠そうな少女。

そこへ一人の少女がゼロの前に降り立った。

白く美しくも怒気を孕んだ視線を持った少女。

管理局のエース・オブ・エース。

高町なのはである。

「お？ ほれ。母親の登場だ。泣き止めや」

まるで飽きた玩具を捨てるようにヴィヴィオを地面に放り投げるゼロに、なのはの怒りは更に高まる。

「ッ………ヴィヴィオを離して」

破裂しそうな怒りを抑え、なのはは静かに喋り出す。
それは嵐の前の静けさに似ている。

「離れたじゃねえかよ。テメエの眼球は腐ってんのか？ ヒヤハハ」

そんな静けさなど知ったことかと、ゼロは小馬鹿にして笑う。

呆けた表情で光景を眺めていた少女もプツと噴出す。

「………分かった」

「ああ？」

泣き喚くヴィヴィオの声がうるさい中で、なのはの声だけはやかに透き通る。

そして俯き、呟く。

「少し、頭冷やそうか」

次の瞬間には、ゼロと少女は地面に叩きつけられていた。
痛みを感じる間すら無い。

バインドで身動きを取れなくされる二人。
その間に、なのははヴィヴィオを抱きかかえ、空に舞っていた。
完全にゼロの慢心が招いた結果である。

「ヴィヴィオ。痛かったよね？ でも、もう大丈夫だからね……………」
「！」

「ママ……………」

ようやく恐怖から開放されたためか、ヴィヴィオは泣き止むところか、更に激しく泣き始めてしまった。

そんな我が子にも似た子をしっかりと抱きしめながら、なのはは
安全な場所へと向かう。

「さて……………楽に逃げられると思いなさんな」

そんな時である。

しゃがれた声がなのはとヴィヴィオの耳に入ってきた。

気付いた時には、ヴィヴィオの姿が蜃気楼となって消えていく。

「ヴィヴィオッ!!」

「ママあ!!」

感動の親子の再会は一人の男の手によって、あっさりと終末を迎えてしまったのだ。

なのはの胸の中で、ヴィヴィオは消えてしまった。
これは酷い。

「キヒヒッ。主に不幸を味合わせてやったわ」

黒い包帯を全身に巻き、小さな神輿に乗り、浮遊する男性である
うその声だけが聞こえる。

姿は見えない。

すぐに敵を探すのはだが、やはり何処にも居ない。

「次で終幕よ。実にメデタイ」

嬉々とした声が辺りに響き、気配は完全に消え去った。

気付けば、地面に倒れていたハズのゼロと少女も消えている。

「ヴィヴィオ……ヴィヴィオー……!」

スバルとは違う場所で、高町なのはが絶叫した。
声は全て夜空に吸い込まれた。

「諸君 小生は狂気が好きだ

諸君 小生は狂気が好きだ

諸君 小生は狂気が大好きだ

破壊が好きだ

イカれる事が好きだ

死が好きだ

終幕が好きだ

終末が好きだ

終焉が好きだ

狂喜が好きだ

破滅が好きだ

笑いが好きだ

漫画で アニメで

虐めで 虐められツ子で

美形で 美化で

最強で 妄想で

悪夢で 輪廻で

この地上で行われるありとあらゆる狂気が大好きだ

列をならべた蟲の一斉攻撃が奇声と共に魔道師たちを喰い尽すの
が好きだ

空中高く放り上げられた魔道師が蟲たちの一撃でばらばらになっ

た時など心がおどる

狂人の操る数珠の一個一個がデバイスを撃破するのが好きだ

悲鳴を上げて燃えさかるデバイスを持ったまま撃って出てくる魔道師を気でなぎ倒した時など胸がすくような気持ちだった

ショットガンの先端を魔道師達にそろえた狂人の一発が魔道隊の戦列を蹂躪するのが好きだ

怒りに支配された状態の狂人が既に息絶えた魔道師を何度も何度も踏み付けている様など感動すら覚える

敗北主義の逃亡魔道師達を街灯上に吊るし上げ、蹴る様などはもうたまらない

泣き叫ぶ捕虜達が小生の振り下ろした手の平とともに一瞬で風の悪魔に首を斬られ、ばたばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな低脳達が雑多な武器で健気にも立ち上がってきたのを黒い手で木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

管理局の局員たちに滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に壊すはずだった世界が守られ、人民どもが平和に暮らしている様はととても悲しいものだ

レギオンの物量で押し潰して殲滅するのが好きだ

彼女に追いまわされ害虫の様に地べたを這い回る局員を眺めるのは愉悅の極みだ

諸君 小生は狂気を地獄すら生温い狂気を望んでいる

諸君 小生が付き従うイカれた集団諸君。

君達は一体何を望んでいる？

更なる狂気を望むか？

情け容赦のない糞の様な狂気を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし三千世界の魔法を殺す嵐の様な闘争を望むか？

『もう返事する者も僅かよ』

よろしい ならば最終全面戦争だ

小生らは渾身の力をこめて今まさに振り降ろさんとする握り拳だ
だがこの鬱陶しい輪廻の中で延々に堪え続けてきた小生らにただ
の狂気ではもはや足りない!!

大狂気を!!

一心不乱の大狂気を!!

小生らはわずかに数人ちよい 20人に満たない

だが諸君は一騎当千の狂人だと小生は信仰している

ならば小生らは総力未知数の軍集団となる

小生らを悪と決め付け、闘っている哀れな屑ども連中を皆、殺そ
う

髪の毛をつかんで引きずり回し眼を開けさせ思い知らせてやろう
君らに狂気というものを思い知らせてやる

君らに小生らのイカれ具合を思い知らせてやる

世界と輪廻のはざまには君らの哲学では思いもよらない事がある
ことを思い知らせてやる

数人の狂人と十数人の数の子の戦闘団で

世界を元に戻してやる

最終全面戦争を開幕する」

地上本部、ミッドチルダ全域に大小様々なモニターが出現。

その中では赤い瞳をした、やたらハイテンションな狂人が演説を
していた。

「…………どう!? 中々、様になってたっしょ!? それはさてお
き、今回のデモンストレーション! はお気に召したかな? かな
? え? 最悪だった? それは良かった! どうせ皆死ぬからね
! それはともかくだよ! これはデモンストレーションかつ宣戦
布告! 小生らから君ら、管理局の雌豚どもお! に対してのね!
キツヒヒ! まあ、次で最終戦争でも開幕しようという魂胆な訳

だよ！　と言う訳で！　各自、ゆつくりと羽を休ませて、闘えるようにしておいてね！　ゆつくりしていつてね！」

とても面倒な台詞を吐いた後、モニターは強制的に切れる。こうしてフザけた宣戦布告は終わったのである。

後にスバルはティアナと合流、ティアナによって気絶していたスバルを回収。

八神はやととカリムによって負傷したフェイト、エリオ、キャラを回収。

ヴォルテールはキャラが気絶すると同時に召喚陣の中へと戻った。シグナムも傷ついたヴィータとリインを回収。

高町なのはにより、修や他の機動六課メンバーの安否が確認され、残されていた監視カメラの映像からピエールが消滅したことを確認した。

機動六課、地上本部、共に大打撃を受けた日であった。

第十七話 「閑話休題参 ―決意、終焉、狂氣―」

「修君？ お見舞いに来たよー」

病室のドアをノックし、八神はやてが顔を出し、中を覗く。

そこにはまるで光沢を失ったような瞳を持った修が、溜め息を吐きながら、ベッドの上で横たわっていた。

はやては足を運び、ベッドの側までやって来る。

「あ……………はやて……………」

「あー……………うん。中身はともかく、見た目は……………まあ、大丈夫そうやね」

暗い雰囲気が続々と巡る病室の中、はやては何とか、修を励ますと、話題を作っていく。

とはいえ、まずは修がやられた原因を探るのが第一だ。

世間話はその後でも遅くは無い。

「それじゃ……………修君。正直言って、君はかなり強い。その能力を持って、君に勝てる人間なんておらんやろ」

修ははやての言葉に耳を立て、よく聞くために上半身を起こす。額や顔に包帯を巻き、自身を失った瞳は、彼によく似合う。

「そんな修君が簡単に負けるわけあらへん。だから……………その辛いと思うけど……………敗北理由を教えて欲しいんや」

語尾が弱くなるかと思ったが、そんなことは別段、無かった。

はやての口調は友人のソレから、部隊長のソレへと変わっており、今の修との関係は上司と部下なのである。

上司として、部下の怪我の理由は知っておきたい。

「……………分かった……………」

見ているコッチが暗くなる雰囲気醸し出しながら、修はゼロの本性や、あの死神少女との戦闘を語った。

話している間の修の表情は時折、悔しさと情けなさで一杯になり、己の存在を卑下するような発言も多々見られた。

そうして説明が終わる。

「……………ゴメン……………俺、何も出来なかった」

弱弱しく吐き出された謝罪の言葉は八神はやてへの物か。

否、己の弱さをただ、慰めて欲しいだけである。

それは醜い人間関係を幾度となく眺めてきた、八神はやてだからこそ、看破出来たのだろう。

「……………修君。確かに君は負けた。それは事実や」

「っ……………」

現実を突き付ける。

これは厳しいことだが、そうしなければ人間は成長しない。

逃走という手段は、人間に一時的な安全しか与えない。

それでは人間は成長しないのだ。

そう。だからこそ、今、此処で、現実、辛い現実に目を向けさ

せる。

「君はこれからどうする？　このまま逃げるんか？」

「そ、それは……………」

八神はやては強い女性だ。

まだ幼い身でありながら、時空管理局の闇を見てきた。

それは醜く、おぞましくも、現実であることを教えてくれた。

だからこそ、八神はやては、此処で容易に優しい言葉などはかけない。

彼女は本当に神崎修のことを思っているがために、辛い選択を取ったのだ。

これは、真の仲間にしかな出来ない所業ともいえるだろう。

「私に決定権はない。決めるのは修君や。でもな、これだけは覚えとしてや。君の周りには仲間がいる。君に頼る仲間。君が頼るべき仲間。信頼し合う仲間が。何も、全部一人で背負うことはないよ」

「……………はやて……………」

それでも、八神はやては優し過ぎるのだ。

冷酷に突き放し、彼自身が成長することを望む。

それも結構。

一種の愛情表現とも取れる。

だがしかし、八神はやてはそこまで冷酷ではない。

彼女の中の純粋な優しさは、修を完全に突き放すことは出来ない。

故に、手を差し伸べた。

仲間という存在を示し、たまには頼るのも悪くないじゃないかと。

若くして、この思考。

八神はやてという人間の精神は、ほぼ出来上がっているのかもしれない。

まだ甘さは残っているが。

「はやて……はやてえ………！」

はやての厳しくも優しさに満ちた言葉に、とうとう修の涙腺は崩壊し、人前だというのに泣き始めてしまう。

そんな修を優しく抱きしめるはやて。

それは年上のお姉さんが泣いている幼子をあやすのに、似ている。既に今の彼女は上司の八神はやてではなく、純粋な友人としての八神はやてになっていた。

「今は泣いてええ。泣いてええんや。私が全部、受け止めてあげるから」

「俺、俺………！ 何も出来なかった………！ ヴィヴィオも攫われた！ 機動六課の仲間も守れなかった！ 全部、全部………！！！」

修のとめどなく溢れ出る弱さ。

はやてはそれを言葉で遮ることなく、全てを聞き入れ、その度に抱きしめる力を少しだけ強くした。

どんなに強い力を持っても、心が伴わなければ、人は壊れてしまう。

快樂殺人鬼などが良い例だ。

はやての知っている人物の中には、権力に溺れ、元々あった志を無くしてしまった人物も大勢いる。

無意識の内に、八神はやてはそんな人物を嫌っていた。

だからこそ、そんな力に振り回され、心が傷つけられていく人を

一人でも防ぎたかったのかもしれない。

「それは違うよ。修君。君は悪くない。君はようやくたよ。誇つてええ。私が認める」

「はやて……俺を……俺を許してくれるのか……?」

「許す? 何を言うてるんや。許すも何も、怒ってもないよ?」

その言葉を言った時のはやての笑みは、多分、修にとって最も忘れられない、最高の思い出になったことだろう。

一通り泣いた後、修はようやく泣き止み、右手で涙を拭き取る。

「……ありがとう……はやて……でも、まだ大事な話があるんだ……」

修の大事な話。

それは勿論、無意識転生無限者のこと。

この事実をはやてはどう受け止めるのか。

「ええよ。何でも聞いたる」

それでも、そんな些細な不安は、はやての笑顔を見れば、消え去った。

今はもう、何も恐れることはない。

袋小路、出口のない迷路ではないんだ。

希望はある。

敵から教えてもらったものだが、今は信じるしかない。

修の内部には強い決意と希望が生まれた。

それは何にも揺るがない信念へと変化していく。

「…………ゴメン。やっぱ、全部が終わった後に話すよ」

「…………そか。ほんなら期待しとくよ」

彼の決意の籠った瞳を見たはやては頷く。

その先の言葉は無かった。

八神はやても余計な模索はしなかったし、今の修の決意は何となく分かっていた。

全てを護るために闘う、と。

機動六課、地上本部への攻撃はものの十数分で完了した。

まるで警備、内部構造の全てを知っていた様に、至極、短時間で。

地上本部は緊急体制を保ったまま、警備部隊や関係者等に相談等を行っていた。

忙しく動き回る様は、実に滑稽である。

機動六課も同様である。

負傷したフェイト、スバル、リイン、ザフィーラ、シャマル、修、ヴァイスを含める機動六課の隊員は怪我の治療のため、病院に運ばれた。

フェイト、修、他の機動六課の隊員は比較的軽症のため、すぐに

前線に復帰できるが、他のメンバーは多少の入院を余儀なくされるようだ。

ヴィヴィオが攫われたのは、高町なのはにとって、相当な精神的ダメージを与えた。

ギンガを攫われたスバルもまた、同じである。

捕虜でありながらも、機動六課の面々に馴染んでいたピエールが消滅した事も、多少ながらメンバーの心に影を与えている。

六課の隊舎が崩壊してしまったので、戦艦「アースラ」に本部を移したことも記しておく。

事態はまだ動かない。

今は羽休めの時だ。

ゆっくりと翼を休め、傷を癒し、飛び立て。

天海達、及び列車襲撃犯たちもまた着々と準備を始めていた。

とはいえ、天海は負傷のため治療中、暫くは動けないとのこと。

その間はウーノが指示を取り、妹たちに指示を出していく。

まずは質量兵器である「アインヘリアル」の制圧。

これは実に手際よく完遂した。

続いて「ゆりかご」の起動である。

これに至っては、協力関係にある「ゼロ」達と共に進めていく。

地上本部襲撃から一週間後、既に機動六課の面々、ザフィーラと

ヴァイスを除いたメンバーが前線に立てる状態になった時だ。
ゼロ達は「聖王の器」である、ヴィヴィオにレリックを埋め込み、
起動核とする。

そうして「ゆりかご」は遂に飛び立つ。

その際にミッドチルダ全域に放映された映像をご覧頂こう。

巨大かつ広い部屋。

最奥部には、これまた巨大な椅子が一つ。

何本もの繋いであるチューブが、その椅子に座っている少女から
発せられるエネルギーを船全体に行き渡らせるようだ。

そんな巨大な椅子に座らされている少女。

名前はヴィヴィオ。

「聖王の器」と呼ばれる彼女こそが、この「ゆりかご」を動かす
鍵なのだ。

「何……？ 怖いよお………ママァ………」

脅えるヴィヴィオなど知ったことかと、ゆりかごは起動のために
必要なエネルギーをヴィヴィオから摂取し始める。

「あっ………痛っ………痛いよお………ママァ………ママァー！
ー！」

採取には苦痛を伴う。

それを承知で、ゼロはヴィヴィオにレリックを埋め込んだ。
でなければ面白く無い。

今まで尽くしてきた意味がない。

その非人道的な光景はアースラ内にいた高町なのはの目にも届いていた。

「ッ……………ヴィヴィオ……………！」

瞳孔が開きつつある目でモニターを見ているなのはの手には待機状態のレイジングハートが握られている。

手を知らず知らずの内に強く握り締め、心の悲痛な叫びを視覚的に表す。

そうしている間に、ゼロが別のモニターに映し出される。

既に温厚なゼロは、其処に無く、いるのは凶暴性と狂気が剥き出しとなった、唯の狂人。

帽子は被っておらず、ニコニコが特徴だった笑みは消え去り、カッと開かれた目から放たれる眼光が、他者を圧倒する。

狂気に満ちた表情でヴィヴィオの側に立ち、ヴィヴィオの泣き声すらも掻き消す高笑いをしながら、両手を大きく広げる。

「さあ！！　　ゆりかごの覚醒だ！」

隣にいる少女は微妙であるがクスクス笑っている。

少女の目は眠そうなままだが、顔にはヴィヴィオを嘲笑う表情が

見え隠れしていた。

「今！ この世界は全てが無駄だ！ 無駄だらけだ！」

「だからよお、この俺が終末って奴を見せてやるよ……………絶望って名の終末をなあ！！！」

「ゼロの名において命ずる……………起きやがれ、ゆりかご」

「否、世界崩壊の箱舟「ノア」よ！」

「貴様のその砲撃で、全ての無駄を薙ぎ払え！」

声に呼応するようにノアは起動し、浮上する。

揺れる艦内でもバランスを崩すことなく、ゼロは高笑い続ける。

「ンガ―ッハッハッハッハア！！」「終焉」を手に入れたぞ！」

「さあ……………俺を止めてみろ……………機動六課、そして……………」

「神崎修！！！」

狂気が支配する空間で、狂人は高笑いを続ける。

隣の少女も初めて、僅かに声を出して笑った。

見る者が見れば、非常に不愉快になる映像は、そうして切れる。

遂に物語は最終局面に突入する。
あるのは希望か絶望か。

第十七話「閑話休題参　―決意、終焉、狂気―」（後書き）

お疲れ様です。

さて、このお話もいよいよ終わりが近づいてきました。

しかしながら、見返せば見返すほど、荒い部分が非常に多いですね
……………

このせいで感想も全くない状態なのでしょうか……………

ですが、これは今作品が「未だに感想を書くに値しない作品」である証拠と、私は思っております。

一応、終わりまでは既に書いてありますが、修正等も含み、頑張っ
ていきたいと思います。

最後に、失礼致しました。

また次回にお会い致しましょう。

第十八話「レギオン・スクリーミング・ショウ」

最終確認。

機動六課及び時空管理局戦力分散状況。

機動六課フォワード陣。

スバル・ナカジマ

ティアナ・ランスター

エリオ・モンディアル

キャロ・ル・ルシエ

シグナム

リインフォース？

戦闘機人との戦闘経験アリのため、最前線で首都防衛へ。

戦闘機人たちと戦闘。

その後、防衛ラインにて戦闘機人の停止を策略。

フェイト・T・ハラオウン

シャツハ・ヌエラ

「天海」負傷との報告との報告を受け、天海のアジトへと潜入。
場所及び情報はヴェロッサ・アコースより報告。

高町なのは
ヴェータ

八神はやて

神崎修

起動したゆりかご、否、「ノア」の停止のため、行動開始。

カリム・グラシアにより機動六課隊長陣、副隊長陣のリミッターを解除。

他の航空魔道師たちとの連携により、ノアの入り口を搜索中。

天海&ナンバーズの戦力分散状況。

天海

トーレ

セツテ

セイン

ウーノ

天海は重傷によりアジトで治療中。

その警護として三名が選抜。

ウーノは天海の治療に専念。

クアットロ

ディエチ

チンク

起動したノアに乗船。

主な戦況把握とヴィヴィオの警護へ。

ノーヴェ

ウエンディ

?? (ギンガ・ナカジマ)

ノアの完全浮上及び主砲発射位置まで首都を攻撃し、戦力を分散させる目論見のため行動。

またオットー、デイドは未完成のため、ポッド内で眠ったままである。

列車襲撃犯たちの戦力分散状況。

ゼロ

死神

ノア内にて待機。

目的は神崎修の抹殺。

ギョーブ

狂人

首都攻撃へ。

ナンバーズとの連携アリ。

以上にて報告終了。

我らが女王よ。

復讐の鬼と化した女王よ。

貴女の怨敵は首都防衛へ。

殺しましょう。

殺しましょう。

復讐しましょう。

復讐しましょう。

消え去った我らが同胞のために。

我らが巨なる王を呼び覚ましましょう。

睡覺させましょう。

我らが巨なる王を。

「……………あア……………ソウね……………クハッ、クケッ、ククッ、クハッ」

「くっ……………まだこんなに居るとはね……………!」

広く澄み切った青空の下。

崩壊気味の道路。

首都へ向かうフォワード陣たちの前に立ちはだかったのは、大量のレギオン。

地上本部襲撃時にヴォルテールによって、その殆どは死滅したと思われていたのだが………実際はまだまだ居たらしい。

新人達は巧みなコンビネーションで次々と襲い来るレギオンを消滅させていく。

今までの新人達では潰えたハズだが、この場に至るまでの道のり、そして訓練が彼女達を強くしたらしい。

「ハアアアアア！！」

スバルの拳に青色の魔力が生成され、ナツクルダスター圧縮。

そのまま身体を強化したスバルの強力な一撃がレギオンの群れを葬る。

虫が潰れるような悲鳴を上げ、レギオンは一体また一体と消滅していく。

「こいつらは足止めみたいね………かといって、放置も出来ないし………」

レギオンを魔力弾で一体ずつ排除しながらも、ティアナは現状を思案していた。

このレギオン達は元々、群れを成して迫ってくる生物だ。故に今回は足止めの意味合いが強いだろう。

このまま足止めを喰らい続ける訳にはいかない。

しかし、放置すれば市民を襲う可能性だって出てくる。

殆どが避難済みとはいえ、この数と機動力だ。

防ぎきれると思えない。

どうすれば良い。

そんな風にティアナが必死で思案している最中であった。

唐突に全てのレギオンが攻撃を中止した。

エリオになぎ倒された一体の悲鳴が響いた後、フォワード陣を囲っていた全てのレギオンが動きを止める。

「えっ？」

キャロが不思議そうな声を上げた。

今まで自分達を殺そうと躍起になっていたレギオンが一瞬で攻撃を止めたのだ。

これは何かあるのではないか。

そう考えたのはティアナだ。

レギオン達はお互いの顔を見合すように首を動かし、すぐさま縦に二列に別れる。

丁度、中央にいたスバル達を挟み込むような形だ。

だが、挟み撃ちよりも囲っていた方がよっぽど攻撃には向くハズだ。

やはり何かある。

そうしてティアナの悪い予感は当たった。

「ああああアアアあつああアアアアアああああアア！」

遠方から絶叫し、突っ込んでくる一人の人物。

ボロボロになった衣服にボサボサの黒い長髪。

露出した肌には切り傷や火傷の跡が見えている。

両目は紅に染まっており、狂気と怒りが満ちている。

面影もなくなったレギオンの女王……レーは狂ったように叫びながら、フリードの背中に乗っているキャロ目掛けて突っ込んだ。できた。

「あっ……フリード！」

すぐさま目標が自分だと気付いたキャロはフリードに声をかけ、上昇する。

スバルやティアナを巻き添えにしないためだ。

それでもキャロを追いかけるレーの一撃を、共に乗っていたエリオが防ぐ。

「ぐう………！」

不意打ち＋上空からの強力な一撃だったが、今のエリオは弱者ではない。

何とか力任せに相手を押し返し、フリードに乗った状態で、睨みあう。

「リュウつかイめガア………！！　ワレらがドウほうをキョダイなるりゅうでハウむりさったツミ、オモイしらせテやるう………！！」

カタコトかつ言葉遣いまでも変わってしまったレー。

だが、キャラは彼女との認識はない。

それでも、「巨大なる竜」という一言で察しはついた。

「えっ………!!? 貴女、あの時、ヴォルテールの放った火の中に居たんですか!?!」

驚くのも無理はない。

何せ、あの火炎の中だ。

普通なら焼死しているハズだから。

「グガッギッギギギ………むチトハじつにオロカシイナァ!! なれば、イマ、ココで! ふくしゅうヲはたシ! セカイのしゅうエんをかつモクセンとスる!!」

もう話すことは無いと決めたのか。

レーは大口を開け、そこから青色の光線を放つ。

「うわっ!?!」

それをいち早く察知したフリードが見事にかわし、更なる上空へと舞う。

キャラに復讐を果たすため、レーは二人と竜を追う。

「キャラッ!」

地上に残されたスバルとティアナの内、ティアナが叫んだが、そ

の声はもう届かない。

この状況で分断されるのは非常にマズい。

急いで合流しなければならぬ。

幸いか、先程まで大量にいたレギオンはレーの後を追っていったため、今の二人はフリーである。

「とりあえず、急いで合流するわよッ！ スバル！」

「うん！」

スバルの足元に魔方陣が展開される。

「ウイング！」

後は「ロード」と叫び、魔法を発動させるのみ。
そこまで至ったのだが、またも邪魔が入る。

「やれ急くな。主らには頼月色の絶望が良く似合う」

「ッ!？」

そのしゃがれた声が聞こえると同時に、その場から飛び跳ねる二人。

直後、二人が今まで立っていた場所に銀色の数珠が数個、襲い掛かってきた。

「な、何っ!？」

スバルが驚き、声の主を視認しようと首を動かした。

「オリヤアアア!！」

視線の先には自分に殴りかかってくるノーヴェの姿があった。

「くうっ!！」

強烈な一撃を腕をクロスすることで防いだスバルだったが、戦闘機人は闘えば闘うほどにデータを得て、成長するもの。

その一撃は道路脇の壁に、同じ戦闘機人であるスバルを突っ込ませるだけの威力を持っていた。

「スバルッ!　ッ!」

「油断大敵ッスよ!！」

ティアナは近くの建物の屋上に避難していたが、それを見越していたかのようなウエンディの「エリアル・キャノン」が炸裂する。

片手に装着された盾と砲撃の役割を果たす武器によって放たれた一撃。

「くっ!」

中々の威力を誇る砲撃だが、ティアナは咄嗟に身を近くの建物内に隠すことで、攻撃を回避していた。

『ティアツ……ティアツ!!』

道路脇の壁に叩きつけられたスバルだったが、どうやら怪我は無いようだ。

すぐさま周囲に見当たらない相棒のティアナの安否を確認するため、念話を飛ばす。

その念話はティアナの脳内に響く。

『大丈夫よ……それより、この状況で個人戦はマズイわ……修さんの言った通りになったわね……今すぐ合流を!』

修の予言は当たった。

それもそのハズ。

彼は原作のこのシーンを何度も見たのだから。

そのため、予め、ティアナ達にも警告をしていた。

ティアナ達も、それを聞き、警戒をしていた。

だが、結果は同じでも過程が全く違ったのだ。

レギオンやレーの襲撃。

これにより、彼女たちの警戒は意味を無くし、結果、原作通りの展開になってしまった。

そのことに焦りを感じながらも、ティアナが返事をした、その時である。

ティアナの隠れていた建物を八つの数珠が多い、黄土色のエネルギーの波状で覆ってしまったのだ。

これにより念話は途絶えた。

そして建物内に響き渡る戦闘機人の声。

「残念でした。合流はさせねえッス」

ウェンディの背後にはノーヴェも付いている。

どうやらティアナは一人で二人の戦闘機人の相手をしなければならなくなったようだ。

「はっ……………！」

ティアナ救出ため、動き出したスバルの前方に立つ、一人の女性が居た。

服装こそ違えど、スバルが今まで何度も見てきたあの顔の人物だ。

「あっ……………」

スバルは動きを止め、女性を見る。

腕組みをし、静かに閉じていた目を開ける。

凛々しくも優しく、時に自分と同じように天然で、でも、よく自分を守ってくれた……………優しい女性。

「ギン姉……………」

「こちらは手筈通りに整えたぞ。後は主らで上手くやれ」

「あいあい。どーもッス」

ティアナを閉じ込めた建物近くの上空。

小さい神輿に乗った全身黒い包帯の男はモニターを見ながら、ウエンディとの通信を切る。

「しかし、郡集団の女王が生きているとは。アレは中々に良き不幸よな。実に愉快哉」

ククツと笑みを零す男。

その表情には実に嬉しそうな表情が広がっている。

そうして男は右手の人差し指を挙げ、浮上していくノアに向ける。

「見やれ。迫り来るアレを。主らにも分かつう。我には分かる。さあ、アレが降るまで我らに付き合え」

本当に指先はノアを示しているのだろうか。

そう独り言を呟いた後、その姿をいつもの如く、蜃気楼のように消した。

「フェイトお嬢様……………こちらにいらしたのは帰還ですか？ それとも……………反逆ですか？」

「くっ……………！」

天海のアジト。

その通路の一つで睨みあうフェイトと戦闘機人、二人。
トーレとセツテだ。

周囲には未だ造り途中の戦闘機人たちが眠っており、彼女らが入っている生体ポッドの真下には腐臭を放つ死体が放置されている。
何本ものチューブが死体からエネルギーを吸い取り、生体ポッド内へと送っている。

人間や獣等の死体。

それらの臭いが異常な空間を更に際立たせている。

尚、同時にアジトに潜ったシスター・シャツハは奇襲を仕掛けた
セインの追撃のために、更に地下に向かっている。

その証拠に、フェイトの背後の床には大きな穴が空いている。

「どっちも違う。犯罪者の逮捕。それだけだ」

バルディツシュ・ザンバーフォームを軽々と振り、その切っ先を
二人に向ける。

「そうですか……………では仕方ありません。天海様の命により……………
貴女を、今、此处で、殺します」

戦闘機人とはいえ、元々は人。

天海の発する狂気に犯されぬ道理は無し。

トーレとセツテは共に構え、その目に人間らしい狂気を宿らせた。

「……………天海様？」

天海の入ったポッドの側で、治療を続けていたウーノであったが、ポッド内の天海が微笑した事に気付き、作業を一時中断する。

「いくら常人を越えた天海様とはいえ、まだ完全回復はしていない……………トーレ、セツテ、頼んだわよ」

通路奥の暗闇、恐らく機動六課の誰かと戦闘しているであろう二人の姉妹に向け、ウーノは通信を行わず、己が心の内でそう願った。そうしてから、すぐさま手を動かし、作業を開始する。

「ク……………ククッ……………」

「機動六課スターズ1、2。ロングアーチ1。内部通路突入」

堂々とノアの甲板に穴を空け、侵入してきた鼠が三匹。

管理局の白い悪魔と守護騎士の一人。

そしてイレギュラー。

三人は床に降りるためにゆっくりとした速度で降下していく。

同時に、イレギュラーを除く、二人の魔力が外部からの影響で強制的に衰弱させられる。

「AMF!？」

「内部空間、全部に……!？」

ある程度の予想はしていたが、此処まで広範囲に渡ってAMFが張られているとは思わなかった。

多少の驚愕を示す二人だったが、此処で神崎修がようやく口を開く。

「……………任せろ」

静かにそう呟くと、目を閉じ、集中する修。

すると、その僅か二秒後にはノア内全てのAMFが除去された。

「凄い……………AMFが全部消えた……………」

「修……………お前、こんなことで力を使っちゃって良いのかよ……………?」

前回の死神少女との闘いのせいで、修の力が無くなりつつあるのは、既に修自身が機動六課の面々に話している。

力の無くなった修は、悪いが戦力外となる。

それでも、それでも神崎修という男は『護る』という一心で、此

処まで付いてきた。

「ああ。何、まだまだ余裕だよ。この戦いを終わらせるくらいの力はあるからさ」

心配するヴィータに悟られぬ様、笑みを返しておく。

「…………分かった。だけど、無茶はすんなよ」

修の心中察してか、ヴィータはそれ以上、言及してこなかった。そうして三人が無事に床に着地すると同時に、周囲を取り囲むように空間にモニターが浮かび上がる。そこに映っているのはゼロ。

「…………ようやく来たか！ 遂に全てが終わる！ さあ、足掻いて魅せてくれ！！」

一方的に喋り、一方的に通信を切るゼロ。彼の言葉には歓喜の感情しか籠っておらず、なのは達も反応し辛かったから、ある意味、助かったといえる。

「それじゃ……………全てを取り戻しに行くか」

「うん」

「ああ」

修の一言に頷く、なのはとヴィータ。
終焉は間も無くだ。

「如何様にしても死ぬ運命！ なればこそ！ 無駄な足掻きなど止めることだと小生は思うわけです！」

地上本部に侵入した狂人をリインとユニゾンしたシグナムが止めている最中に、狂人が叫んだ言葉である。

彼らは事あるごとに言う。

『全てが無駄』だと。

その言葉の真意は未だ、分からない。
間も無く分かるのは間違いないが。

「貴様らの真意は分からない……が、守るべき者ある限り、我々は闘う！」

シグナムは鏢迫り合いをしていた狂人を押し返し、鞘の中にレヴァンティンを一旦、仕舞う。

同時にリインが叫ぶ。

「炎熱加速！」

鞘に納まったレヴァンティンが一回、カートリッジをロードし、シグナムは関節剣となったレヴァンティン・シュランゲフォルムを抜き出す。

「飛竜一閃！！」

シグナムとリインが同時に叫び、魔力付加した斬撃が狂人に襲い掛かる。

「仕方ない。些か本気で行きましようカアネエ!?」

「クケケ」と笑い、狂人は常識を遥かに上回る速度で飛竜一閃を回避。

そのまま防御が疎かになっているシグナムの目の前に出現し、重い蹴りを繰り出す。

「ぐあっ……………!!」

強大な一撃を誇る「飛竜一閃」であるが、その代償として防御が困難になるという弱点を持つ。

狂人はそれを知ってか知らずか、得意の高速移動で攻撃を回避し、反撃に出たのだった。

吹き飛ばされたシグナムは、そのまま壁を突き抜け、下へと落下していく。

その様子を満足げに眺めた後、狂人は再び地上本部に居る最重要人物の殺害に乗り出した。

独り言を呟き、ハイテンションを持続しながら。

「あと少しで小生の望む死がやって来る! 死ねる!! あと少しあと少し後後後後後後……………ヒヤッハー!!!」

「くっ……………!」

一方、シグナムはすぐさま身体を浮遊させ、態勢を立て直していた。

「すぐに追撃するぞ！」

「はいです！」

リインの返事を聞き届けた後、すぐさまシグナムも自分が突っ込んで空いた穴から建物内部へと舞い戻る。

「泣け！ 喚け！ そして死ねえ！！
ンガーッハッハッハッハッ
！！！」

未だ苦痛で泣き叫ぶヴィヴィオの側で、彼女の鳴き声を上回る奇声でゼロが狂った様に笑っている。

彼は嬉しくて仕方ないのだ。

この世界は終わる事実が。

永く続いた輪廻がようやく終わるのが。

「後に来る最後の大芝居。満足の後、絶望し死に絶える。それで仕舞いだあな」

「…………死ぬ死ぬ皆死ぬ」

ゼロの服の裾を掴みながら、ジト目な死神は死を呟く。
呪いにしては淡泊。

独り言にしては物騒。

語るにしては味気無い言葉を呟くのみ。

「そう。死ぬ。つか終わる。神崎修をお前が殺し、後は全員死ぬ。
俺らは終わる。世界も終わる。それでハッピーエンドよ」

狂気に満ちた表情でゼロは死神に語るかける。

少女はゼロの顔を眺め、コクコクと頷く。

ここで初めて、ヴィヴィオの泣き声がようやく部屋中に響き渡った。

「皆殺し。皆殺せ。そうして仕舞い、仕舞いよ」

微笑したゼロはヴィヴィオに近づき、頭を思いっきり殴る。

そのまま前髪を掴み、顔を近づかせる。

「ほら。もっと泣け！ もっと喚け！ テメエの親代わりを呼んで
みな！ それから死ぬ！ ハッハッハッハッハッハッ！！」

「ママァ…………ママァァ——！！！」

痛みにより更に泣くヴィヴィオ。

そんな少女を見ても、死神少女は何の感情も抱かない。

いや、実際には抱いていた。

「鬱陶しい」という感情を。

第十八話 「レギオン・スクリーミング・ショウ」 (後書き)

いよいよ最終章となりました。

最後に待っているのは、果たして何なのか。

何気に今作品を此処まで読んで下さっている皆様方に、最大級の感謝を。

誠にありがとうございます。

ちなみ、今回のサブタイトルの元ネタがわかった貴方は結構なマニアックな方ですね。

私、歓喜致します。

第十九話 「ながされて原作編」

原作通りの部分などカットだ！
実につまらない！

介入により、物語は大幅に変更されるものを、変更せずに行うなど！！！

無駄無価値無意味無機質無味無臭！！

だが、仕方ない。

始めよう。

もういい加減に飽きてしまった。

傍観者でいるのも。

この世界にいるのも。

全てにだ。

と、彼が言っていた。

いやはや、短期は損気というのに。

愉しめば良いものを。

この無駄な時間を。

残り僅かなのだから。

だがしかし、彼が我々を生み出したである以上、仕方ない。

始めよう。

全てを終わらせよう。

ぶつかり合う、二つの蒼い閃光。

姉妹である二人の激突。

スバル・ナカジマとギンガ・ナカジマである。

ギンガは天海たちに攫われ、簡易的な改造を受け、ほぼ洗脳に近い状態で妹であるスバルと闘っている。

スバルは、そんな姉を元に戻すために、任務のために、護るために闘っている。

先程から繰り返される攻防。

殴り合い、蹴り合い、防ぎ合い、お互いの身体はボロボロになっていく。

そんな闘いも、遂に終結しようとしている。

ギンガの一撃とスバルの一撃。

スバルは右手を繰り出し、ギンガは左手で攻撃を繰り出しながら、空いている手でシールドを張り、防いでいる。

ギンガの左手は高速回転し、浪漫溢れるドリルへと変貌。

スバルの頭部に襲い掛かる。

スバルもシールドを展開し、防御しつつ、右手の一撃を繰り出しているが、その右手もまた、ギンガは防御している。

互いに譲らぬまま、僅か数秒が経つ。

そこで小さな変化が起きる。

スバルが攻撃最中の右手の拳を解き、ゆっくりと開き始めたのだ。まるで相手の手を掴みかかるような形に開かれた右手。

「一撃………必倒………!!」

スバルの魂を込めた叫び。

同時に、スバルの右手はギンガのシールドをゆつくりとだが、侵食していく。

だがそれは、ギンガのドリル攻撃も同じだ。

彼女のドリルもゆつくりと、妹の頭部を貫くために、シールドを突き破っていく。

「うおおおおおおおおお!!」

そして時が動く。

最初にシールドを壊したのはギンガの方だった。

だが、ドリルはスバルの頭を貫くことなく、彼女の頭部を掠めるだけに終わった。

咄嗟のスバルの回避行動が、彼女を救ったのだ。

直後に、ギンガのシールドも消滅する。

スバルはそのまま右手を突き出すことはなく、予め魔力を溜めておいた、左手の拳をギンガの腹部に持っていく。

攻撃をかわされ、体勢を戻しているギンガに回避の余地はない。

「ディバイイン………!!」

「ッ！」

すぐに膨らんでいく蒼い魔力の塊。

一瞬で二人を包み込むほどの大きさに膨張した魔力の塊目掛けて、

スバルは右手の拳を殴りつける。
ありったけの力、思いを込めて。

「バスタアア————！！！」

強力な砲撃がギンガを包み、彼女は敗北した。

妹のスバル・ナカジマの手によって、彼女は負けたのだ。

しかし、これで良かったのだ。

こうして彼女の洗脳は解かれ、二人は再び、仲の良い姉妹に戻る。

本当にそうだったら幸せだったのだが。

「貴女たちを……保護します。武装を……解除しなさい……！」

心身共に瀕死に近い状態。

満身創痍でティアナはクロスミラーージュの銃口をノーヴェに向けた。

「ぐっ………！」

ギョーブの仕掛けた結界に閉じ込められたティアナ・ランスター。中にはウェンディとノーヴェという二人の戦闘機人がティアナを討ち取るべく、入ってきた。

幻影、射撃を駆使し、二人を翻弄するティアナであったが、やはり一対二では不利。

更に、戦闘機人たちは、過去のデータを元に、学び、成長していくため、ティアナは尚更、不利になる。

だが、それでもティアナは諦めなかった。

その信念と思いが原動力となり、ティアナを奮い立たせる。

そしてようやく、ウェンディを気絶させることに成功し、ノーヴェに対して銃を突き付け、無力化させることが出来た。

息も途切れ途切れになりながらも、彼女の目はしっかりと生きている。

しかしながら、このままでは終わらない。

「ザンめつはヒトすぎのヨのハジヨにスラおとルというノかあ!!」
ほぼ崩壊しつつある街並み。
その一つのビルの屋上。

壊れた思考を懸命に使いながら、レーは指先から伸びる紅い鞭状の光線を操る。

右手を振るうことによって生まれる一撃を、エリオは防ぎ、キャロは回避する。

フリードも空に舞い上がり、回避行動を取る。

周囲を囲むレギオン達は攻撃もせず、ただただ傍観に浸っている。

カタコトになった言葉を使っているレーだが、もはやその言葉の意味は理解不能なものになっていた。

復讐心が彼女を支配し、中々、キャロを殺せない焦燥感からか、遂に精神が崩壊した。

攻撃は荒くなり、威力は増すが、隙も増す。

その隙をエリオに突かれ、攻撃された回数も、既に二桁に昇る。

それでもまだ致命傷が無いのは、彼女の實力の高さを示しているのだろう。

だが、それも長く続かない。

「落ち着いてください！　こんな無駄な闘いは止めるべきです！」

事情をまだ完全に飲み込めていないエリオであったが、とりあえずキャロを護りつつ、この目の前の女性を落ち着かせることに集中した。

しかし、エリオの努力虚しく、レーは真っ赤に染まった目でキャロを睨みつける。

「ともシビはツネズネこきよすらがかイサせる。ものミノハてにてきいハこんメイのやミにシズムデあろう！！！」

叫びながら、横薙ぎを繰り返す。

「くう……ぐあっ!!」

「エリオ君!」

キャロに届かせまいとして、レーの攻撃を受け止めるエリオ。力任せの一撃は、少年であるエリオを吹き飛ばすには十分であった。

吹っ飛んだ先にあった鉄製の柵に背中を強打し、エリオに掛けられていた勢いは止まった。

すぐにエリオの元に駆けようとするキャロであったが、レーとレギオン達の咆哮により、その動きを一時、封じられる。

「ああああああアアアアアア!!!」

思いつきり叫んだ後、レーもレギオンも静まり返る。

レーに至っては、俯き、床を眺めている。

そして、一呼吸の後、レーは静かに顔を上げる。

そこには狂気は存在せず、元の彼女の顔があった。

「我らが王。我らが女王。我らが王。我らが女王。呼び生ける者。名はレギオン。我らは群れである」

浮遊しているレギオン達がまたも鳴き出し、辺り一帯に騒音を作

り出す。

そんな中でも、レーの声は透き通り、キャロとエリオの耳に響いた。

「主がお前の名は何かとお尋ねになると、ソレは答えた。『我が名はレギオン。我々は大勢であるが故に———』」

直後、地面が揺れた。

「きゃっ!?!」

「こ、これは……………!?!」

痛む背中など気にせず、すぐにエリオはキャロの元に駆け、背中に庇う。

だが、キャロは護られることを拒否し、共に闘うことを選ぶ。お互い、横に並び、揺れに耐える。

「目覚めり。我らが王」

レーが両手を広げ、真っ青な空を見上げる。

刹那、レーの背後のビルの間から巨大な生物が地面に出来た亀裂から現れた。

「これが……………レギオン……………!?!」

何とも形容しがたい形だ。

手はなく、巨大な尻尾が生えている。

無機質だが虫をイメージさせるフォルム。

目は青く輝き、胸部は黄金色に光る。

顔に当たる部分の左右にある、計八本の関節付き触手がうねる。前方に突き出た角が、この生命体の恐怖をそそり立てている。

「巨なる竜に復讐を。さあ、呼べ。そして微塵となれ」

それは挑発でもあった。

ヴォルテールを呼べ、というレーの。

だが、そうと分かっているでも呼ばなくてはならない。

そうしなければ、この巨大なレギオンに街を破壊され尽くすことは必然。

だからだ。

「キャロ！」

「うん………天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠の護り手、我が元に来よ、黒き炎の大地の守護者。竜騎招来、天地轟鳴、来よ………ヴォルテールッ！！」

エリオと視線を合らし、頷いたキャロは瞼を閉じ、詠唱を開始する。

すると、キャロ達から少し離れた場所にピンク色の魔方陣が展開され、そこから巨大な火柱が噴出される。

やがて火柱から巨大な竜が姿を現し、キャロに名前を呼ばれると同時に、その姿を完全に現す。

今、此処に二匹の巨大生物が対峙する。

大きさは丁度、同じくらいだ。

「我らが復讐。今、成さんとす。なれば、この無意味な闘い、無意味な貴様ら、無意味な我ら、無意味な世界が終末へと向かう……………実に素晴らしい」

我を取り戻したかに見えたレーであったが、その口調は完全に別物。

それでも、彼女の顔は嬉々に満ちていた。

間も無く来る終焉に思いを馳せているためだ。

後方のレギオンも嬉々として咆哮する。

二つの閃光が幾度も交差する。

一つは金色。

一つは紫色。

真・ソニックフォームへと変身したフェイト・T・ハラオウン。

これは原作と大きく違う展開のため、多少の期待はしたが、彼が操作したよるものと思える。

とりあえず、だ。

フェイトは防御力を犠牲にした速度でセットを撃破。

IS、ライドインパルスを駆使するトーレとの闘いに望んでいた。先程の閃光はこのためだ。

またも直線状にぶつかり合う二人。

お互いの頬に切り傷を残しながら、Uターン。
速度を増し、再び攻撃に入る。

その前に、フェイトは二本に分かれていたライオット・ブレードを合体させ、一つの大剣「ライオットザンバー・カラミティ」へと変貌させ、その強大かつ巨大な一撃をトーレ目掛けて振るう。

「うおおおおお！！」

トーレも負けじと咆哮し、ザンバーの伸びた刀身に立ち向かう。
だが、これはフェイトの必墜の一撃。

トーレの気合い虚しく、彼女は廊下の床に叩きつけられる。
その衝撃は半端ではなく、戦闘機人である彼女を気絶させるに至った。

「ハア……ハア………」

疲労の呼吸を整えながら、フェイトはそのまま奥にいらであろう、
負傷中の天海の逮捕に向かう。
と、その時だった。

「残念ですが、此处で終幕のようです。お粗末様でした」

「えっ………！？」

空を飛んでいるハズのフェイトの背後から、その声は聞こえてきた。

優しそうでいて、恐怖を抱かせる声。

直後、フェイトの背中にクロスの切り傷が付けられる。

「かはっ……………!!」

突然の奇襲に、成す術もなく、フェイトは床へと落下する。

飛び散る血飛沫によって、彩られた床の上、落ちたフェイトのすぐ側に一人の男性が着地する。

「さて……………この世界が終わる前に……………あの子たちを、私の手で始末してあげなくては……………」

フェイトの血が付いた鎌の先端をじっくり眺めながら、天海は呟いた。

まだフェイトは死んではない。

そのことに気付きながら。

「ッ……………そんなっ！　まだ無理です！」

フェイトがまだトーレやセツテと闘っている間、最奥の研究室では、天海がポッドを突き破り、床を悶え苦しみながら、のた打ち回っているところを、ウーノが止めている最中であった。

「天海様！ 貴方のお怪我はまだ完治していません！ どうか、休んでください！」

駆け寄り、天海を落ち着かせながら、喋るウーノに対し、天海は苦しみながらも、いつもの薄ら笑みを浮かべていた。

「ククッ…………ウーノさん…………間も無く、世界は終わります……………」

「はい。あの者たちが世界を終わらすのは聞いております」

ウーノに膝枕をされながら、天海は喋り続ける。

その次に話す内容は衝撃的なものであったが。

「ですので…………世界が終わる前に…………貴方達を、私自身の手で殺します」

天海の一言は、常人が聞けばショックであろう。

ウーノは黙ったまま、天海を見つめている。

「…………私が憎いですよね…………？ 勝手に生み出され、使われ、殺される…………クク…………嫌なら、今、此処で私を殺しても良いですよ…………？ 貴方達には、その権利がある…………ククッ……………」

薄ら笑いを続ける天海に、ウーノは口を開く前に、天海の頭を抱きしめた。

「構いません。それが天海様の望みならば……いえ、少なくとも、私にとっては最高の死に方です。愛する人に殺されるのなら」

思ってもみなかった答えに、天海自信も多少は驚いている。

目を少し、大きく見開きながらも、弱弱しくウーノを抱きしめる。

「……私は果報者です。欲界でも自慢出来ますよ」

「天海様……」

やがて抱きしめていた手を緩め、お互いの顔の距離を遠ざけるウーノ。

天海もゆっくりと立ち上がり、近くに飾ってある、自身の獲物、二本の鎌を手取る。

「では……ウーノさん。まずは貴方から……良いですね？」

「はい。でも……一つだけ、最後に御願いしても、宜しいでしょうか？」

立ち上がり、天海の目をしっかりと見つめるウーノがそんなことを言い出した。

「何でしょうか……？ なんなりとお申し付けを……」

恭しく礼をし、天海はウーノの言葉を待つ。

やはり死ぬのが怖いのだろうか。

やはり反撃してくるのだろうか。

そんな不安を抱いている者は、この場には存在しなかったが。

「口付けを……口付けをしても、宜しいでしょうか？」

「……ああ……そんなことで宜しいのでしたら……」

天海はすぐさまマスクを外そうとすが、その前にウーノが近寄り、マスクを外してくれた。

そのままウーノはすぐに目を閉じ、天海と口付けを交わす。

天海も礼儀知らずではない。

すぐに目を閉じる。

それから数秒経った。

ウーノは天海から離れ、言葉を掛ける。

ただ、その表情は今までのように無表情ではなく、頬を赤く染めた、歳相応の女性の顔であった。

「……ありがとうございます。これで心置きなく、逝けます」

「いえいえ……この程度のことであれば……」

離れる際に天海にしっかりとマスクを装着していることから、ウーノの有能さが覗える。

「では、すみません……ウーノさんからは生命力を頂きます………その後、首を撥ねますので………」

「承りました。では、どうぞ。天海様」

いつもの無表情に戻り、ウーノは両手を広げる。

表情を戻したのは、天海の罪悪感を少しでも消すためか。

「……………ありがとうございます。ウーノ」

最後に、最も永く、自分の側にいてくれた女性に親しみを込めて呼びながら、天海は鎌の先端をウーノの腹部に突き刺す。

すると、毒々しい緑色の光が、ウーノの腹部から鎌を通して、天海へと送られる。

やがて、十分な量を吸い取った所で、もう片方の鎌がウーノの首を撥ねる。

首から血を噴出し、膝を付いて倒れる死体。

飛んだ頭は天海の足元に転がる。

「……………不思議だ。今まで、幾多大勢の人を殺してきましたが、こんなにも虚しい気持ちになったのは初めてです」

安らかに、何処か幸せそうな表情をしたウーノの首を持ち上げ、天海は空虚に支配される。

そして、彼女の首を死体の元に置くと、いつもの薄ら笑いを浮かべた。

「では、逝きましようか」

天海の姿は消え、次の瞬間には金髪ツインテールの美女の背後に移っていた。

「ハア……ハア………」

一匹のレギオンを一撃の下、粉碎したヴィータは疲れのため、呼吸が荒い。

片膝を付き、右手の平の中にある残りのカートリッジを確認する。

「まだカートリッジもある……大丈夫、楽勝だ……」

自分自身を励まし、目的地に向かう。

ヴィータは「ノア」の機能を停止させるために、途中で修＆なのはと別れ、単独行動を行っていた。

目的地は動力炉だ。

此処を破壊すれば、「ノア」の機能は停止するハズ。

AMFは修によって消されているし、今後、自分がどうなるかも知らされている。

背後からの奇襲。

多分、レギオンか、他の何かによる背後からの攻撃で致命傷を負う、と。

そのため、ヴィータは背後を警戒しながら進んでいた。
奇襲に備えるためだ。

しかし、何時まで経っても攻撃など来ない。
修の予言は間違っていたのだろうか？
だが、油断は出来ない。

ヴィータはそう考えながらも、先へと急ぐ。

その後方、ヴィータから見れば暗闇に当たる部分から八つの数珠

が奇妙に浮遊していた。

「お前……………本当に人間か……………？」

敗北したディエチは管理局の白い悪魔に向かって、呟く。
その身体と獲物にはバインドをかけられながら。

高町なのはは一人、ヴィヴィオのいる場所へと飛んでいた。

途中、幾多のレギオンに妨害されたが、その全てを粉碎してきた。

そして長く続く廊下でディエチの砲撃を受けた。

勿論、直撃を喰らうようなエース・オブ・エースではない。

万全の態勢だったディエチの砲撃を「エクセリオンバスター」で拮抗させ、リミットを1つ外した「ブラスター1」と呼ばれる攻撃で圧倒。

吹き飛ばされたディエチが先程の言葉を呟き、現在に戻るのである。

「じっとしてなさい。突入隊が貴女を確保して安全な場所まで護送してくれる」

レイジングハートの先端をディエチに向けつつ、管理局員としての言葉を述べる。

その言葉遣いと声の音程が、彼女が「悪魔」であることを連想さ

せる。

「この船は……私たちが停止させるっ……!!」

そう言い残し、高町なのはは飛翔し、奥へと進んでいった。

「天海様のご命令だ。『貴様を負傷させろ』とな」

何故、高町なのはが一人で先に進んでいたのか。

それは彼女Ⅱチンクの存在があったからだ。

そして、そのチンクを引き受けたのが「神崎修」だからだ。

「フッ。そう簡単にはいかないさ」

相手は原作にキチンと存在するキャラクター。

しかも見た目は可愛い少女だ。

いつもの口調で接するのは、いささか失礼ではないだろうか。

そんな事を、ふと思った修の口調は自然と丁寧になる。

「承知の上だ。第一、簡単に終わってはつまらんからな」

チンクはそう言い、持っていた金属性のスローイングナイフ「ステインガー」を一本、修目掛けて投げる。

修は片手を軽く挙げただけで、ステインガーの動きを空中で止め、

更に予想通りに起こった爆発をも、ステインガー周辺に展開させていたシールドで包み込み、無効化する。

「…………驚いた。私の攻撃手段を知っていたのか」

流石のチンクも初見で攻撃を見破られたのは初めてのため、驚く。それでも彼女の表情に変化はない。

「まあな。お前たちのことはちよつとだけど、知っているんでね」

修は自身の能力が残り僅かなことを悟られぬように、余裕めいた態度を取る。

チンクは顎に右手を当て、しばし考える。

「ふむ…………では仕方ない。長期戦は不利だな。短期決戦で臨むでしょう」

そう言い放ち、チンクは指の間に挟んだステインガーを修に向かって投げ付ける。

その数は少ないが、連続して投げることにより、数を増やしていた。

「そうか…………なら…………俺も短期決戦で臨ませて貰うぜっ！」

本格的な戦闘開始により、いつもの口調に戻った修は右手で空を横薙ぎに振るう。

すると、空気が揺れ、全てのステインガーの勢いを修に届く前に相殺してしまう。

それどころか、全てのステインガーは行き先を標的から主へと変えてしまった。

「その程度……………なっ……………!」

先程の攻撃で飛び道具が空中で止められることを学んだチンク。そのため、跳ね返しも出来るであろうことは予測の範疇であった。しかし、本来は自分の意思で自由に爆破出来るステインガーが自分の意思とは無関係に爆発したことには、流石に驚いた。

そう、全てのステインガーは跳ね返り、更にチンクの意味とは無関係に爆発し始めたのだ。

とはいえ、その爆発は全て、彼女自身に危害を加えるものではなく、彼女の気を引くためにあったのだが。

「悪い。ちょっとだけ、気絶していてくれ」

怯んだチンクのすぐ背後から修の声が聞こえてきた。

「ッ!？」

すぐさま迎撃の態勢に入ろうとしたチンクであったが、その前に修の手刀がチンクの首を捕らえ、彼女を気絶させた。

ステインガーを跳ね返した直後、能力により爆破の所有権をこちらに移し、修の意思で爆破。

その後、瞬間移動でチンクの背後に回り、気絶させる……………一般的な手といえは一般的な手である。

チンクを気絶させ、修は一呼吸吐く。

「さて……………急いでなのは追わないとな……………!」

修はすぐさまなのは元へと駆けた。

瞬間移動すれば良いのに、とは思ったが、こんなところで無駄に力を使えない。

残された唯一の無制限の力、超人的な身体能力を駆使して追いつこうと修は考えた訳だ。

かくして少年は駆ける。

全てを取り戻すために。

狂人は笑う。

無駄な足掻きだと。

第二十話「鳴かぬなら 滅してくれる 下天の世」

「皆………無事かな………」

洗脳が解け、元の優しい姉に戻ったギンガを背負いながら、スバルは壊れて掛けている市街地の道路の上を滑走する。

ギンガは戻った際に、スバルに「ごめんっ………ごめんね………！」と泣きながら謝っていたが、スバルはそんなことは気にしていない。

姉は洗脳されていただけなのだ。

何も悪くは無い。

むしろ、悪いのは天海一味やあの列車襲撃犯たちなのだ。

故に、スバルが姉を責めるハズは無かった。

むしろ、逆に元に戻すために攻撃したことを謝りたいぐらいだった。

だが、今はそんな時ではない。

一刻も早く、仲間たちと合流しなければ。

まだティアナがいるであろうビルには結界が張られている。

「とりえあず、ギンガを安全な場所に運んでから、ティアアの救援に向かわなくては」という思いがスバルの中を駆け巡っていた。

しかし、世の中は個人の思い通りにいくほど、甘くは無い。

「うわッ!？」

突如、スバルの目の前を何かが横切った。

すぐに足を止め、首を回し、辺りを見渡す。

レギオンではない、影の大きさはスバルの顔ほどだったからだ。
故に戦闘機人でも無さそうだ。

では、何だ？

「スバル？」

負傷のためか、ギンガは先程の影には気付かなかったようだ。

「あ、ゴメン。ギン姉……今、一瞬、何かが目の前を横切って……」

スバルが振り返らずに、姉に先程の影を報告している時だ。

背中にあった姉の温もりにヌメツとした嫌なものが加わった。

「ギン姉……………」

やがて両手にまで、その気持ち悪い感触が流れてきた。
スバルは恐る恐る、首を回してみる。

そこにあつたのは……

「えっ………?」

スバルの思考は停止した。

俯いた姉の顔。

いや、それは良い。

これだけなら、疲れて寝てしまったものだ判断できる。
これだけなら。

異変はその姉の頭の後ろにあつた。

本来ならば、更に後ろの景色が見えるだけの場所。
そこに黄色く長細い何がうねっているのが見えた。

まあ、まだそれでも思考停止には至らないだろう。

問題は、そのうねっているものの根元にあつた。

あろうことか、その黄色い不気味な奴は

ギンガの腹部から生えていたのだから

正確には、スバルの目前を横切り、動きを止めさせ、その隙にギンガの腹部に突き刺さったというべきか。

「え………?………え?」

同じ単語を繰り返すことしか出来ないスバル。
それも仕方のないことなのかもしれない。

最愛の姉は瀕死の重傷を負ってしまった。
それを本能的に悟ってしまった。

先程のヌメリの正体は血液。

ギンガの人間として残された部分の一つ。

それがスバルの背中と手に付着した嫌なものの正体。

そして黄色く細長く、うねる気持ち悪い奴。

これは蟲だ。

この単語でピンと来る方も多いのではないだろうか。

「ぜんぶ くずれてしまえばいいのに」

ご丁寧に、スバルの前方に見覚えある化け物が地面からゆっくりと登場した。

赤黒い液体に簡単に作成できる顔。

流動状の身体からは幾多の蟲が鳴き声をあげている。

「な………何で………？ ツ！」

それはどちらに対しての質問か。

唐突な姉の負傷か。

自滅したとヴィータに聞かされた化け物が再び、自分の目の前に現れたことに対してか。

「みえない なにも」

あの時のようなテンションが高い化け物ではない。

声は相変わらず気味の悪い音程だが、落ち着いている。

こんな声を聞いたのは、あの巨大な球体になって一つ目が浮かんだ時以来だ。

化け物はゆっくりとスバルに近づいてくる。

未だに混乱状態にあるスバルには『動く』ということさえ出来なかった。

ただ、背中 of 姉を持ったまま、呆然と化け物を眺めることしか出来ない。

いや、それも仕方ない。

何せ、スバルの両脚には黒く尖った蟲が貫き、行動を制限しているのだから。

「おとなしくしていれば、淀む闇の中でゆっくりと何者にも動かさず溶けることができるよ」

「い、いや……やめて……」

何処となく優しさを感じさせる口調で、化け物は動けないスバルに覆い被さった。

背中にいるギンガと一緒に。

すぐさま化け物の身体は膨張し、少々、大きめの赤黒い物体が道路上に横たわった。

最初こそ、結構なボリュームであったが、やがて化け物は元の大きさに戻っていた。

「……………傷は癒すから安心して。さあ逝こう。共に最後の舞台へ」

その言葉は飲み込んだ二人向けてか、化け物は呟き、空に浮かぶ巨大な箱舟に顔を向ける。

「狂った僕も冷静になるさ。だって、本当に終わるんだもの」

顔は箱舟に向けたまま、化け物は静かに地面に同化していった。彼は飲み込んだものの、まだ消化していない彼女らと共に向かった。

浮遊する巨大な最終決戦の場へ。

「くたばりやがれ」

「え……………ッ!？」

ノーヴェに対し、クロスミラージュを突きつけていたティアナの背後、瓦礫によって建物のあちこちから光が差し込んでいるために、暗闇になっている部分から、一発の凶弾がティアナの右足を貫いた。

「あ……………!」

突然の不意打ちに、成す術もなく、地面に倒れこむティアナ。

「は？ え？ ど、どうなってんだ……………？」

ティアナよりも戸惑ったのはノーヴェだ。

つい先程まで、自分は敗北者だったというのに。

今では、自分に銃を向けていた相手は床に伏せて、足の痛みを耐えているだけだ。

圧倒的に自分が有利。

「どけ。それは俺様が掻っ攫うからよ」

そう思っていた矢先、この逆転劇を作り出した張本人が暗闇から姿を現した。

隆々とした筋肉。

棘棘しいデザインのジャケットとズボン。

何よりも注目を集めたのが、黒く顔面全てを覆っている金属ヘルメットだ。

幸い、両目と口元は見えるために表情はある程度分かる。

その右手にはショットガンが握られており、銃口から多少の煙が出ている。

これにより、先程の凶弾を放ったのは、この男であることが確定した。

「あれ……………？ お、お前は死んだって聞いたぞ……………」

ノーヴェもティアナも、この男とは面識がない。

だが、ノーヴェは天海からゼロが率いるメンバーの状況を聞かさ

れていた。

天海曰く「彼らの生死が私たちの生死にも関わってくるとか何とか……ぶっちゃけ、本音はあの狂人たちがどう死んだのかとか知りたいだけですけどね……ククク」らしい。

その際、死んだ奴らの画像や瞬間を動画で見たりしていたために、ノーヴェは一方的に男の存在を知っていたのだ。

「ああん？ テメエなんぞ知るか。だが、テメエはあのイカれた快樂殺人鬼の仲間だろ？ その腐臭で分かる。つーわけで、テメエは殺らねえ」

男はその一言でノーヴェへの興味を無くした。
同じ理由で床に転がっているウェンディにも興味を無くしたのだろう。

男はズカズカと動けないティアナへと近づき、何の躊躇いもなく残った手足をショットガンで貫いた。

倒れている間も、この状況を打破しようとしていたティアナだったが、時間が少な過ぎた。

このような場合の悪役は、大抵、お喋りをして時間をくれるものだが、今回は違ったようだ。

「……………」

流石のノーヴェも展開の早さに付いていけないようだ。

呆然と突っ立っている。

そんなノーヴェの足を濡らす液体。

ティアナから出てきた血液だ。

非常な現実がソコにあった。

「何で俺様が面識のねえガキを誘拐しなくちゃなんねえんだか……」

…まあ良い。集合場所に向かうとするか」

淡々と命令をこなし、男は行動不能となったティアナと共に消える。

呆然としていたノーヴェが意識を取り戻したのは、その直後のことだ。

「巨なる王、名はレギオン。我らが同胞にして王。我、女王、名はレー。レギオンでありながら人である」

最初は勝機があると思っていた。

確かに、相手は巨大な……まるで怪獣みたいな敵だけど、こっちにはヴォルテールがいる。

キャロだって、フリードだって、僕だって、まだ動ける。

向こうには大量のレギオンがいるけど、負けるって確信はないんだ。

幼い騎士の心情をたどたくしく再現するとしたら、こんな感じであらうか？

健気にも頑張る少年少女。

しかし、希望は裏切られることも十分にあり得る。

「虚しくも清しい。復讐の末路とは常に決まっている。虚無しかない。刹那の快感を得て、永劫の虚無を得る」

両手を上げ、綺麗な青空を眺めるレーの指先からは赤い鞭状の触手が出ている。

右指の先端、左指の先端、共に別々の者の血が滴っている。

片方は赤髪の槍使い。

片方はピンク髪の竜使い。

どちらも瀕死の状態であるが、息はまだある。

「群れなる同胞よ。そちらも上々と見た」

レーの視線の先には黒く巨大な物体が横たわっている。

だが、それはスバル達を飲み込んだ化け物ではない。

大量のレギオンがある物体に纏わり付いているのだ。

レーの一言で、纏わり付いていたレギオンの殆どが、その物体から離れる。

その正体は呆気ない。

瀕死のフリードリヒだ。

全身から血を流しており、身体はほぼ動かない

主を殺された思い込み、怒り狂う咆哮を口から出そうとするが、

既に喉を潰されている。

善戦はしたらしく、数十体のレギオンの死体が周囲に散らばっているが、今はどうでもいい。

レーは微笑み、未だに自分の触手の先端で貫かれて動けない二人の少年少女を白い竜の元に投げ付ける。

「我ら、槍使いと白き竜に恨み無し。されど、妨害は認可せず、殺害直前にまで至った」

今更、何の意味もない言葉を囁き、レーは振り返る。

そこにもまた、瀕死の竜が転がっていた。

周辺市街地をほぼ壊滅状態にし、それでも勝てなかった哀れな竜。

ヴォルテールは血みどろの身体に鞭打ち、必死に立とうとする。

動く度に、その身体から血が噴出す。

その必死さを見る度に、レーの中に嬉々とした感情が湧き起こる。

復讐は、復讐相手をあっさり殺してしまつては、先程のレーの言葉通りになる。

では、相手の大切な者を奪い、ゆっくりと時間をかけて殺したらどうなる？

最終的には『虚無』に襲われるが、一瞬で終わった『快感』は倍以上に膨れ上がるだろう。

レーは、今、正にソレを愉しんでいた。

立ち上がろうとするヴォルテールの身体を赤い触手が何本も貫く。流石にレーの物ではない。

それは巨大なレギオンから発せられた物だ。

同胞を殺された怒りから、目を赤に染め、顔先に当たる触覚部分から赤い触手を発生させた。

レーもまた同様に、赤い触手を指先から発生させた。

たったそれだけで、勝負がついてしまった。

高速かつ伸縮自在な触手は瞬く間にキャロ、エリオ、フリード、ヴォルテールを貫き、行動不能に追いやる。

二匹の竜はしぶとくも行動可能であったが、人間である二人にとって戦闘続行は不可能となった。

レーは鼻で笑い、残った二匹を痛めつけた。
何度も何度も。

途中から、同胞を殺された怒りなど消え、素直にこの二匹を痛めつけることに快感を覚えていたのは、当人すら知らないことだ。

そんな感じで残った二匹も今、息絶えようとしている。
恐らく、次の一撃で絶命するだろう。

そんな緊迫したシーンですら、レーとレギオンは淡白にこなした。
二匹の竜は断末魔の咆哮さえ残せず、主を置いて、先に逝く。

「最後の茶番へご案内」

レーは少年少女に指を差す。

すると、二人の少年少女と軍集団の女王の姿は蜃気楼の如く、消え去る。

残されたレギオン達の咆哮が晴天に木霊する。

彼らの姿もまた消え始めた。

ただ、光の粒子となっていく、という消え方だったが。

「コイツをぶっ壊して……………この船を止めるんだ……………!」

比較的、楽に動力炉に辿り着いたヴィータの表情には緊張と何処と無く安心感があった。

結局、奇襲なんて無かった。

念のために、動力炉に入る直前にも警戒したが、何にも問題は起きなかった。

自分に残された仕事は、この動力炉をぶっ壊すのみ。

そうすれば、船は止まり、あの狂人どもの企みも消せるハズ。確証は無いのだが、そんな気持ちがある。

「……………ん?」

グラフアイゼンを構え、何か可笑しいことに気付く。

「何で、この船を止めれば、あの狂人どもの企みを阻止出来るんだ……………? そもそも、この船は何のために飛行している? 何で、アタシは確証が無いのに、そんな気持ちを抱いた?」

思い起こせば、次々と疑問が湧いてくる。

そう、例えば……………等と考えようとした、瞬間であった。

「ぐっ!」

ヴィータの周囲を四つの数珠が囲み、黄土色の結界、バインドらしき物で動きを封じてしまった。

「だ、誰だっ!」

叫ぶヴィータに対し、入り口から静かに入ってくる男が一人。
四つの数珠を背後に浮遊させ、浮遊する輿に乗った全身真っ黒な
包帯男だ。

「よもや主のような短気が、我が術を多少でも破るとは……やは
り結界を張りながらの行動は厳しいらしい」

しゃがれた声を出し、男はヴィータの目の前までやってくる。
ヴィータは動こうと必死だが、四つの数珠から発せられる結界が
それを許さない。

「主の疑問は正解よ。この世界の全てのキャラクターは我が操って
いるに過ぎぬ」

「ハア………？ 何を言ってやがる………！」

ヴィータにとっては不可解な言葉だが、読者にとっては中々、衝
撃的な一言ではないだろうか。

このギョーブは、この世界の全てのキャラクターを操っていたの
だ。

これは驚きだ。

しかし、それはそれで様々な疑問が出てくる。

例えば「操れるなら、なのは達を操って、自分たちにとって有利な状況にしない？」とか

「そもそも、こんな戦いする意味ない」とか

「というか、アンタが今作のチートキャラかよ」とか

「最笑の断末魔って「お疲れさ〜ん。打ち上げは八時からだよ〜」だよね」とか

何か関係の無いものが混ざったことを謝罪します。

「初めてタネ明かしをする敵方が低脳そうな主とは。我も中々に不幸よな」

つまらなそうに呟くギョーブだが、ヴィータはそんな事情は知ったことではない。

先程の男の言葉から自分たちを含め、全ての人物は操られていたことを知ったヴィータは、それがハッキリかどうか確認するために話し出す。

「テメエ……………さっきの「キャラクターを操っている」とかいうのは、どういう意味だ……………？」

「あれは嘘だ、ということにしておけ。主のような短気には生涯、理解出来ぬ難題故」

「んなっ……………!!」

自分は馬鹿にされたらしい。

彼女の中に怒りが来訪するが、今は感情に流される時ではない。今のヴィータに出来ることは、相手の言動の本質を見極めることと隙を見て、反撃に出ることだけだ。

「主の考えていることはよく分かるぞ。我の隙を覗い、反撃に出る気であろう？　だが、無駄だ」

男は動力炉を眺めていたが、ヴィータに視線を戻し、指を差す。半分は当たっているが、半分は外れている。それだけのことだが、ヴィータは少し優位に立ったと思った。

「バーカ。半分間違っ………！？」

喋り終わる間もなく、ヴィータの後頭部に強い衝撃が走った。男の背後で待機していた数珠の内、一つがヴィータの後頭部に相当な勢いでぶつかったのだ。

「何故なら、主は間もなく死ぬからだ」

続けて、前方から別の数珠が頭に当たる。最後に残った二つが頭を押し潰すように左右から。

「ッ！！」

意識が朦朧とする状態でも、分かった。自分は死ぬのだと。

ヴィータは目を瞑り、主や仲間たちにお詫びをいれた。

「ごめん」と。

だが、二つの数珠はヴィータの頭部に直撃する寸前で止まった。

「……………」

中々、訪れない意識の陥落に違和感を覚え、目を開ける。
同時に、目の前のギョーブが不気味に喋る。

「頭蓋は割れたか？ 中身は零れ出でたか？ ヒヒツ…………死ぬと
いうのは冗談よ。主はこれから捕らわれの仲間の一人になって貰う」

ギョーブはそう告げ、ヴィータが喋り出すよりも前に、彼女をこ
の場から消してしまう。

その後、不気味な笑い声を響かせ、ヴィータの相棒であるグラ
ファイゼンを数珠で叩き割る。

晴れて八つに戻った数珠は、主の背後に回りながら浮遊する。
赤く光輝く動力炉を眺め、今作のチートキャラは歓喜を隠し、落
ち着いた声で述べる。

「この世界にも空いた。いや、飽いた」

「さて…………トーレさんにセツテさん。私は今から、貴女達に謝罪
しなければなりません」

悲しそうな眼をした天海はゆっくりと倒れている二人に近づいて

いく。

それに気付いた二人は気を失いかけつつも、敬愛する天海の登場に驚き、上半身を起こす。

「て、天海様………!? ど、どうして此処に………!?」

冷静沈着なトーレや感情が無いように見えるセツテでさえ、天海が此処にいる、という事実に関係を乱す。

天海はそんなことはどうでも良いような表情で二人に近寄り、まづはトーレの側で膝を曲げ、上半身を抱き起こす。

「あっ………」

トーレが照れるなど、キャラ崩壊、否、世界崩壊並みの驚きだが、此処は省略する。

「間も無く、この世界は終わります。故に、私自身の手で、可愛い貴女達を殺さなくてはなりません」

いつもの狂気が完全に消え、慈愛、慈悲に満ちた声色で娘たちに冷酷な事実を突きつける。

それでも、彼の造り出した娘達は全くの動揺を見せず、目を閉じ、静かに答えた。

「それが天海様の望みであれば、私は従うまでです」

「私입니다」

天海の背後でセツテも答える。

その答えを聞いた天海の心に、先程、殺害したウーノに抱いた同

じ気持ちが湧き上がる。

「貴女達もですか……………本当に、私は果報者です」

自らの恵まれた環境に感謝しつつ、天海はウーノと同じように、彼女たちにも、最後の願いを聞く。

「では……………最後に願い事を一つ、叶えて差し上げましょう。今の私に出来ることであれば……………ですが」

「願い……………ですか……………いえ、こうして天海様に造られ、育てられ、お言葉をかけて貰った……………それだけで私は満足です」

「はい……………私も、です。天海様に殺人の快楽を教えて頂き、姐さん達と過ごした日々……………もう私の願いは叶っていたも同然です」

二人の何と凄まじい忠誠心か。

いや、これは純粹な愛情といえるのではないか。

「……………分かりました。では……………」

天海はトーレを寝かし、頭を軽く撫で、続いてセツテの元へ。

同じようにセツテも寝かせ、頭を撫でる。

「それでは……………御願います。天海様」

「御願います」

フェイトとの闘いで既に動かない身体を無理に動かした反動か。二人は寝た状態で天海の処刑を待つ。

「…………さようなら。トーレ」

躊躇うことは失礼に値しただろう。

天海の鎌はトーレの首を切断する。

ただ、頭は飛ばないように綺麗に素早く、美しく。

「…………さようなら。セツテ」

同じようにセツテの頭部を首から切り離す。

綺麗に目を閉じたままの二人の顔は実に美しかった。

「ああ…………哀しい哀しい。私は哀しい……………」

トボトボと鎌を引き摺りながら、天海は次の娘達の場所に向かう。
その前に、自分の一撃で致命傷を追ったフェイトを発見する。

「くっ……………！」

痛みを堪えながら、這い蹲るフェイト。

天海は、そんなフェイトに近づき、鎌の先端を向ける。

「貴女は、彼との約束のため、ノア内に飛んで頂きますよ」

直後、フェイトが反応する暇もなく、彼女はノア内部の聖王の間に飛ばされたのであった。

残されたのはバルディッシュのみ。

「……………」

天海が自身も消える直前に、その鎌でバルディッシュを一刀両断にしたことを付け加えておく。

「ゴミが！ カスが！ プログラムが！ あ、それは人の事言えないな……訂正、ゴミが！ カスが！ ポニーテールが！ いや、別に悪口じゃないな……実はエリオ狙いな副隊長？ いんや、これは方向性が間違っている……何ぞー、どないせーちゅーんじゃー……話が逸れた……やり直し、ゴミが！ カスが！ さっさと消えろ！」

地上本部に侵入した狂人は異常な速度で内部をたった一人で制圧。すぐさまレジアス・ゲイズの居る部屋まで辿りつき、レジアスが話し出す前に殺害。

副官であり、彼の娘であったオーリスも躊躇い無く殺害した。

後にリインとのユニゾンを保ったままのシグナムが到着。

部屋の中の惨劇を見るや否や、狂人との戦闘に挑んだのだが……

「呆気なく小生にフルボッコにされるのであった。南無三」

狂人の武器である指先に仕込んだ刀身により、手足を数回貫かれ、行動を封じられた。

レヴァンティンが扱えないのであれば、シグナムの戦闘力は大幅に落ちる。

否、正確には既にレヴァンティンは破壊されてしまつて、使い物にならない、というのが正しかったか。

まだユニゾンは保てているが、解除されるのは時間の問題であろう。

「ぐう………！」

痛みを堪えながらも、狂人を睨みつける。

その視線が未だに希望を諦めていないものであり、狂人に不快感を与えるには十分であつた。

「何だ、その目は！ 希望を捨てろ！ もう全てが終わる！ アンタも！ 仲間も！ 小生も！ 小生の仲間も！ そこで変装している数の子さんも！」

そこでようやく、部屋の奥で変身したままのドゥーエに出番が回る。

流石に、この状況で話題を振られるとは思っていなかったために、彼女はビクツと身体を震わす。

「ええ………此処で話題を振るの………」

やや呆れ顔。

何気にこの場に対する適応能力が高い人物である。

しかし、その適応の方向性が間違っているが。

「まあ、貴女に関しては天海が片付けてくれるでしょうから、小生はとりあえずスルスルノデス！ さて………では、貴女を最後の闘いの間にご招待して、小生も行きますかね、とか言うと、先程まで暴言は何だったのか、という話になるけど、そこそ皆様のスル

「スキルの本領発揮ですよ」

まるでビンタでシグナムの頬を叩くように、嬉々として刀身を振るう。

シグナムの頬には深い切り傷が出来、直後、腹部に鈍重な痛みがやって来る。

「がっ……………！」

狂人の休ませる暇がなく、繰り出された蹴り。

それはリインとのユニゾンを解除させるには、十分な威力を誇っていた。

「あう！」

ユニゾンを解除されたリインがシグナムから飛び出して来たのと同時に、狂人は二人に指を差す。

たったそれだけの動作で、二人の姿は一瞬にして消え、残ったのは二つの死体と狂人とドゥーエだけとなった。

「では、お疲れ様です。もう会う事もないでしょう」

作りかけの笑顔でドゥーエに軽く手を振り、狂人も姿を消す。

そして空間にようやく静寂が訪れる。

「……………出番、少ないよね。私……………」

仕方なく、天海が来るらしいので二人の死体を片付けることにしたドゥーエ。

といっても、面倒なので後方の窓を蹴り破り、そこから死体を投げただけだが。

「さてと……………本当に天海様、来るのかな……………でも、久しぶりだしなあ……………一杯、甘えちゃおうかなあ……………」

口から垂れる涎を右腕で拭きながら、ドゥーエは妄想の世界に旅立っていった。

「くっ……………防御陣形に！」

飛行する巨大戦艦ノア。

狂ったように射出口から擬似レギオンを吐き出し、次々と魔道師たちを殺していく姿はさながら地獄絵図。

血飛沫、絶叫、魔弾の暴発、混乱。

ありとあらゆる悲劇がここに集まっている。

空でも地上でも関係ない。

あるのは純粹な絶望のみだ。

これに歓喜せず、何とする。

健気にも頑張っている少女がいるようだが……………少々、目障りになってきた。

それにそろそろ集合時間だ。

彼女も連れて行こうか。

そう………守護騎士の一人、私と同じ金髪の彼女、そして、同じく守護騎士の畜生のようにね。

「八神部隊長。そろそろお時間かと」

一人の魔道師がはやての背後から近づき、訳の分からないことを言い始める。

混乱の極みの真っ只中だったが、はやての周囲は比較的、安全であることから、彼女はその言葉に耳を傾けた。

だがそれでも、魔道師の言っている意味はさっぱりである。

「は？ 何やて？」

つつい間抜けな声を出し、首だけを振り返りながら聞き返してしまう。

仕方がないことだろう。

その言葉の意味は、彼や彼の仲間しか知らないのだから。

「ですから………」

そう言葉を溜めた後、魔道師の姿にノイズがかかる。

「ッ!？」

突然の光景に息を呑むはやてだが、すぐさま戦闘態勢には入れない。

何故ならば、魔道師だった者がはやてより早く、彼女の首を捕まえたからだ。

「フィナーレに……………かな」

魔道師の姿からノイズが完全に消え去る。

そこにいたのは魔道師ではなく、一人の青年。

まるで西洋の吸血鬼が着ているような服装にマントを羽織っている。

金髪に閉じられた目。

「あ……………あんたは……………！」

八神はやては彼に直接は合っていないが、画面越しにその姿を見ていた。

アグスタでシグナムに重傷を負わせたが、その後、なのはに敗北した人物。

「君との直接対談は前々回以来かな？」

彼の首を捕まえている手に力が籠る。

その勢いは人間を殺さず、意識を落とさせず、しかし反撃は出来ない程度に加減されている。

「幕には君たち全員を招待したいとのことなのでね。君と不屈のエース以外の主要人物は、もう全て席に着いているよ？ 勿論、君の可愛い騎士達もね」

はやてがその言葉を聞き返すよりも前に、彼とはやてはその場から姿を消した。

指揮官が消えたことに魔道師たちは気付かない。

いや、気付くことが出来ないのだろう。

「くそっ…………行かなきゃ…………なんねえんだよっ…………！」

ボロボロの身体に鞭打ちながら、ヴァイスは愛機の元へと歩いて
いた。

途中、何度も膝を付きながらも、彼は、自分の成すべきことを成
すために進んでいた。

自分より少し早く部屋を出て行ったザフィーラは言っていた「や
らねばならぬことがある」と。

そうだ、自分もやらなくてはならないんだ。
ヴァイスの思いは一層強くなる。

そうして、壁伝いに進みながら、また一步踏み出した時だ。

サクッ

小刻みの良い音がした。

「あ……………」

視界が可笑しいことになる。
グラリと揺れ、後ろに向かって、床に落ちる。

だが、不思議なのは

何故、自分の背中が見えているのか、ということだ。

「……………」

自分の身体が前のめりに倒れ、後方に転がった首はヴァイスを殺害した張本人を眺めている。

宵闇の羽の欠片を舞わせながら、帽子のような兜を目元まで深く被った男は腕組みをしながら、獲物だった者の首を眺めている。

首から吹き出た血飛沫が床一面を濡らし始めた時には、既に無口な暗殺者の姿は無かった。

あるのはヴァイスだった死体だけ。

でも、誰も此処には来ない。

来たとしても反応しない。

無視を決め込む。

何故か？

既に記してある。

第二十一話「おや、死んだ」(前書き)

今回はあるキャラがキャラ崩壊を起こしております。
ご注意ください。

そして申し訳ありません。

第二十一話「おや、死んだ」

「そう……………ですか……………」

暗く巨大な廊下。

残された光は乏しく輝くのみ、その場所で、会話が行われている。

片方は女性であり、廊下に寝ている。

その身体に目立つ外傷こそ無いものの、彼女の全身は痛みによって動くことはない。

片方は銀色の長髪を持つ男性。

両手に握られた鎌の刃は赤く滴る血液を飲み、その力を蓄えているようにも見える。

男性の目はとても虚しく澄んでおり、特殊なマスクによって隠された口元には哀愁が浮かんでいた。

「はい。ディエチさん。世界崩壊前に、親である私自らが可愛い娘たちを葬ってあげようと思ひまして」

辛辣な意味合いを含んだ言葉は、一つ一つ、愛娘の心に響いていく。

限らない虚しさ。

愉悦に感じられる殺しも、今の彼にとっては虚しくなる要因の一つでしかない。

「……………ですが、その前に一つだけ、御願いを叶えてあげようと、

考えていましてね」

「……………御願ひ……………ですか……………?」

娘の話す息遣いは非常に苦しいものである。

聞いている方が、話すのを止めてくれ、と懇願したくなるほどだ。しかし、彼女にとっては親と話す最後の機会。

この程度の痛みなど、認識するに値しないのだ。

「そうです。今の私に叶えられる範囲に限りますけど……………ね」

「……………」

男性の言葉にディエチは思考を巡らす。

今の自分が望む事は何なのだろうか、と。

よくよく振り返れば、別に自分のしたいことなど無い。

自分は常に天海様の役に立つためだけに行動してきた。

生み出された理由も同様。

ならば、何も無いのが正解なのだろうか。

だが、自分が死ぬ間際くらい、せめて……………

「じゃあ……………」

「はい」

「優しい……………いつもの優しい目で……………優しい表情で……………私を、私を殺してください……………」

「……………承知しました」

娘の言葉は、天海の内部に不覚まで突き刺さる。

いつも娘たちに向けていた偽りに近い優しさ。

しかし、演技はいつしか、本物の情へと移り変わり、彼の心情を知らず知らずの内に支配していた。

それが、この終わり間近になって、ようやく気付けた。

自分は心の底から、娘達を愛していたのだと。

だからこそ、表情が哀しいものになり、娘達にまで見破られてしまっていたようだ。

親として、これは恥ずかしい。

「では……………」

「はい……………」

自身の親が再び、自分達に向けていた優しい目と表情を取り戻したことを確認した後、ディエチは静かに、澄んだ表情で瞼を閉じる。そこに後悔などない。

「……………さようなら。ディエチ」

天海の鎌が彼女の首を切断する。
彼女の生命はそれだけで絶たれた。

それでも、ディエチの顔は幸せな笑みしか浮かんでいなかった。

「……………さて、次は……………」

気を取り直そうとするが、やはりその表情には哀しさが浮かんでいる。

決して消せない後悔と哀しみを背負いながらも、天海は飛んだように、姿を消し、次の愛娘の下へと飛ぶ。

此処に至るまで、既に11人の命を止めた。

ノア内部にいた「クアットロ」「チンク」「ディエチ」

機動六課のフォワード陣と対峙していた「ノーヴェ」「ウェンディ」

自身のアジトにて捕獲されていた「セイン」

そして起動する前だった「ディード」と「オットー」の二人も丁重に黄泉に誘った。

残るはただ一人。

「それから優しく抱きしめて貰って……………それからまた子作りなんかしちゃって……………天海様ってば、優しかったり激しかったりするから……………」

妄想激しい乙女、すっかりキャラが代わった「ドゥーエ」は両手を頬に当て、自らの作った妄想の世界に旅立っていた。

そんな彼女の背後から、音も無く現れる男性。

彼女の産みの親にして死神、天海。

本当に慈しみに溢れた視線を愛娘に向け、彼は彼女に言葉をかける。

「ドゥーエさん」

「ああ……遂に天海様の声までしっかり再生されるう……って、天海様っ!？」

2、3歩、後ろに飛び退きながら、彼女は親の出現に戸惑い、慌てる。

血痕が残っており、血の臭いのする、この場所こそ、殺人鬼の親子に相応しい再開場所。

「お久しぶりです。彼らに頼まれていた『管理局の洗脳の効果確認』……長年に渡り、お疲れ様でした」

「い、いえいえ! 天海様の命令なら、何だって出来ますから!」

変身能力を有する、ドゥーエが管理局に潜り込んでいた理由。

それは、ギョーブがかけた催眠が途切れていないかを確かめる、というものであった。

彼女一人にやらせるのは非効率だが、これはゼロの策でもあった。

天海組とは現状は仲良くやっている。

だが、何時、天海組が裏切るか分からない。

そのために戦力を分散させておく必要があったのだ。

とはいえ、そんなことしなくても、この天海は既にこの世界に飽きているため、裏切ることなど絶対にしなかったのだが。

そもそも分散させるにしても非効率な訳だが。

最悪（裏切り）に備えての布石、といったところだろうか。

「ありがとうございます。ドゥーエさんは本当に優しいですね」

目を細め、笑みを浮かべる天海の顔を見たドゥーエは、その顔を真っ赤に紅潮させていく。

「そ、そそっ、そんな！ わ、私なんてまだまだ……あわわ」

極度の緊張により、両手を意味無く上下させ、左右に身体を動かすドゥーエはさながら、壊れた機械人形だろうか。

いや、例えになっていないか。

「ククク……本当にドゥーエさんは可愛らしい方だ……そんな貴方を今から殺してしまうなど、本当に哀しい……」

「か、可愛いだなんて……！ ま、まだチンクとかの方が可愛い………って、え？ 殺す？」

天海の言葉に気付いたのか、ドゥーエの顔から赤が消え、元の肌色に戻ってくる。

不思議そうに首を傾げた姿は、本当に愛くるしい。

「はい。間も無く世界が終わりを迎えます。その前に私自身の手で、可愛い可愛い娘たちに止めを刺してあげようと思ひましてね………ちなみにドゥーエさんで最後ですよ」

「…………ああ、そうなんですか…………それは残念ですね…………最後
くらい、妹たちに会いたかったですけど……………」

少し首を傾け、床を眺める。

とはいえ、殺人鬼に育てられた娘。

彼女にとって「死」は日常であるため、妹たちの死も、そんなに
哀しい出来事ではなかった。

それほどまでに、彼女は慣れてしまっていた。

「死」というものに。

「…………すみません」

対する天海は罪悪感で胸が一杯になっている。

普段、人を殺す時は全く心など痛まない、この男が、自分の娘た
ちを殺した時は胸が痛むという。

何という非情さ。

何という我尽。

とはいえ、この我尽こそ、彼に残された最後の「人間らしさ」だ
ったのかもしれない。

生み出された存在だが、彼は人の形をした紛れも無い「人」であ
った。

「あ、い、いえいえ！ 皆、天海様に殺されたんだったら、本望で
すよ！ きつと！」

「…………皆さん、最後はそう言ってくださいました。本当に私は果
報者です」

そう言い、手に掛けた娘たちの最後の表情を思い浮かべる天海。

誰もが皆、幸せな笑みを浮かべ、笑って死んでいった。
悔いなど何もない。

最上の幸せを得た表情で…………

「……………それですね、最後にドゥーエさんの願いを聞いてから、
殺して差し上げようと思ひまして」

感傷に浸るのを止め、天海は意識を現実に戻す。

今は最後に残った愛娘に引導を渡してあげるのが、親として出来る、最後の最良の行為だと信じて。

「私の願い……………ですか？」

「はい。今の私が叶えて差し上げられる範囲に限りますが……………」

「えっと……………そうですねえ……………」

左手の人差し指を顎に当て、思案するドゥーエ。

彼女の脳内には幾人もの小さい彼女が大会議を開いたところであった。

ミニドゥーエA「ど、どうする！？ 最後の御願いだって！」

ミニドゥーエB「な、泣く!? 泣くのは!?!」

ミニドゥーエC「落ち着いてください、とミニドゥーエCはミニドゥーエBを諭します」

ミニドゥーエD「あばばばばばば」

ミニドゥーエE「ええい! 静まれ! 静まれってばあ!」

ミニドゥーエF「更に強靱になった私!」

ミニドゥーエA「すう……………はあ……………よし、落ち着いた」

ミニドゥーエA「まずは意見を出し合おう」

ミニドゥーエB「だ、だから時間が無いんだってばよ!」

ミニドゥーエF「んん!? 間違ったかな?」

ミニドゥーエD「ミニドゥーエE、ミニドゥーエE。『Eんちよ』
って呼んでもいい?」

ミニドゥーエE「もう訳が分からないよ!」

ミニドゥーエC「皆さん、もう時間がありません、とミニドゥーエCは皆さんを焦らせます」

ミニドゥーエA「あーもう! よし! 抱いてもらおう!」

ミニドゥーエB「賛成」

ミニドゥーエC「賛成、とミニドゥーエCは歓喜して踊ります」

ミニドゥーエD「賛成」

ミニドゥーエE「さ、賛成だよぉ」

ミニドゥーエF「うわらば」

ミニドゥーエA「可決!!」

「じゃあ抱いてもらうというのは……………」

「……………どちらの意味で？」

やや微妙な空気が流れた後、ドゥーエは深呼吸を一回し、呼吸を整える。

そうして決意を固めた目で天海の目を見つめ、発言する。

「抱きしめてもらう方で」

「……………承知しました」

天海は鎌をその場に置き、両手を広げ、ドゥーエへと近づく。
しかし、その前にドゥーエは天海の胸に飛びつくように走りこみ、
力一杯抱きしめた。

「…………天海様あ…………哀しいけど、嬉しいよお……………」

「…………よしよし。よく頑張りましたね。ドゥーエ。偉いですよ」

「うう……………」

長年、愛すべき親や姉妹から離れて生活していた彼女。
周りは自らの権力を維持しようと躍起になり、他人をいかに貶め
るか、金をどう使うかばかりのみを思案する者達ばかり。

妬み、恨み、憎しみ。

全てが、時には彼女にぶつけられた。

それでも、彼女が「異常」という「正常」でいられたのは、一重
に天海と妹達のお陰である。

彼の存在、妹たちの存在があったからこそ、今の彼女が形成され
ている。

人の暗い部分に触れながらも、彼女が違う方向に壊れなかったの
は、そのためだ。

そうして長年、塞き止めていた感情の一つが「哀しみ」だ。

人前で決して涙を見せなかった彼女が、とうとう涙を流した。

愛している彼に出会えたから、彼女は安心し、心の壁を消し、感
情の思うがままに行動しているのだ。

自然と言葉は幼くなり、彼女の抱き締める力はますます強くなる
一方。

天海はそんな彼女の頭を抱き締めたままで、優しく撫で、精神を落ち着かせる。

「ひぐっ……………えぐっ……………天海様あ……………！」

「良いですよ。貴女は今、泣いていい。泣いていいんです」

「うっ……………うううー！！！」

そうして抱き合ったまま、数分が経過し、ようやくドゥーエは泣き止み、天海から離れた。

天海は優しく微笑み、鎌を拾うと、彼女の首元に刃を這わす。

「……………ありがとうございます。天海様」

「……………いえ。礼を言うのはこちらです。ありがとうございます」

泣いた影響か、目が少々、充血しているドゥーエはそのまま目を閉じ、幸せな笑みを浮かべる。

今まで殺してきた娘達のように。

「……………最後に一言だけ、いいですか？」

「はい……………どうぞ」

「愛しています。天海様。今までも、これからもずっと」

「ッ……………私ですよ。ドゥーエ」

直後、鮮血が床に舞い、彼女の頭が笑顔のまま転がる。
身体は後方に倒れ、首からは血と機械片が散らばる。

「……………ですが、これからは私のような者を愛してはいけませんよ」

遂に最後の愛娘も殺し終えた天海。

残された彼は、ゆっくりと碎けた窓の側へと移動する。

視線の先には浮かぶ巨大な箱舟。

今、まさに、あの中で最終決戦……………といえは見てくれは良いだろうか。

実際には一方的な惨殺が繰り返されているのだろう。

それが終われば、世界は完全に崩壊する。

「……………では、地獄にて物語の主人公さんを待つとしますか」

実にあっさりとした一言を述べ、天海は自らの首筋に器用に刃を向ける。

あとは力を込め、手を動かすだけで自分は死ぬ。

殺人鬼である彼にとって、自分を殺すなど容易なことである。

故に、その幕引きは本当にあっさりであった。

天海は自らの首を撥ね、その命を絶った。

こうして残った原作にはいないイレギュラーキャラ達は一つの現場に集まった。

ノア内部という、終焉の地に。

第二十一話「おや、死んだ」(後書き)

やけに軽い内容に……………

すみません。

本当は他のナンバーズ全員とのやり取りも書いたのですが、何せ、それだけでまるまる一話ってどうなのさ……………ってことで、大幅にカットしました。

本当にすみません……………

一応、書いてはあるので、もし意見等頂きたら、追加しようと考えております。

今話のご愛読、誠にありがとうございました。

第二十二話「主人公&ゼロ with 死神少女」

「なのはっ!!」

チンクを退け、爆発音と狂気の笑い声が響く聖王の間へと飛び込んできた獲物。

いまやこの世界の最悪にして全ての原点、神崎修。

彼の馬鹿みたいな正義感と欲望が悲劇を招き、自業自得な結果へと誘う。

愚か。愚直。愚昧。愚昧。

「ようやく来たか……ようこそ。この素晴らしき惨殺空間へ」

両手を広げ、オドオドしく肩をすくめ、招待客を歓迎するゼロ。隣では死神少女が右手で口元を隠しながら、修を見て、クスクス笑っている。

部屋は壁や床にクレーターが所々に出来ており、先程までの戦闘の凄さを語っている。

「なっ………!?!」

まず修の目の前に広がった光景を一言で例えるのなら、美しいだろう。

七色に輝き、浮遊するクリスタルに閉じ込められている機動六課の面々。

各々、意識を失っており、バリアジャケットがボロボロのことから、相当の傷を負っていることが確認出来る。

と、思いきや、見た感じは全く傷ついていない。

「皆………!?!」

驚愕する修に対し、お約束の如く、ゼロが根絶丁寧に説明を加えてくれる。

「コイツらは人質だ。何、全員、気絶しているだけだ」

もう何か今更グダグダ説明するのも面倒なのか、ゼロは要約する。

「テメエが勝てば、俺らの負け。世界を変え、コイツらと共に未来に進みな」

「ただし………テメエが負ければ、コイツにテメエを殺させて、全て仕舞いだ」

ゼロの右手は死神少女の頭をポンポンと優しく叩く。

少女は嬉しそうに眼を細め、ゼロの右手を両手で掴む。

「さて………いつまでも辛気臭いキャラは止めだ………俺は本性剥き出しの下卑たキャラじゃねえとなあ………クククッ! ラストはやっぱタイマンだな。時間無制限、一本勝負のデスマアアッチ!!!」

修に一步步、近づきながら、被っていた帽子を投げ捨て、スーツの上着を脱ぎ捨てる。

その投げ捨てた帽子やら上着をちゃんと少女が回収していたが。

「ルールは自由！ さあ、どうするよ？」

舌を出し、ヘラヘラと笑うゼロに対し、修は鋭い目付きで問う。

「……………どういう風の吹き回しだ？ お前がタイマンとか」

ゼロが悪魔で、そのキャラを貫くというのなら、コチラも最初のキャラを貫き通す。

これが礼儀というものであろう。

そう考えた修は思考すら、最初の状態に戻してく。

仲間を人質に捕らわれるという、怒りを増幅させる行為に、修の怒りは頂点に達する直前だ。

それでも、怒りに身を任せられないのは理由がある。

このゼロという男の本性を知っているからだ。

ゼロという人物は普段は物腰柔らかい紳士的な態度をしている。

しかし、その正体は暴力と暴言の塊だ。

どんな汚い手を使ってでも勝とうとする、典型的な外道だ。

そんな男が正々堂々と闘う訳がない。

罠か、策があるのか。

「もう力も無いであろうテメェに余裕ぶっこいて考え抜いた結果がこれだ。それにだ、考えてどうする？ 何なら、此处でアイツに殺させてやろうか？」

顔を振り向かず、親指だけを少女に向ける。

指を指された少女は見ているコチラが気分の悪くなりそうな笑みを浮かべる。

「くっ……………」

あの少女の恐ろしさは自分が一番よく知っている。

確かに、あの少女とは勝負にすらならないだろう。

向こうは睨むだけで、コチラの動きを封じられるのだから。

「これは最後のチャンスだぜ？　オラオラ、早くかかってこいよ」

陽気に口笛を吹かせながら、ボクシングポーズを取る。

身体を奇妙に左右に揺らし、素人丸出しのシャドーボクシングを開始している姿は、中々に滑稽である。

「……………分かった」

修は覚悟を決め、己の拳に力を込める。

それから、クリスタルに閉じ込められている機動六課の面々に視線を向ける。

よく見れば、先程まで、此处で闘っていたであろう、高町なのは既に姿が戻っているヴィヴィオまで閉じ込められていた。

きつと、闘いが終わった直後に、ゼロに襲撃されたのだろう。

ますます許せないという感情が修の中に湧き上がる。

「お前を倒し、皆を返して貰う！　それから世界を変えて、ハッピーエンドだ！」

「やれるもんなら……………やってみなあ！！」

先手必勝。

修は極限まで強化した身体能力を持って、ゼロの懐に入り込もうとする。

「ルールは自由って言ったよなあ！」

そうはさせまいと、ゼロの攻撃手段である黒い触手状の手が床から数本、出現する。

手は各自、修の四肢を捕らえようと腕を伸ばすが、今の修を捕らえることは出来ない。

それどころか、修の残り僅かな「妄想具現化」によって、その存在を消滅させられてしまう。

「んなっ!?!」

何度も見てきた能力故に、驚く必要は全く無いのだが、ゼロはあえて驚いてみせる。

何と言う道化。

「喰らえっ!?!」

懐に入った、修の渾身の右ストレートがゼロの腹部に直撃する。わざと驚いた動作をしたせいか、ゼロは普通に攻撃を受けてしまう。

「ゴッ…………グハァッ……………!!」

上半身が前のめりとなり、修の背中に向かって吐血が繰り出される。

服に付く、怨敵の血に怯むことなく、修は右手を引っ込め、右足を軸とし、左足で蹴りを繰り出す。

まだ攻撃を受けた硬直を解除していないゼロにとって、中々厳しい、強烈な追加攻撃である。

「アガッ!？」

成す術もなく、後方に吹き飛び、そのまま仰向けに倒れこむ。

それを見ていた死神少女は流石に身体をビクッと震わせ、オロオロと左右に首を振る。

「……………今の攻撃でお前の黒い手は封じた」

攻撃の姿勢を全く解かない修の一言。

彼は今の攻撃の際にゼロの能力を封じたらしい。

もう残り少ないハズの妄想具現化だが、その威力は凄まじい。

「……………ちょ、調子にのんなや……………クソガキィ……………!!」

吐血した際、口に付いた血を右袖でふき取りながら、無様に立ち上がる。

惨め、愚か以外に形容しようがない姿は真の滑稽だ。

三下も同然の台詞が、彼の愚かさをより一層、際立てる。

「殺す……………! 跡形も無く! 粉々に! 影も形も! 全て残さずによお!!」

狂気に満ちた瞳は怒りに染められ、たった二撃でボロボロになった身体をフル稼働させ、ゼロは前方の修に向かって、獣の如く、飛び掛る。

「ッ！」

その人を超えた速度で向かってくるゼロに多少の驚きは示したものの、まだ神埼修が圧倒的に有利である。

顔を狙って繰り出された右手を受け止め、そのまま人の関節としてはあらぬ方向に捻じ曲げる。

「ギッ!?」

「これは今回の事件に巻き込まれた市民の分」

何をいきなり言い出すのか、という疑問を投げかけなくなる言葉だったが、修はすぐさま次の行動に移っていた。

空いた片方の手でゼロの首を掴み、地面に身体を叩き付ける。

「グピャア!!」

「これは襲撃の時に死んだピエールの分」

掴んでいた右手を離し、拳を作り、ゼロの顔面に殴りつける。

「ンブッ!!」

「これは巻き込まれ、傷を負った機動六課、皆の分」

地面に強制的に寝転ばされている状態のゼロの頭を思いっきり蹴

り上げ、空中へと運ぶ。

「……………ッッ！！」

「そしてこれが……………！！」

修も空中へと飛び、ゼロの真上へと移動する。

構えた右手に全ての妄想具現化の力と自分自身の力、全てを注ぎ込む。

溢れ出る力が修の右手に宿り、金色のオーラを放っている。

もう目を開くのにも痛みを伴うゼロでも、その輝かしさだけは、しっかりと視認出来た。

「ま、待て……………！！」

力なく声を振り絞るが、もう遅い。

「俺の怒りの分だああああああ！！」

重力＋妄想具現化＋超人的力という三重にも及ぶ力を込めた拳をゼロの顔面にブチ当てる。

瞬間、ゼロの顔は醜く変形し、叫び声すらあげる間もなく、床に叩きつけられる。

床には部屋に対して大きめのクレーターが生成され、衝撃が風となり、部屋に居た死神少女を埃と共に吹き飛ばす。

「……………終わった……………か？」

無事に床に着地し、飛び散る埃が止むのを待つ。

その間に変わったことは一切、無かった。

クリスタルは浮遊したまま無事だし、死神少女は壁に頭をぶつけたのか、目を回している。

そして埃が完全に止んだ。

「みたいだな……………」

修の目の前に出来ているクレーター。

その中央には何とか原型を保っている顔をしたゼロが倒れている。

「何か、呆気ない気もするけど……………これで全部、終わったことになるんだよね……………」

誰に問うでもない、自分自身への問いかけ。

勿論、答えなど出てくる訳がない。

とりあえず今は、クリスタルの中に居る仲間を助けなければ。その後、この船のエネルギーを使って、力を補充。

最後に世界そのものを変える。
そう思い、修は動き出そうとした。

「はい。お疲れ様でした」

「え？」

一瞬。

修の両脚は突如、足元から出現した黒い手によって、根こそぎ持っていかれた。

その場に倒れこむ修。

彼には、もう立つ手段など残されていない。

だが、彼の両脚の付け根から血は出ていない。

「え……………？ え？」

痛みもない。

不思議である。

「満足したかな？ 修君。ちっと手加減が下手過ぎて「わぁ、超展開。悪役弱くね？ てかキャラ変わってね？」という状態になっちまったが、まあまあ、そこは置いとこうか」

声の主は修の目の前に現れた。

クレーターの中央から、ニコニコとした笑みを浮かべて。

「は……………？ う、嘘だろ……………？」

絶望より前に混乱が修の脳みそに襲いかかった。
それほど、彼はまだ正気を保っているのである。

「顔もあんなにボコボコしてくれて。ちっと痛かったなー。まあ、仕方ないよね？ 君の最後だもん。願いくらいは叶えてあげないと」

顔はすっかり元通り。

それどころか、服も新品同様。

投げ捨てたハズの上着や帽子まで着ている始末。

「もう殺して良イの？ 茶番ハ終わッたノ？」

トコトコと背後から、気を失っていたフリをしていた死神少女が駆けて来て、ゼロの背中に抱きつく。

ゼロは少女を自分の前面に持って来て、抱っこした状態で少女に話す。

「もうちょっとだけ待ってくださいね。あと種明かししたら、殺して良いですからね」

「ンユ〜♪」

ゼロに頭を撫でられ、上機嫌に眼を細める。

「さて、それじゃ、皆さん、出てきて下さい」

その言葉の後、修の頭は完全にパニックになる。

「やれ見たか。大晴天がやってくる」

「実に三流以下の芝居だったよ。君の演技は」

「ぼくはよかったと思うけどな」

「素晴らしき哉。我らが同胞も、此方の演技、実に最低と評している」

「お前……まだ俺の列車の時の方が上手かったぞ」

「……………」

「神は言っている————『此处で笑うべきではない———』」
と

「そ……………んな……………」

瞬時に、修の周りに現れたのは、かつて倒した存在達。

黒いヘルメットを被った暴漢。

無口な暗殺者。

舞台監督のような男性。

赤黒い奇妙な化け物。

まだ倒していない奴らの存在は不安だったが、何故、死んだハズの奴らまで生きている？

もう修の頭では理解出来ない。

説明がなければ、現状では理解出来ない。

「では、次回に説明しましょう。最終回ですがね。説明会になりますよ」

最終話「初死シュウ」

現状を把握してみよう。

飛行する巨大戦艦「ノア」

その周囲の魔道師たちは攻撃を止め、光沢の無い瞳で戦艦を眺めるのみ。

否、光沢が無いのは、今、この世界に存在する全ての人間に言えることか。

尚も上昇する戦艦の中で聖王が座すると言われている部屋がある。名前は「聖王の間」

この間で色鮮やかなクリスタルに閉じ込められている人物たちがいる。

「機動六課」と呼ばれる者たちだ。

その中でも主戦力となる者たちが意識を奪われ、閉じ込められている。

そんな彼らの側には実に個性が強そうな人物が数人、元気な姿で並んでいる。

数人は既に消滅したと思われていたハズの存在もソコに居た。

その中で、ニコニコした笑みを浮かべ、少女を抱っこした青年が嬉しそうに語り始める。

「いやはや、実はですねえ。貴方に言った『世界を変えられる』と
いうのは嘘でして」

「……………は？」

一瞬、修の身体から精神が消えた。
当然だ。

今まであった、自分の希望が嘘などと言われたのだから。

「申し訳ないですね。こうでもしないと、貴方、全力で闘わないで
しょう？ 全く、死神少女が完成したら、すぐに殺しても良かった
のですが、何分、愚弟の最後の闘い。恰好良く決めさせてあげたか
ったものですから」

「な、何……………？」

全ては嘘だったという過酷な現実。
だがしかし、とりあえずだ。

今、聞こえた言葉の中で、一つだけ非常に気になるものがあった。

「愚弟……………？」

「そう。私ことゼロは貴方に殺された兄貴ですよ？ 貴方の死後、この世界に身内が責任を取れという形で呼び出されましてね。全く。死んでも身内に迷惑をかけるとは、どれだけ屑なのだけ」

「え……………は……………う、嘘……………だろ？」

驚愕、驚愕、また驚愕。

もう脳味噌が理解できる範囲を超えている。
もうやめて、修の脳味噌の処理能力は0よ。
と、言ってあげたくなる場面である。

「事実です。後、彼らが生きている理由ですね。コレは簡単。彼らは別に死んではいませんよ？」

「な……………えっ……………？」

もう驚き過ぎで、処理能力の一片も動いていないであろう、神崎修の脳味噌に次々と投下される真実という名の毒。

脳を確実に侵していく毒は、既に修の理解力を完全に壊している。

「では逆に聞きますが、『何故、貴方は彼らが死んだ』と思ったのですか？」

そんな状況にも関わらず、質問をしてくるゼロはきつと鬼畜に違いない。

と言いたいところだが、死んでからも身内の尻拭いをしなければならぬ身としては、これくらいの仕打ちはしたくなるのが当然で

あろう。

「え……………そ、それは、なのは達が倒したって言ったから……………」

未だに生きていた脳をフル活動し、記憶に残されていた答えを搾り出し、声にして発する。

普段ならば、何の問題なく行える過程も、今の彼には苦難でしかない。

「それが間違い。この世界の原作キャラ、即ち、貴方以外のキャラクターは全て、あの黒包帯グルグル巻きの男、ギョーブに操られていたに過ぎないんですよ」

「そ……………そんな……………え……………!？」

完全にシャットダウン。

リリース。

再起動も不可能になる衝撃が頭脳を破壊する。

一方的な攻撃で破壊する。

非道な仕打ちで破壊する。

非常な一撃で破壊する。

「可笑しいとは思わなかったのか？ 主の機動六課への入隊がすんなり行えた事。主の異常な能力を周囲が認知したにも関わらず、それを咎めぬ事。機動六課のミスを上層部が何も問わなかった事。主の予言があったにも関わらず、機動六課の面々が原作通りに動いていたこと等等。あれは全て、我が操っていたためよ。そもそも、主や我らが加入した世界が原作通りに進む訳がなからう」

ギョーブは実に愉しそうな声を上げ、簡易的な説明を施す。
その目は猫が笑うように歪んでおり、包帯で見えぬ口元にも笑みが広がっていた。

「そう！　つまりつまり！　この死神少女完成後は全て！　愚弟である貴様が最後に「オリジナル主人公の俺TUEEE！」を存分に満喫して貰うために仕掛けたお芝居でしかないんですよ！」

物語の要約を全てまとめた言葉を言霊^{ことだま}として発射するゼロ。

口から飛び出した弾丸は修の心と脳に直撃し、完全に破壊。

既に真っ白になりかけていた修は、その存在を白へと変化させる。

「さてさて、そろそろ可哀想なので殺してあげますか」

そう言い、ゼロは眠そうな死神少女を優しく、頭を撫でることで起こし、床に下ろす。

少女は二足歩行出来立ての赤ん坊のような足取りで、両足を失った修の下に向かう。

その一歩一歩が修にとって、恐怖であり、絶望でしかなかった。彼にとって、初めて味わうであろう本当の死が、遂にやって来たのだ。

そうして、少女は修の目の前に立った。

「あ……………ああ……………」

「じゃア……………ふワあ……………」

欠伸をしながら、修の頭を蹴飛ばす。

すぐさま頭は首と分離し、一種のボールとなって空を舞う。

驚愕に満ちた表情を浮かべたボールは壁へとめり込み、残った身体からは血液が流れ出る。

それだけで、神崎修という人間は死んだ。

何とも呆気なく。

世界を散々掻き回し、原作キャラに多大な迷惑をかけたキャラクタ―は、完全に死んだ。

「……………よっし！ お疲れ様でしたー！」

修の死を確認すると、ゼロは拍手を部屋中に響かせる。

他のメンバーも同様に拍手喝采。

そうして世界は崩壊していく。

空間が崩れ始め、真っ黒な空間が顔を覗かせて来た。

色や景色は消え始め、始まったのは黒の侵食。

機動六課の面々を閉じ込めていたクリスタルもすぐさま消滅してしまう。

協力者である天海たち一味も今は死体と成り果て、その亡骸も崩壊に包まれていく。

もはやこの原作世界の邪魔をする者はいない。
ようやく、世界は原作通りに進むのだ。

世界の抑止力である、自分達の役目も終わる。

それを証明するかのように、メンバーの身体は徐々に消え始めてくる。

足元からゆっくりと、光の粒子となって消滅していく。

「ゼロ……ありがとう。僕は先に逝くよ」

赤黒い身体を持ちながら、一度見たら忘れられない仮面のような顔を持った化け物は優しく、ゼロに話しかける。

対応するゼロの表情も柔和である。

「ええ……ご苦勞様でした。貴方は唯一、我々から離反した存在でしたが、それでも、私は仲間だと思っていましたよ」

「……………ありがとう」

そうして化け物は完全に光となって、消滅した。

「じゃあ、俺様も逝くわ」

「ええ。気をつけて」

黒い金属メットを被った男は面倒臭いのか、簡素な言葉を述べ、消えていく。

「終焉也。乙」

「はい。最後までそのキャラなんですね……………」

すっかり変わったレーは、最後までキャラを貫き、消滅。

「ああ。今回はやったよ。次はBASARAでもやってみようか」

「貴方は一番、異常でしたからねえ……………それでは」

一番狂っていたかもしれない男は、何処から取り出したビニール傘を差し、回しながら、消滅していった。

「……………」

「では、お疲れ様でした」

風の悪魔は一回頷き、風ではなく、光となって消えていった。

「まあ、今回の戦いは私の案だったんだがね。全く、早く君のせいで最高の駄作になったよ」

「あはは……………す、すみません」

「まあ良い。次は良作を期待するから、上手い人の作品を見て、勉強したまえ」

「しょ、承知しました」

厳しい口調だが、最後は笑みを残し、舞台監督のような男は消え去る。

「さて……………我も逝くか」

「はい。お世話になりました。どうか、安らかに」

「ふん……主が我を造ったのであろうが。もう軽々しく創造するでないぞ」

黒包帯の男性は素っ気なくも、何処か名残惜しそうに延べ、消滅した。

「では、私達も逝きますか」

「……リョーかい」

最後に、自分の近くに戻ってきた死神少女と手を繋ぎ、ゼロと少女も、この世界から消え去った。

ゼロに創造されたキャラクター達は、その存在を完全に消し去り、ゼロ本人の魂は死後の世界へ旅立った。

死神少女はゼロに付いて行き、世界は完全に黒で染まる。

崩壊も終わり、次の世界が生成される。

世界にとっての毒はもういない。

こうして「リリカルなのは」の世界は原作を続けるために動き出す。

これも一種の物語。

常に主人公が勝ち続ける世界は存在する。

だが、絶対に主人公が勝てない世界も存在する。

廻り廻った運命は、此処にて終幕を飾る。

お疲れ様でした。

最終話「初死シュウ」（後書き）

一応、今作の本編はコレで終幕となります。

此処まで読んで下さり、誠にありがとうございます。

次回は軽く、この小説のオリキャラ達を紹介していかうと考えております。

最後に、今作を読んで下さった全ての皆様方に多大なる感謝を。
本当にありがとうございます。

出演者紹介（前書き）

映画やアニメでいうスタッフロール的な感じのアレです。

最初に紹介して、設定内容とかが生かせないのは嫌なので、最後に紹介してみました。

とはいえ、設定に反している部分も多々、ありますが……

本当、力量不足で申し訳御座いません……

出演者紹介

敵キャラ

名称…暴力的な男

性別…男性

性格…狂気

元ネタ…北斗の拳のジャギ様

原作との相違点…今作の方が小物

詳細…世界の抑止力の一人。

暴虐の人物。

典型的な勝てば良いタイプ。

過去の世界ではスバルやなのはに徹底的にぶちのめされた。

故に、抑止力という使命より、己の復讐を優先するようになる。

ショットガンを主に使い、強靱な身体によって繰り出される拳が武器。

名前…ギョーブ

性別…男性

性格…狂気

元ネタ…戦国BASARA3の大谷吉継

原作との相違点…無意識下の優しさの消失、包帯の色、兜の有無

詳細…抑止力の一人。

過去には機動六課の面々にボロボロにされたため、多少の復讐を行う。

だが、主に使命を全うする律義者。

浮遊する八つの珠と気を扱い、記憶すらも操作出来る。

十九回目の世界にて、原作キャラクター達、全てを操っていた。

名前…ゼロ

性別…男性

性格…狂気

元ネタ…BLAZBLUEのハザマ

原作との相違点…外道成分の減少

詳細…世界の抑止力のリーダー的存在。

普段は礼儀正しく紳士的だが、終盤近くではその狂気を剥き出しにする。

「邪気眼」が何よりも大嫌い。

でも自分も邪気眼全開なのは気にしない。

正体は、自殺を図ろうとした主人公を止めようとした際に誤って殺されてしまった

「主人公の兄」

その後、死後の世界に向かう途中で原作蹂躪する弟を喰い止めるために、

無理矢理世界に召喚された。

そのため、主人公に対する憎悪は半端ではない。

普段の紳士的態度は、その狂気と怒りを抑えるため。

今回の物語は、この兄が弟の「最強オリ主の俺、TUEE！」

を実行させてやり、

満足させてから殺してやるために仕組まれたものである。

名前…風魔

性別…男性

性格…無

元ネタ…戦国BASARA3の風魔小太郎

原作との相違点…弱体化

詳細…世界の抑止力の一人。

原作再現を元に作られたとのことだが、元が無口で無感情なために再現し易かったとか。

忍というご都合設定により、神速を誇るようになる。

十九回目の世界で、フェイトと初接触し、以後、スピードがある彼女を抑える役に回る。

名前…レギオン（レー）

性別…女性

性格…狂気

元ネタ…ガメラ2 レギオン襲来のレギオン

原作との相違点…擬人化（笑）

詳細…世界の抑止力の一人。

数の暴力を体現した存在。

何故か中華風な服装を好んで着用している。

巨大な扇を武器にし、十九回目の世界にて、地上本部を襲撃するが、

ヴォルテールに子どもたちごと焼き払われ、瀕死の重傷とな

る。

以後、キャロとヴォルテールに復讐を誓い、憎しみで更に狂った精神でキャロとエリオに迫る。

名前…レギオン

性別…無

元ネタ…ガメラ2 レギオン襲来のレギオン

原作との相違点…容姿以外の全て

詳細…黒く群れで行動する「レギオン」と白く巨大な怪獣である「レギオン」の二種類が存在する。

群れのレギオンは十八回目の世界にて、天海一味に一部が渡され、

劣化だが大量生産が可能な、「擬似レギオン」として生み出された。

白く巨大なレギオンは十九回目の世界にて、ヴォルテールと交戦。

圧倒的な実力差と、ギョーブの操作により、勝利を収める。

また、今作では「王」と称されているレギオンだが、原作では「マザー」と呼ばれており、

「女性」のイメージが強い。

しかしながら、今作では既に「レー」が女性となっているために

「王」という敬称を使わせて頂いた。

名称…赤黒い液状の化け物

性別…不明

性格…狂気

元ネタ…BLAZBLUEのアラクネ

原作との相違点…体色、虫食い言葉の有無、生命の補給の有無

詳細…世界の抑止力の一人。

十二回目の世界にて、終わらない世界に絶望し、発狂。

ゼロたちの元から逃げ出し、一人で神崎修を殺す術を考えるようになる。

考案の末「レリック」に鍵があると理解した彼は、レリックを集めるように。

既に思考すら狂っていたために、「原作世界に存在する物は崩壊時に全て無くなる」

という方式を完全に忘れて、世界が再誕しても、ひたすらレリックを集めていた。

十九回目の世界にて、寝床にしていた地下道に來たヴィヴィオとレリックを襲撃。

後からやって來たスバル達と戦闘になる。

名前…狂人

性格…狂気

元ネタ…無

原作との相違点…無

詳細…様々なパロディを取り入れたハイテンションギャグキャラ。

圧倒的な速度を誇るが、風魔には及ばない。

本人の趣味で手袋の指先に刀身を仕込んだ武器を使用する。

ギャグキャラとしての補正か、ほぼ無敵な存在でもある。

メタ発言すらする。

十九回目の世界にて、ホテル・アグスタを襲撃。

ギャグキャラの片鱗を見せた後、撤退。

地上本部襲撃時には、ギョーブと共に時空管理局本部に、

全員の「洗脳具合」の確認に訪れていた。

最終決戦では、地上本部にてレジアたちを一言も喋らせずに殺害。

追ってきたシグナムをフルボッコにする。

名称.. 舞台監督のような男

性別.. 男性

性格.. 狂気

元ネタ.. MELTY BLOODのワラキアの夜

原作との相違点.. タタリの使用不可、言い回しの劣化

詳細.. 世界の抑止力の一人。

普段は舞台監督のような口調で丁寧に話すが、一旦、テンションが上がると態度が豹変。

早口になり、理解不能な言葉を連呼する。

開眼した際には眼球が存在せず、真っ赤な血の海のみが確認出来る。

十九回目の世界、ホテル・アグスタの襲撃に参加し、シグナムとフェイトを軽くあしらう。

名前.. 天海

性別.. 男性

性格.. 狂気

元ネタ…戦国BASARA3の天海

原作との相違点…優しい、狂気の減少

詳細…ゼロが九回目の世界にて誕生させた存在。

殺した後の神埼修の死骸「バグ」を集め、形を整え、自我を作り出し、

与えた結果、出来上がった。

産まれた直後に産みの親であるゼロを殺害し、以後、様々な世界を飛び回る。

神埼修の死骸であるために、一度、殺されれば死ぬが、超人的な肉体能力は保ったままである。

十九回目の世界では、既に身体能力は落ち始めていたが。

十八回目の世界にて、ゼロたちと協定を結び、共に神埼修を殺すことを約束。

手駒として、ギョーブにより「ナンバーズ」が与えられる。

十九回目の世界の序盤では、気の向くままに殺戮を行い、ナンバーズを育てていた。

機動六課の休日にて、姿を現し、地上本部襲撃時には、その狂気を存分にスバルに与えた。

最終決戦時には、地上本部襲撃時に受けた傷を癒していたが、世界の終わりを察知し、無理矢理復帰。

育てている間に本当に愛情を抱いてしまった愛娘たち「ナンバーズ」を

自らの手で殺すために奔走する。

名前…死神少女

性別…女性

性格…ほぼ無

元ネタ…無

原作との相違点…無

詳細…ゼロによって生み出された切り札。

神埼修の死骸によって産まれた「バグ」、

原作世界にて膨大な力を宿す存在「レリック」、

ゼロの「血液」を混ぜた結果、「神埼修を完全に殺せる上に、ゼロの命令を忠実に聞く存在」

として誕生した。

神埼修に対してのみ、絶対的な力を誇る。

軽く見つめただけで、神埼修の力をゆっくりと消し去ってしまふほど。

彼女自身は感情の乏しい少女であり、ゼロを親兼兄として非常に慕っている。

ゼロに頭を撫でられながら、褒められるのが何よりの楽しみ。

十九回目の世界、序盤にて生み出され、地上本部襲撃時にお披露目された。

神埼修の力の源を大幅に削り、致命傷を負わせる。

最終決戦時には、箱舟「ノア」内にて、ゼロと修の闘いの観戦者となる。

オリジナル主人公

名前..神崎 修

性別..男性

性格..強気、仲間思い、優しい（現実..根暗、弱気、正義感が強い）

詳細..リリカルなのはSとSの世界に転生して来たオリ主

現実世界の神様から貰った「妄想具現化」と「超身体能力」を武器に、

優しき心で全ての原作キャラを救うために奔走する。

その正体は「無意識無限転生者」

自分でも意識していない内に、何回も転生を繰り返す人物である。

前回の記憶が無いので、本人も無限転生者だとは分からないため厄介。

修はこの能力のせいで、何回も世界の抑止力たちと闘うハメに。

実は、修に力を与えた神は修自身が作り出した幻に過ぎない。何かしらのキッカケが無ければ、修は「妄想具現化」を力に出来ないからだ。

理由は「大体の二次創作がそうだから」という理由である。

また、彼がプロログで「寝ていて、目を覚ましたら」という件があるが、

あれも自身を納得させるために作った無意識的な幻影である。

本当の彼は「虐められっ子で根暗のリリカルなのは大好きっ子」である。

高校に進学したは良いが、友達も出来ず、

トロトロした行動がクラスメート達の加虐心を煽り、虐めの対象となった。

何度も虐められた結果、自殺を決意。

台所で包丁を調達し、頭に突き刺そうとしていたところを兄に発見される。

止めようとした兄を誤って殺してしまい、そのまま恐怖で外に飛び出したところ、

車に撥ねられ死亡した。

だが、余りにもリリカルなのは好きだったせいかな、死後、魂はリリカルなのはの世界へと転生。

現実の自分を忘れ、美形で最強のオリ主として降臨した。

最初は世界の抑止力に殺され、事なきを得たが、無限転生により復活。

以後、抑止力とのイタチゴッコを繰り返すことに。

そうして、世界がループを繰り返す内に発生したのがバグである「天海」

（正確には魂が転生しようと身体を抜け出た後の修の死体）

彼は世界や主人公とはまた違った存在のため、唯一、主人公を完全に殺せる存在となった。

だが、バグであるため自我を持ち、主人公を全く殺そうとしないため、ゼロが天海と交渉。

天海の血液と自身の血液、そして大量のレリックを投じて完成させたのが、

バグでありながら抑止力の命令に従う「死神少女」である。

出演者紹介（後書き）

以上で、今作は完全に終了となります。

此処まで見てくださった皆様方、本当にありがとうございます。

内容の修正をしようと考えておりますので、たまに暇潰し程度に見に来て頂ければ、私、感激致します。

では、また何処かでお会いできたら。

読者の皆様方に多大な感謝を込めて。

お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4846p/>

魔法少女リリカルナノハサン

2011年4月10日00時10分発行